
オッサンの異世界記

焼きうどん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オッサンの異世界記

【Nコード】

N0990Y

【作者名】

焼きうどん

【あらすじ】

＜第一章＞異世界に迷い込み、そこで出会ったクワガタに殺されたオッサン。次に気が付くとそのクワガタの子供として誕生していた。

それからちよつとした修業を経て新たな人種であるムシビトに進化したオッサンは旅に出る。

＜第二章＞旅に出たオッサンではあるが、マイペースにのりくりと過ごし、一向に目的の場所へ行かない。そんな旅の道中で理

由なく命を狙われてしまったのだが、なんとか逃げることに成功する。そして逃げ込んだ洞窟の先にあったものとは……

＜第三章＞現在執筆中

《これはオッサンが紡ぐ異世界の物語》

セクハラ紛いの言動があります。

また、若干のチート的な要素があります。

おっさん、クワガタに転生

気が付くとおっさんはクワガタになっていました。

あ、この場合のおっさんって言うのは一人称ね。つまりミーのこと。なぜこんな一人称かと言うと、十五歳離れた従妹に〇〇おじさんって呼ばれるから。や、最初は「おじさんじゃなくてお兄さんだよ」って訂正してたんだよ。でもさあ、なんか三十越えた辺りからどうでもよくなってきた、開き直るように「ああそうさおじさんだよ。なんなら一人称をおじさんにしちゃうぞ」って言ったらその従妹の父親、つまりはおっさんの叔父に「君がそんなんしたら本物のおじさんな俺はどうしたらいい？」って真剣な顔で聞かれたから「じゃあおっさんにします（笑）」みたにふざけたら「じゃあそれで決定的ね」っていい笑顔で従妹が言った後に引くに引けなくなるとこまで持ってた今に至るといふ感じ。

んで、話を戻すけどおっさんはこれでも元々人間だったわけよ。

じゃあなんで今はクワガタなのかつーと、よくわかんない。

でもある日ふと気付いたら森の中にいたんだ。それまで住宅街を歩いていたのにいきなりよ？

こりゃ白昼夢かと思ったけど妙にリアルな感触や匂いを感じた。だが夢だとこの時は思ってたんだ。だって、おっさんはまだDTな中坊の頃に同じような超リアル夢を見たことがあるからね。「あ、こんなにリアルな夢は久しぶりだ」って感激してたもん。ちなみにその時の夢は思春期特有の可愛らしいエロ夢だった。巨乳なロシア娘（ここが重要ポイント）を口説いてそのたわわなおっぱいを揉む。今でも覚えているあの感触は現実で触れた数人の女性の胸と比べると極上だったと言わざるを得ない。

え？ おっさんがリア充？ 現実で女性の胸を揉んだだけで何言ってるの！

言っとくけどね、ほとんど素人さんじゃないから。つーかおっぱいパブだよ。いわゆるお金の関係です。

いや、結構良心的なお値段なんだよ？

諭吉さんが財布からフライアウェイしていくお風呂に比べればなんてこともないじゃないか。

おっと、パブの話はもういいね。

んじゃクワガタになつた経緯を説明しようか。

夢だと認識しながらもおっさんは森を歩いて美人なお姉ちゃんを探しました。いや、夢だからこそ探したんです。深くはツツこまないでね。オッサンという生き物は若人と違う意味で性欲が旺盛なんよ。不倫してんのは大体オッサンだからね。

ちなみにオッサンと心の中でカタカナ表記してるのが世の中に漫然と生きるおやじを表してます。

閑話休題

そして森の中を彷徨っていた時に出会ったのがつかいクワガタ。どんだけでかいかと言うとおっさんが横になつて寝た時より幅が広くて、クワガタの目線がおっさんくらいの高さまである。長さはおっさん二人が縦に寝れるくらいかな。まあ、言ってしまうえばライトバン（車）くらいの大きさかな。

んで、「うおーでけえ……」っておっさんが感心していると、そいつたら顎はなを広げておっさんのことをジョッキンコしちゃった。

どこまで顎を閉じれるねんっ！　ってツツコミたくなるくらいに顎を閉じられたせいでおっさんは死んじやった。ま、幸いなことに痛みを感じる前に死んじやったから実感わかないけど。でも確かに死んだ。

んで、起きたらクワガタだったわけさ。

なんでって聞かれてもおっさんにもわかんない。ほら、あれじゃね

？ 死して尚、魂だけは身体に宿っていたが、クワガタがそれを喰ったせいでその子種に魂が宿りました的な？
うん、わかんないからこれでいいか。

おつと、説明不足だったけどおっさんは多分おっさんを殺してくれたクワガタの子供として生まれました。なぜ多分なのかはクワガタの区別なんかつかねーよってことでご理解いただきたい。

クワガタの子供だったら幼虫じゃねーの？

と思うかもしれないが、確かに幼虫だったよ？ 生後三日目までは

……

このクワガタ異常に成長はえーの！ しかも卵は地中に産むでもなく地面の上に産んで両親が子育てまでするんだ。おかしいけどあんまりに普通なんで受け入れちゃった。

そしたら生後四日目の朝、起きたら蛹になってた。

そんな時に脳内（あるかどうか不明だがこうして考えることが出来るのだからあるのだろう）で【キラースタッグビートル（幼虫）はキラースタッグビートル（蛹）に変態しました】って聞こえてきた。

誰が言ってるか知らないけど変態はないだろ？ 確かに昆虫が幼虫から成長していく段階は変態って言うのかもしれないけど、オッサンに変態は禁句だよ！ もう少しオブラートに包んで欲しいよまったく！

てゆーかキラースタッグビートルっておっさんのことだよね？ ま、長いからK S B って勝手に言ってるけど。

そんなこんなK S B（蛹）のまま飲まず食わずで一週間過ごしました。正直これ以上はきつーいと思ってたんだけど次の日起きたら【キラースタッグビートル（蛹）はホワイトキラースタッグビートルに変態した】という脳内アナウンスが流れた。
だからもう少しオブラートに（略）

まあ、無事に成虫となったわけだが黒光りしてる父親とは違い、お

っさんは白いクワガタになった。勘違いしてはいけないのが、おっさんが特別なわけじゃなくて蛹から孵った他のクワガタ（兄弟達）も皆白いんだよ。

時間が経ったら黒くなるということもなく、成虫になったんだから出ていけとばかりに追い出されてしまった。

そして今に至るというわけ。

こうゆう時は解説役なのがいってくれと助かるのだが、両親も兄弟も「キシャーキシャー」的な発音しか出来ないから何もわからないし、クワガタのボディーランゲージもイマイチ伝わらない。ということでおっさんは途方に暮れているのです。

兄弟は皆、何処かへと行ってしまった。

おっさんは一人（匹？）寂しく森の中を歩き続ける。

うん、予想外に疲れない。

運動不足やタバコの影響でここんとこ体力ががた落ちしてたのが嘘のようだ。

っかよく考えたらおっさんの背中には翅があるじゃないか。よし、ならば人類の夢である舞空術でもやってみようかな。

アイー、キャン…… フラァーイ！

…………… あれ？ どうやったら飛べるわけ？

おっさん、食べる

結論から言おう。

おっさんは飛べました。

要領的には瞬きを高速でしながら歩いてる感じだ。

しかし、地面から三十センチくらいをホバリングしてるだけである
と言っておく。

それでも飛んだことに変わりはなく、おっさん的には大満足な結果
です。

さて、飛行実験も終わったし次は何をしようか……

うん、決めた。

まずは飯だ飯。

おっさんと言うか、このクワガタの食糧は樹液というわけではなく
(しかしスウィーツ感覚で食べることがある) 肉だ。

おっさんがまだ幼虫だった頃は両親が採ってきてくれたのだが、今
は自分で調達しなければならぬ。

この体になっておっさんは好き嫌いがなくなった。

今では何食ってもうまいと感じる。

三十過ぎた頃から肉派から魚派に転職したはずなのにね。

野菜はこの体になってから食ったことはない。

だから本日は自生している野菜的なものとか果物的なのを探して食
おう。

やっぱこの年になってくると体が健康面を考慮しはじめるのか無性
に野菜が欲しくなる時があるんよ。

つか何より野性の獣狩るのとかおっさんにはレベル高すぎ。ロッ

ブイヤーさんみたいな動物に角生えてる奴とか黒い毛並みの狼的な動物とか、ぐるぐる唸りながら二足歩行してる熊さんとかいるんだけど……おっさんには無理。

とゆうわけでここに生えてるキノコって食えんのかな？

なんか黄色いけどおっさんの好きななめことかも黄色っぽいしイけるだろ。

お、そこそこうまい。

……………あれ？ か、身体がしび、れて……………う……………ご……………け……………

【ホワイトキラストッグビートルは麻痺状態になった】

↓数十分後↓

【ホワイトキラストッグビートルは麻痺回復力上昇のスキルを得た】

いやー参った。

ありゃ、ダメだわ。

素人がキノコに手を出しちゃいかんね。

食えるキノコによく似た毒キノコもあるってことを失念してた。毎年中毒に陥る人がそこそこいるから気をつけなければな。

と、そうこうしている内に林檎のような赤い果実を発見した。おっさんの出身地の影響もあってか、ほとんど躊躇わずにぱくりとひと飲み。

【ホワイトキラースタッグビートルは毒状態になった】

あれ？　なんか目が霞むと言つか、苦しい……

お、おえ……

きぼぢわるい……

〽二時間後〽

【ホワイトキラースタッグビートルは毒回復力上昇のスキルを得た】
ふう、あーきつかった。おっさんがこんなに体調悪くしたのって高校の時に友人からインフルもらって寝込んだ時以来だよ。

それよりも食える物を探さねばな。

こうなったら野草を食つか。

お、これ山菜じゃね？

おっさん田舎育ちだから山菜はわかんよ。おっさんの祖母がよく採ってきてたからな。

あれ……　なんだか眠く……

【キラースタッグビートルは睡眠状態になった】

〽数時間後〽

【キラースタッグビートルは睡眠回復力上昇のスキルを得た】

いやー、なんか知らんけどよく寝た。

でもなぜだろう……

眠ったのに疲労感やその他が解消されてない。

ま、いつか。食える野草なわけだし。

もう一つ……ぐう……

【ホワイトキラースタッグビートルは睡眠耐性のスキルを得た】

ん？ 痛っ！？ なんか痛っ！？

チクチクとした痛みを意識が覚醒する。

何事かと思つて周りを見渡して見れば、おっさんをロッピーヤアが角で突き倒していた。

なんつーか地味に痛い。

爪楊枝で肌を刺さるほどの力ではないけどつんつんやられてる感じ？
まあ、弱肉強食って奴かね？

そりゃ無防備に寝こけてる奴がいたら好機とばかりに襲いますよ。

とゆーわけでおっさんは逃げます。

戦わないのかって？

いや、おっさんに実害はないわけだし、何より兎を殺すのがめんどい。

ホバリングしたおっさんのスピード舐めんなよってことでその場から離脱したわけだが、腹減った。

あれだね。結局あんまり食べてないもん。

じゃあ何を食うかって言うと木の根っこだ。おっさん今、虫なわけだし木の根っこも食えるでしょ。

とゆーわけで早速地面を掘る。

ほどなくして根っこを発見&ゲット。

いただきまーす！

【ホワイトキラストッグビートルは混乱状態になった】

あれ？　なんでおっさんはこんなところで根っこなんか食べてんの？

あ、やべ……炬燵の電源切ったかな？

いやいやそれを言うならガスの元栓の閉め忘れも……

あーおっばいで癒されてー……

【ホワイトキラストッグビートルは混乱回復力上昇のスキルを得た】

はっ！？

おっさんは今何を……

とゆーかなぜだかソープに行きたくなった。

その後、おっさんは生き物を狩ることなく自生してる植物などを食って生き抜いた。
最初はなんか変な状態になるけど何回も食べてると平気になってくるのよ。

そんなこんなおっさんがクワガタになって三ヶ月が過ぎた。

【ホワイトキラストッグビートルは麻痺完全耐性のスキルを得た】

【ホワイトキラストッグビートルは毒完全耐性のスキルを得た】

【ホワイトキラースタッグビートルは睡眠完全耐性のスキルを得た】
【ホワイトキラースタッグビートルは混乱完全耐性のスキルを得た】

【不殺・特定の状態異常耐性・行動範囲が森のみで三ヶ月生きるの
特殊条件を満たした。ホワイトキラースタッグビートルはエメラル
ドスタッグビートルへと変態した】

【エメラルドスタッグビートルになったことで森の加護を得た。以
降森での行動に補正が付きます】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで木々の声のスキル
を得た】

【エメラルドスタッグビートルは変態したことで植物成長促進のス
キルを得た】

朝起きたらおっさんはキラッキラの濃い緑色になってました。

おっさん、初めて会話する

いやー驚いた。

起きたら緑のおじさん（クワガタ）になってたとか何の冗談よ。

っーかまた変態言われた。

おっさんはダンディなロマンスグレーなのに……

いや、今は緑だからロマンスグレーじゃねーや。ロマンスグリーン？
とゆーか緑になって何か変わったわけ？

あ、保護色か。

森の中でうんたらかんたら言ってたのはそうゆうこと？

それよりもまた適当に食い物探しますかね。

お、赤い果実はっけーん！

『それ、毒あるわよ』

「いや、おっさんには効きませんから」

毒完全耐性とかゆーの持つてるからね。

この三ヶ月の間に色んな毒性植物を食った結果だよ。

今では一口食べれば「あ、毒ある」ってわかるんだよね。

その他の耐性のおかげでおっさん何食っても大丈夫。

『そうなんだ』

「そうなんです」

『じゃあ、もつと毒が強力な実を作った方がいいのかな？』

「いや、あらゆる毒植物を食った毒マイスターなおっさんの意見を
言わせてもらえば、この実はそこそこのレベルの毒を持ちながらも
毒っぱい臭いがしないんだよね。その点は摂取する側としては嵌め
られた感がある」

『そつか。ならこのままでも生き物を毒殺するのは訳無いのね』
「そうそう。ま、おっさん以外はね……って誰っ？」

おっさんと今まで会話してたのは誰ですか？
しかし、周りを見回してもそこには誰もいない。

『クスクス』

なんかおっさんを笑ってるみたいな音が聞こえるがそこにはやはり誰もいない。

「……幻聴？」

寂しいおっさんの心が作り出した。エアなボイスだったのか。
おっさん的には幻聴よりもきわどい水着のおねえちゃんの幻影が見える方が良かった。

ここで全裸のおねえちゃんじゃないのは、逆にエロさが消え失せてしまうからだ。

森で水着はエロいが森で全裸ではエロさが足りない。

これが分らん奴は性欲に真っすぐな青い小僧だ。

そして「その水着って葉っぱ製ですか？」と考えた奴は誇っていいぞ。お前は立派な戦士だ。履歴書の職歴に戦士と書きなさい。

おっさん？

おっさんはただのオッサンです。それ以上でもそれ以下でもありません。

『幻聴じゃないよ。とゆーか聞こえてたことに私がビックリ』

また声が聞こえる。

どこだ……どこにいらんだ。

声が優しげなおねーさんっぽいからきつと美人に違いない。

「頼むからおっさんに姿を見せなさい」

『こつちよ』

声のした方向に目を向ければそこには先ほど食べた果実のなる木しかない。

『そう、あなたが今見てるのが私』

おっさんが見てる方向には先ほど食べた果実のなる木しかない。

「所詮は幻聴か……」

『いやいやいや！ 私だつてば！ その見つめてくれてる木が私』

木が私つて……

幻聴さんとはんだファンタジー思考によって作られたものみたいだな。

やれやれ仕方ない……

「これか？ これがええのんか？」

おっさんはとりあえず木を舐め回した。

さて、脳内の妖精さんよ。どう反応するんだい？

『や、やめて……まだ樹液は外に出てないの。私、まだ傷がついた経験がないから……』

なんかやたら艶っぽい感じで返してきたな。ここは良いではないかとか言いながら続けるべきか……

一度整理してみよう。

脳内でエアな相手を作り、それを木に見立てて会話し、その木を舐めるおっさん……

うん、気持ち悪いね。

絶対に友達になれないし、友達もいない（変態仲間はあるかも）

「おっさんは馬鹿だっ！」

「え、そんなことないよ。気持ち良かったし」

「植物を満足させて何が楽しいんだっ！」

「なんか……ごめんね？」

「いや、君は悪くない。悪いのは全部おっさんだ」

「元気を出して」

「慰めるなよ馬鹿野郎。優しくされるとおっさん付け上がっちゃうからね」

「あのーちよつといいつすか？」

「あ、はい。何ですか？」

「こつちちよつと光合成に集中してるんで、もう少し静かにしてもらつていいつすか？」

「ご、ごめんなさい」

「いやいや、君はまだ若いから仕方ないつすよ。おーい、誰が一番酸素作れるかの競争再開しよつす」

「うーい」

「おけ」

「任せんしゃい」

「なんか脳内音声が増えた……」

しかも酸素を作る競争とかしてるし。

正直ありがとう。あなたたちのおかげでおっさんらは生きていけます。

そしてごめんなさい。おっさんは二酸化炭素を吐き出すためのダメ生物です。

『なんかますますへこんでるね。大丈夫、ちょっと注意されただけで杉690452さんも怒ってないから』

なんかまた慰められた。

とゆーかおっさんに対して「お母さんもう怒ってないから大丈夫だよ」って近所のお姉さんが言う感じなのはいかなものか。ま、そういうの大好物ですけど。

「さすが脳内音声。おっさんの好みを熟知してやがる」

『さつきから脳内音声って言ってるけど違うよ?』

「はいはい。わかってるわかってる」

嘘ついた子供に「お前嘘ついたろ?」って言っても「嘘なんかついてないよ」って返してくるようなもんだな。

おっさんの脳内は生まれ変わったせいか思考が若々しいらしい。

『いや、私と会話できるってことはあなたそうゆうスキル手に入れたでしょ? 心当たりある?』

む? 何やら必死だな。

「はいはい。例えば何があるのかな?」

『えっと、木々の声ってゆーのが代表的なものだけど……』

木々の声ね。うん、確かそんな感じの起きたら手に入れてたかもね……って

「え、うそ、やだ、まじ？」

『あ、やっぱり？』

こいつぁおでれーた。

木の言うことが本当ならまじでおっさんは木と会話してたわけ？

なら、あの変態行為も……

「色々すまんかった。許してちょんまげ」

『……うん、許すよ。あと、くそ寒い』

なにはともあれおっさんは初めて誰かと会話が出来ました。

おっさん、大樹と話す

おっさんは今、森の奥へと向かっている。

厳密には奥とかそうゆうのはおっさんにはわかんないけどクドゴリン247526（毒の果実の木）が言うにはおっさんが向かう方角は森の奥らしい。

そしておっさんがなぜ森の奥に行くかと言うと、森の奥には森の木々の中でも長老的な存在がいるらしいからだ。

なんか「樹齢一万年を軽く越えるから物知りだよ」とのことで、年功序列なおっさんのにも話を聞くのは悪くないと思ったからだ。

道中で道に迷いそうだったらそこらにある木に聞けばいい。とゆーか木達はおっさんに結構フレンドリーだ。

曰く、「木仲間以外で話をするなんて滅多にない」とのこと。

全くないと言う奴は全体の三割ほどらしく、時たまおっさんみたいな木々の声のスキルを持つ者と会話したことある奴もいるわけだが、そいつらの話を聞くと、どうやら人間やエルフという耳が長い人間、獣人という獣臭い人間がいるらしい。いや、エルフとか獣人は人間に数えんのか？ と突っ込んだが、どうやら木達にとっては二足歩行、ある程度の知性の二つがあれば人間としてカテゴライズしてるらしい。おっさんがわかりやすく解説すると乳牛も肉牛ももれなく牛ということだ。えっ？ 違う？

それにしてもこの木々の声というスキルは便利だ。

どこに他の生き物がいるのか教えてもらえるし、何よりどの草が食えるとか自分の実は美味しいとかを知らせてくれるのが何よりありがたい。

これで食料を確保するのは楽というものだ。

そんなこんな進んでいくと開けた場所に出た。

そこには陽光を反射し、キラキラと輝く湖があり、その湖の中央にある小高い丘に大樹が聳えていた。

「綺麗だな……」

どこか神聖な空気が漂うその光景に無意識に言葉が漏れる。

おそらく長老的な木というのはあの丘の大樹に間違いないだろう。

おっさんは翅を広げてその大樹の元へと向かった。

エメルドスタッグビートルに変態（相変わらずこの表現は不服だ）して一メートルほどの高さまで飛べるようになったのは果たして喜ぶべきことなのだろうか。

「こんにちは」

大樹の元に降り立ったおっさんは第一印象が大事とばかりに挨拶をする。

いや、まじで第一印象は大事よ？

対人関係なんて第一印象で物事が進むからね。ただし、第一印象が悪いとそこから挽回するのは大変だけど、第一印象が良いところから悪くなる場合は前者よりもかなり早いことも付け加えておく。

『ほむ、こんにちは』

おっさんの挨拶に大樹が返す。

『話は根っこワークで聞いとるよ。して、何をわしに聞きたいのかね？』

ちよいと待ちなさい。

根っこワークって何やねん。ここはツッコむべきか？

いやいや、初対面の相手、しかもかなりの年上にいきなりツッコむとかどうなのよ。

でも、上司が「今の若者はわからなくても人に聞くということがない」ってちよいぎレで愚痴ったりすることから考えれば、ツッコミはしなくともわからないなら聞くべきか。

そもそも大樹も聞きたいことがあるなら聞けよ的なスタンスみたいだしな。

「まず、第一に根っこワークってネーミングは誰が付けたんですか？」

知りたいのはこれだ。

根っこワークの説明？　んなもんネットワークにかかったもんだろ。それを根っこで行うから根っこワークだ。予想でしかないけど多分合ってるはず。

『ほむ、難しいことを聞くのう。根っこワークは根っこワーク。昔からそう呼んどった。特に意味はない』

「簡潔な説明ありがとうございました。お蔭様でよくわかりましたよ」

大樹に対して礼を言う。なんか嫌味に聞こえるかもしれないな。でも納得はしてるんだよ？　意味のない名称なんてあるところにはあるわけだし。これもその一つなのだろう。

さて、次の質問に行こうか。

「それで次に聞きたいことなんですが、ここって何処なんですか？」

ある意味これが一番聞きたいことだ。

他の木々に聞いても同じことが返ってくるだけなのだが、もしかしたらこの大樹なら――

『ほむ、なんじゃ、自分が暮らしてる場所もわからんのか？　ここはミズドリウムの森じゃ』

しかしこの大樹もまた他の木々と同じ言葉を返す。

確かに”ここ”という場所を表す言葉ではあるがおっさんが聞いたのはそうゆうことじゃないんだよね。

「聞きたいのは森の名称じゃなくて、ここが何処の国に属しているとかなんですけど、ご存知ありませんか？」

当然、この質問も他の木々で試している。しかし、返ってくるのは「わからない」ばかりだった。

『ほむ、確かプリオ二公国じゃったかの……五千年くらい前の話じゃが』

知っていた。

大樹は自分が生えてる国を知っていた。ただし、五千年前ではあるが。

五千年つつたら縄文時代とか弥生時代とかまで遡るよな？　もしかして類人猿？　おっさん、歴史は苦手だからわかんない。でもそんなに古い昔の話。

さて、プリオ二とか言うやたら可愛らしい国におっさんは心当たりがない。しかし、もしかしたら過去にあった可能性も否定できない。だが、見たこともない生き物やエルフや獣人ってことから、ここは

ファンタジー世界だという可能性がおっさんの中では一番大きい。
まずはこの辺を確かめるか。

「地球とか日本、アメリカ、中華人民共和国、アフリカ、ソビエト連邦、オーストラリア、ユナイテッドキングダム・オブ・グレートブリテン・アンド・ノーザン・アイルランド。この中で一つでも聞いたことのあるものはありますか？」

『ほむ……残念ながらわしの記憶にはないのう』

「根っこワーク使ってもですか？」

『ほむ、ちよつと待っておれ……なんじゃったかのう？』

もう一度、今度は一つ一つ聞いてみる。

十分ほどの沈黙が流れ、おっさんの目が空の雲の動きを追っている
と不意に大樹に声をかけられた。

『ほむ、残念ながらわしの根っこワーク圏内にはわかるものはおらんようじゃ』

ほむ、誰も知らないか。あつ、移った……おっさん、ドントマインド。

まあ、大樹には悪いがあまり期待してなかったけどね。

これでおっさんのファンタジー世界じゃね？　って想いがちよつと大きくなった。ちなみにおっさんの中では最初からファンタジー世界ではば確定している。

けどどっかの誰かが言っていた何事にも絶対はないの言葉を尊重してそうだったらいいなとばかりに地球のどこかだという余地を僅かに残しているに過ぎない。

「わざわざすいませんでした。そういえばなんですけど、おっさん……私は元々人間だったんですけど、ある日大きな黒いクワガタ……

ブラックキラースタッグビートルでしょうか……に殺されて気付いたらその幼生体になってたんですけど、その現象に関して何かわかりませんか？」

わざわざ黒とかブラックってクワガタの前に付けるおっさんはいじらしい存在ではなからうか。

『ほむ、それは興味深い。この森の主的存在であるブラックキラースタッグビートルに殺された人間というのはわしもいくつか心当たりがある』

ほう、詳しく聞きたいものだ。

そして主的存在ということはつまりブラックキラースタッグビートルはおっさん（クワガタ）の父親クワガタしかいないらしい。

さて、本邦初公開。おっさんの母親の色は灰色である。実際森の中でたまに見かけた両親以外のキラースタッグビートルには実に灰色が多い。

『ただ、森に入って運悪く奴に出会ったがために殺された人という存在はそこそこいるでな。特定は出来ん』

『あ、えっと見た目は四十手前くらいのオッサンなんですけど……』『すまぬが特徴を言われてもむしろにはようわからん。それがエルフや獣人、人間などの種族じゃったらわかるんじゃが個人の特徴は雄か雌かくらいしか……の』

「いえ……」

まあ、それは仕方ないこともな。

何せおっさんだって木を見て個別に判別するのは無理だ。

それが桜か銀杏かはわかっても桜の木の内のあるこれは傷があるなどの特徴がないと厳しいものがある。そもそも意識して見なければ

それはただの桜としてしか見ない。

……ん？ よく考えたらおっさんにはやたら目立つはずの特徴があったじゃないか。

「あ、あの！ ある日突然森の中に現れた人間。そうゆう人物に心当たりは？」

おっさんは気付いたら森の中にいた。

それならば不自然な人物として目立つたはずだ。きつと注目を集めたはず。

『根っこワークで聞いてみよう……ほむ、確かにいたみたいじゃない？』
「マジですか！？」

いかん。興奮して敬語じゃなくなってしまった。落ちつけ落ちつけ！。

「本当ですか？」

『ほむ、だいたい六百日くらい前にそのような人物がいたそうじゃろっ……』

予想以上に前だったために驚きに言葉が詰まってしまう。

『ほむ、すまなんだが目撃したものもよく覚えておらんらしい。何せ紅葉の前じゃったみたいだし、いきなり現れたと思ったらふらーっと歩き出して殺されてしまったらしくてのう』

「そうですか……」

夢だと思って歩き回った結果、でかいクワガタに出会って死んだわ

けか。

他人（他木？）から見たということを書いて考えるとなんとも
マヌケなことだ。

まあいい。切り替えよう。

なぜならおっさんは最近加齢臭がきつくなってきた身体から入浴剤
の森の香り（エメラルドスタッグビートルになってからふと嗅いで
みました）みたいな匂いのクワガタになったのだから

第二の人生、この身体で楽しんで生きていこうじゃないか。

おっさん、大樹と話す（後書き）

ヒロインを出せる気配がない……

あと数話は出てきません。とゆーかクワガタと木だけであと二、三話やる予定です。

ここだけ聞くと昆虫の観察日記みたいですな。

プロットらしきもので流れはラストまで大体決まっていて、あとは思いつくままに肉付けって感じで書いてます。

早くヒロイン登場まで書きちゃいたいけどペースが上がらない……

ああ……早くオッサンに真っ当なセクハラさせてえよ……

愚痴ってすいません。

読んでくれてありがとうございます。

出来ればこれからも拙作にお付き合いくだされば嬉しいです。

続おっさん、大樹と話す

『さて、わしからおぬしに尋ねたいことがある』

唐突というわけでもないが、大樹がなにやら物々しげに声をかけてくる。

こうゆう時って物語だと得てして厄介事に巻き込まれたりするんだよな。おっさんそうゆうのノーサンキューなわけよ。

「黙秘権を使用します」

どうだ！ きつぱりと断ってやったぜ。

おっさんはノーと言える日本人。上司が帰りに呑みに行こうと言っても奢り以外では行きません。奢りなら限りなく百パーくらいで参加するけどね。

ちなみにおっさんは25歳以上の女性（発育は平均以上）でないと興味がないので「新入社員の若い女の子達も来るんだよ」と言う誘い文句に踊らされない。ただし、「中川さん（36歳・既婚）も来るみたい」にはほとほと弱い。中川さん、美人で胸がでかいからね。おっさんの好みどストライクなのさ。人妻？ おっさん的にはその響きは世界一のバイオリニストの演奏並におっさんの心を奮わせます。

ただ、肩にポンと手を触れただけで「セクハラですよ」と言われるのはいかななものか……

その癖、他の社員の男（美形）に同じことされても「なに、偉そうにしてんのよ」とかまんざらでもない顔で言うんだよね。

不快感を感じたらそれすなわちセクハラ。日本政府よ……ちゃんと境界線を決めてくれ。あつ、今居るのはたぶん日本じゃねーからおっさんには関係ねーか。

『して、何を尋ねたいかと言うとじゃな』

ん？ あれ？ おっさん黙秘権使ったよね？
なんで話が進んでんの？

『人という種についてじゃ』
「はあ」

言っちゃったよ……

こっちが黙秘権使ってるのに聞いてきやがったよ。
これ、もう聞くしかない？

「どうゆう事ですか？」

『ほむ、人という種になりたくはないかということじゃ』

よくわからん。

でも、なりたいかと聞かれればなりたいわけだが……

「なれるんですか？」

『可能性の話じゃが……わしが見たところ、おぬしには人という種になれる可能性が高い』

「どこら辺がですかね？」

『その前に人という種がどうやって誕生したか知つとるかの？』

人がどうやって誕生したか。

これは歴史が苦手なおっさんでもわかる。

猿から類人猿。そして類人猿から人へと進化していくことで人が誕生したはずだ。いわゆる進化論だな。

まあ、アメリカなんかじゃ神様が全て造ったと言う創造論を信じて

る奴がかなりいるらしいが、おっさんは断然進化論を信じてる。

「えーと、神様が造った。または別の生き物から進化した。この二つが考えられますが、私は後者だと思います」

『そう、それが正解じゃ』

正解って言われた。クイズだったの？

『人という種は進化によつて元よりも優れた力を得た。まずはじめに妖精の中から進化した最初の人という種が現れ、自らをエルフと名乗った。次いでエルフが作り出した無機物に命を吹き込んだ物、つまりはゴーレムから人に進化した者が現れ、ドワーフと名乗った。次に四足の獣の中から進化した者が生まれ獣人と名乗り、その次は水の中で生きる者から進化した者は魚人と、最後に二足で歩行する猿は人間と名乗ったのじゃ』

「そうですか」

だからなんだよって話。

「つーか人間はやっぱり猿から進化したのな。獣から進化した点では獣人とやらと同じだが、きつと獣耳がないのだろう。あとは、見たことないからわかんね。」

『その進化した条件はなんじゃと思う？』

「さあ？ わかりません」

『少しは考えて欲しいんじゃないかな。まあ、よい。人に進化したものにはある共通点があったのじゃ。それは……知恵と魔力。そしてその魔力を扱う技術じゃ』

「なるほど」

わかったようなわからないような……

で、それがなんでおっさんが人になりたいかどうかの話に繋がる？

『わしはおぬしを見て、言葉を交わした。その結果、おぬしは人と同じような知恵を持っているとわかった。いや、おぬしの言葉を信じるならば人であった存在がスタッグビートル種へと知恵をそのままに生まれたことになる』

「……要約すると？」

『わしは長年生きてきた。そのうえで、初めて人へと進化できる可能性を持つ虫を見つけたのじゃ。じゃからおぬしが人に進化したいと言つのならば、手を貸そうと思つての』

「なんでそんな一文の特にもならないことを？」

ぶっちゃけ裏があるだと勘繰つてしまう。

おっさん、これでもドロドロした大人の世界にいたからね。

こうまで親切にされることに抵抗感があります。

『ほむ……いいじやろう、話してやろう。まず、最初にエルフに進化した者はタファンの森という場所に現れた。ドワーフもタファンの森が最初じゃ。次に獣人はバコタの森で生まれたのじゃ。魚人はどっかの海。人間はテロンの森の猿が進化した種なのじゃ』

どこで進化したとかどうでもよくね？

『で、根っこワークで一年に一度超長距離根っこワーク会議があつての』

もはや根っこワークはどうでもいいんですけど。

『あいつら何年経つてもそのことを自慢げに話して悔しいんじゃ！』

……は？

『じゃからおぬしを進化させて、新たな人の種に立ち会うことで自慢したいんじゃない。じゃから、な？ 一緒に頑張ろ？』

こいつ、他の木に自慢してーだけだよ。

「やってやってもいいけど、世の中はギブアンドテイク。おっさんが進化することであんたは他の木に自慢出来る。だけどおっさんにあんたは何をくれるわけ？」

おっさんの中で大樹のランクが下がったことで発言がかなりおざなりになった。

ちなみに人に進化出来るならそれだけでおっさんには利益がある。しかし、相手にお前が言うから仕方なく進化してやるんだぜってスタンスになることによって恩着せがましく、もっと色々な物を引き出そうとこ狡い活動中です。

『ほむ、それは進化できてから決めようではないか』

……腐っても（物理的には腐ってないけど）一万年以上を生きる大樹か。

ここです承すれば、進化出来たとしても「ほむ、進化できたんならそれで十分じゃないかのう」とかい出し恐れがある。なんとしても言質はとつかねーと。

「なんか役立つもんくれ」

『とは言っても、所詮わし木じゃし』

「一万年生きてるならなんかあるだろ」

『ほむ……そうじゃな。ならばわしの力を与えよう』

「与える？ どうやって？」

『わしの力を濃縮して実を付けるんじやよ』

おっさんには大樹が不敵に笑ったような気がした。

続おっさん、大樹と話す（後書き）

まず初めに、この物語はファンタジーです。

猿から人に進化するには何十年、何千年、何万年かかったとか言うツツコミは聞きません。

なぜならファンタジーだからです！

大切なので二度言いました。

納得できない部分はこれewithにか誤魔化してください。

なお、ファンタジーでも説明出来ないような疑問があれば質問はありです。答えるかどうかは別ですが……

ただ、出来る限りは答えたいと思います。

作中に出てきた中川さんですが、私の書き方のせいで感じ悪い人に見えるかもしれないですけど、実は悪いのは全部オッサンだったりします。一人称なのでそこらは書けません、悪いのはオッサン。

これだけはわかって欲しい。

ちなみに裏設定では中川さんはオッサンと同期入社。

機会があればそこらも書こうかな……

おっさん、修業する

その後、大樹によってプロデュースされたおっさん進化計画が実行に移された。

人になるために必要な物は、知恵・魔力・魔力を扱う技術の三つ。その内、おっさんは知恵の面はクリアしている。

しかし、魔力に関してはさっぱりなのでそこを一から習得していくことになった。

以下はおっさんの魔力を感じられるようになるための修業のメモリアルです。

『まずは体の内に眠る魔力の波動を感じるんじゃ』

「……具体的な説明を求めます」

『カーッとやって、グーとする感じじゃ』

「カー……？　グー……？　擬音って本人以外にあんまり伝わんねーよ。おっさん感覚派じゃなくてわりと論理派なところあるし」

『ほむ、そうじゃのう……己の中にあるドロドロしたものを吐き出すかんじかの？』

「わかった。部長のハゲーツ！　ツラの癖に偉そうにしてんじゃねーよ！」

『言葉の意味はよくわからんが多分違うぞ？』

「あんたの言った通りにやっただけど？」

『違う。魔力はもっと熱いもんじゃ。こう……人で言う情熱的なパトスって奴なんじゃ！』

「それならおっさん得意だわ。すう……イメクラで赤ちゃんプレイとか女教師プレイがしてー！！」

『それも違う』

などという、客観的に見ればなにやってんのこいつらの押し問答を三日ほど繰り返した結果、

おっさんは

魔力を

感じられなかった。

「ーか当然だよ。

おっさん今まで魔力とか言うのと無縁だったし、なにより教師役の大樹がクソの役にも立たない無能だ。

おっさんは悪くありません。

『ほむ、おぬし才能ないのう』

くおっ、面と向かって言われるとは……

はいはい、正直「魔力を感じるくらいなら一日で出来るようになるじゃろ」とか言われていい気になってましたよ。

薄々、おっさんには才能ないなって思ってた。

しかし、あれだな。へこむわ。俯くほどじゃねーけど、暗い気持ちにさせられる。

『落ち込むでない。内的魔力はダメじゃったが、まだ外的魔力があるわい』

大樹の言葉によっておっさんの暗かった視界に一筋の光が差し込むような幻が見えた。

「その話を詳しく」

『今までの修業は己のうちにある魔力、つまりは内的魔力を感じるためのものじゃった。しかし、他者から放出される外的魔力を吸収し、己の物とする。利点は魔力の波動がわかりやすく、扱いやすい事じゃ』

だつたらなんでもっと早く教えてくれないのかと思うが、教えなかった理由つてのもあるのだろう。利点があるってことは欠点もあるだろうし。

「よし、教えてくれ」

だがおっさんに迷いはない。

なぜなら早く人になりたいからだ。

いやー、声に出してからイメクラ行きたくてたまんねーのよ。もうおっさんの体内時間で四ヶ月は行つてねーもん。

でも、クワガタとお医者さんごっこがしたい女性がいるだろうか？

クワガタなおっさんを鞭でシバき倒しながら罵倒してくれる女王様がいらっしやるだろうか？

もしかしたら世界のどこかにいるのかもしれない。だけど探すのはめんどくさい。

だからおっさんは人にならなければならない。

『ほむ、覚悟を決めた良い目じゃ。しかし、難しいぞい？』

「望むところだ」

きつと大樹には今のおっさんの姿がイケメンに見えてるに違いない。

気持ち真面目な顔してっし。

『外的魔力を扱う上で、まずは魔力の色について説明しようかの』

そう言つて大樹が説明してくれたことをおっさんなりにまとめてみると

魔力には五色の色がある。

それは赤・青・黄・緑・無色の五つ。

赤は火を司り

青は水を司り

黄は地を司り

緑は風を司る

無色はそのいずれにも属さないものであるが、何物にも染まっていないために応用性の高い代物である。しかし、その力は他の四色に比べれば圧倒的に小さい。

あとは赤は青に弱く、青は黄に弱く、黄は緑に弱く、緑は赤に弱いというジャンケン的な相性もあると教えられたが、そいつは今あまり関係ない話なのでどうでもいい。

外的魔力を扱う上で最も大事なのが無色の魔力だ。

これは太陽から降り注いでいるらしい。ちなみに月からも魔力が降り注いでいて、こちらはかなり純度が高いそうだが太陽と比べると千分の一くらいの量らしい。

つまり、おっさんが外的魔力を扱うためには――

『イメージじゃ。己の葉緑体に光を取り込むかのように魔力を取り込むイメージじゃ』

無茶を言いなさる。

おっさんはひなたぼっこはしても光合成はしたことありません。

『こつ……太陽よ、わしに力を分けてくれなスタンスで挑むのじゃ』

どこの野菜人だよ。

いや、あれはダジャレ好きの人が元祖の技だったっけ？

「太陽よ、おっさんに力を分けてくれ」

とりあえずやってみた。

物は試して昔の人も言ってたしね。

……しかし何も起こらない。

「うおおお！ 猛ろ！ おっさんの葉緑体！」

当然、何も起こらない。

「太陽様、なにとぞこの矮小なるおっさんに力を分け与えてください」

下手に出てみた。

だが、何も起こらない。

「いいぜ。いつまでも付き合ってやる」

こりゃ長期戦だなおっさんは覚悟を決めました。

あれから半年ほどの時間が経った。

その間のおっさんの視線はほとんど空にあった。

晴れの日には太陽を睨み、曇りの日は邪魔だとばかりに雲を睨みつけ、雨の日は天然のシャワーを楽しんだ。

いや、全然冷たく感じねーの。しかもおっさん、洗車して撥水コートしたての車のごとく水と汚れを弾きまくり。湖に浸かるのもいいけど、シャワーは痛快だ。毛穴までしっかりクル。大粒の雨の打撃が心地いいです。

閑話休題

この半年間、何度となく外的魔力の吸収を諦めようかと嘆いた。

その度に明日とともに現れる太陽さんが「小僧、貴様はやはりそれっぽっちの存在か」とやたら渋い声で話しかけてくる（完全なる幻聴、妄想の類）

そんなところがおっさんの負けん気をくすぐる。

いつしかおっさんは日の出から太陽さんを出迎え、お願いしますの
声と共に日の光を浴びながら魔力を吸収するイメージを持ち続け、
日の入りでありがとうございますと言いながら太陽さんを送り出す
ようになった。

まあ、結局何が言いたいのかというと努力は人を裏切らないってこ

とだね。

【エメラルドスタッグビートルは無色の魔力吸収のスキルを得た】

これだよ。ある日ピーンと久しぶりのこの声だよ。

もうおっさんしばらくは太陽見なくていいーや。

何がお願いますだよ。そして何がありますだよ。所詮、おっさんと太陽の関係は勝手に魔力を排出してる側とそれを有効利用させてもらってる側ってだけではない。

太陽が地上の一生物でしかないおっさんをピンポイントで見てるわけもねーわけだし。

なにより、おっさんはオッサンであってまだジイさんじゃないわけよ。早寝早起きは柄じゃねーわ。
んじゃ、寝よつと。

『よし、弟子よ。修業を次の段階に進めるぞい』

最近、すっかり師匠気取りな大樹が話しかけてくる。
スキルを得たことでテンション上がって報告したのは失敗だった。

「いや、おっさんは寝る」

もぞもぞと巣に入る。

築一万年強の木造。たまに話しかけてくるけど住み心地は悪くない。
そんな物件。

「大樹。休息のために十日ばかり時間をくれ」

そんなことを言いながらおっさんは意識を睡眠モードへと移した。

まどろみの中に聞こえた『いや、明日から始めるぞい』という声は
寝てて聞こえなかったということにしよう……

おっさん、修業する（後書き）

要約するとオッサンが変なこと考えながら半年間ひなたぼっこに熱中した話でした。

次話で進化かな……

ある意味オッサンの進化までが序章です。

おっさん、進化の条件満たす

修業したがりの大樹をはぐらかし続けて三日。

大樹がうるさいために予定より短い期間となったが、鋭気を養うことは出来たため、おっさんはいよいよ魔力を扱う技術を修業する。

と、その前におっさんも半年間ずっと空ばかり眺めていたわけじゃない。日の入りから日の出までは約十二時間くらいあるので、その間に大樹に色々聞いたのだ。

その中から二つ説明せねばならないものがある。

一つはスキルというものについてだ。

とは言っても詳しいことはよくわからないらしい。

だがしかし、スキルを得るには修練や経験がものをいうらしいということはわかっている。そしてスキルを得た瞬間にいつでもそれに即した行動をとることが出来る。

例えば、必死で剣を振りつづければ剣術基礎スキルを得る。これは修練により得たスキルであり、今まで野菜くらいしか切れなかったのに直径十センチくらいの木なら断ち切ることが出来るようになるらしい。更に色々な修練をつめば剣術スキルになり、剣豪スキルに変わり、剣鬼、剣聖と変化していくみたいだ。また、その過程で剣技という必殺技を得ることもあるのだが、これもスキルとしてカウントされる。

あとはおっさんが持つてる毒とかの完全耐性。こいつは修練の面がないとは言えないが、基本的には経験から会得するスキルだ。やたら毒を食った結果、体の中で「これ毒あるじゃん。分解しようぜ」ってな具合にやってくれてるみたいだ。

習得するスキルの種類は常時発動型と意識発動型、そして種族特有型の三つがある。

内容は読んで字のごとくであり、前者の二つは誰であっても会得出来ると言われている。最後の種族特有型はその種族なら最初から持っているが、他の種族の者が会得するのは難しいみたいだ。

ちなみにおっさんの木々の声のスキルは多分種族特有型であり、他の種族は大樹曰く森にずっと住み着き、植物に話しかけ続け、人格的に優れた者が会得することがあるらしい。このスキルはエルフとか獣人の中に一世代に必ず一人は会得する奴が出るみたいだ。

さて、簡潔ではあるがこれがスキルの説明だ。なにかあれば後ほど詳しく語る部分もあるかもしれない。

次にスキルを得た時に聞こえてくる【】の声について軽くだが説明しよう。

とは言っても難しく考えるようなものではなく、世界を見守っている神様の声だという説が一般的（木達の中で）だ。人ならば違う見解を示していたりするのかもしれないが、おっさんもこれでいいと思う。

とゆうかこれ以外になにかあるの？ って感じ。おっさんの妄想って言われればそれまでだけど、大樹も昔は聞こえたって言ってるからおっさんの妄想説は否定させていただく。

ファンタジーなら神様が実在してるとかは十分有り得る話だ。

以後、この声のことを天の声と呼称することにしよう。

では、魔力を扱う修業編に行こう。

「ふうう〜、こおお〜、ぬううん〜」

湖に浸かりながら唸るように腹の底から発声する。気分的には気功の達人みたいに気を練っていくような感じだ。あくまでも気分だけの問題であって大した意味はない。

さて、なぜおっさんが湖に浸かりながらこんなことをしているのかと言うと、魔力を扱う技術として広く知られているものの内の肉体活性を会得するための修業の一貫だからである。

肉体活性。つまりは魔力を使つてのドーピングだ。これが出来れば肉体の限界の枠を越えた動きも可能となる。ただ、見た目や実感的なもののがわかりにくいために湖に浸からせてもらつてる。

とゆうのも目には見えない魔力の波動というものであつても、流体である水には波という形で影響を与えるからだ。視覚的にはわかりやすい。

そして今現在どうなつていいのかと言うと、おっさんを中心として波が立っているわけだ。

……おっさんが動くのにあわせてだけどね。

水に指を突っ込んだら波打つ。これは当然のことである。

ただし、魔力の波動で波打てばもっとすごい感じになるらしい。

つまりはおっさんはまだ魔力を使つての肉体活性に成功してないわけだ。

「はあああ……ダメだ、出来る気がしない」

『まだ一日目じゃ。諦めるには早いぞい』

「なんかコツとかないわけ？」

『コツと言つても、体内に吸収した魔力を体中に行き渡らせるだけの話じゃ』

それが簡単に出来たらコツとか聞きません。

つーが無理。どだいおっさんには無謀な挑戦だ。

『まずはじめに吸収した魔力が今どこにあるかはわかるじゃろ?』

もう諦めてバックレようかと思っていると大樹が今更なことを聞いてくる。

吸収した魔力の存在はなんとなく感じられる。なんか飴玉を丸呑みしたみたいな変な感じが体内の一部分にあるからだ。

「わかるよ」

『それを体中に送ってやればよい』

「だから、それがわからんのよ。どうやってやればいいわけ?」

『バシユツとやってギューンじゃ』

抽象的過ぎる……

もういいや。自分で考えてなんとかしよ。

イメージ。イメージが大切だ。

魔力を体中に行き渡らせるイメージ。

しかし、魔力とは無関係だった生を謳歌していたおっさんにはちょっとわかりにくい。

ならば魔力を電力に置き換えてみよう。そう、つまり今のおっさんは電池を積んだおもちゃだと思うことにする。

今はおもちゃに電力が伝わっていない状態。だから一切おっさんは動けない。

おっさんの動きによって波立つ水が静まってくる。

そして電池をプラスマイナスきちん確認した上で差し込むと導線を通っておっさんの体に電気の道が通る。

そんなことをイメージした。

すると、おっさんの周りの水が波立ち始める。徐々にその波は大きくなっていく。

『ほむ、出来たようじゃの』

大樹からも合格をもらった。

これで、おっさんは、人へと……進化する！

『さて、次じゃが……』

ですよねー。

肉体活性が出来ただけで進化出来たら苦労しませんよねー。天の声も聞こえねーし。

『魔力を使ったスキルを使用するのじゃ』
『なるほど』

『はつきり言うところが一番難しいぞい。なにせ、使いたいスキルの明確なイメージがなければダメなのじゃ。人の間では弟子をとつたりしてスキルを伝えていくなどしてるそうじゃが、わしにはおぬしに伝えるべきスキルがない』

魔力を使ったスキルっていうと魔法か？

まあ、木がそんなもん持ってたらそれだけですげーわ。

それにしても魔法か……魔法ってステッキとかコンパクトミラーがないと使えないだろ。あ、これは魔女っ子の話か。

っーかよく考えたら魔法のアイテムとかあっても持てねーわ。

とりあえず、なんか魔法的なものをイメージすればいいんでしょ？
どうすっかなー。

あ、やべ……思考がかめ〇め波にしか辿り着かねーわ。魔法ではな

いけど魔法的な感じだしな。

おっさんも男の子ってことだね。

「かーめー〇ーめー……はーっ!!」

ジュルアーツ

え、うそ……なんか出ちゃいました。

おっさんの目の前の湖の水が割れ、それでも止まらずにかめ〇め波は突き進む。

つてやべーよ!? このままだと他の木とかにぶつかる! かめ〇め波よ、消えろー!!

おっさんの願いが届いたのかかめ〇め波は木に届く前に消えてくれた。

ふうっ、なんとかなったか。

【エメラルドスタッグビートルは魔力波のスキルを得た】

【エメラルドスタッグビートルは進化の条件を満たした。進化するか?】

天の声まで聞こえた。

なんか進化するか? とかやたら馴れ馴れしいな。

しかしどうやらおっさんは進化できるようになっただけらしい。

『まさかこんなに早く習得するとはのう……おぬしには魔力を扱う才能があったようじゃの』

「……それほどでも」

他に比べれば時間がかからなかったのは確かだが、こんなんでいいの?

『よっぽどスキルをイメージする力が強かったに違いないわい』

それはあるかもな。

昔は胸が熱く燃えたものだ。いや、今もなお胸を熱くさせる作品だ。

『ならば、次の修業なんじゃが……』

「あ、ちよい待ち。おっさんもう進化できるよ」

天の声は本人にしか聞こえないため、大樹は次の修業をはじめそうになったので止める。

『え、嘘……マジ?』

「マジだ」

『まさか本当に進化出来るようになるとは……』

なんか聞こえたような気がするけど、気にしないでおこつ。

【進化するか?】

おっと、再度天の声から催促がかかった。

悩む必要はない。

おっさんは天の声に高らかと宣言した。

「進化する!」

そう宣言すると同時におっさんの体が熱くなった。湖に浸かっていたためにおっさんの濡れた体から水が水蒸気となって蒸発していく。頭がフラフラとしてきた。

呼吸も、心臓の鼓動も早くなっていく。

ついにおっさんは意識を手放した。

おっさん、進化の条件満たす（後書き）

書き終わってから、ふとクワガタに心臓ってあるのかと疑問に思ってしまった。

調べた結果、どうもないらしい。似たような働きの器官はあるみたいだけど……

でも、あえて書き直したりはしないです。

なぜなら主人公もクワガタには心臓がないと知らないからです。似たような器官（背脈管というらしい）を心臓と勘違いしていると思われるってください。

おっさん、進化後の姿を見る

暗い視界

奥までどのくらい遠い距離があるのか、それともすぐ近くにあるのか
そんなことすらわからない闇の世界

何も見えず、何も聞こえない

だがそこに何者かの気配を感じる

「あんたは誰だ？」

問い掛ける言葉に返答はない。

「おっさん、話し相手が欲しいんだけど？」

やはり何も答えてはくれない。

もしかして気のせいなのか？

よく心霊番組とか見た後に眠ろうと布団に横になった時に何者かの
気配を感じてしまうことはないだろうか？ おっさんはよくあるタ
イプだ。

だから今回もそんな感じのアレなのかもしれない。

沈黙の時間が流れる。

< ■ちた ■星 ■ ■つ >

何者かが言葉を発した。

どうやら何者かの気配はおっさんの気のせいではなかったようだ。しかし、不意打ち過ぎてよく聞き取ることが出来ない。

「もう一回言ってくれ。ワンモアセイプリーズ」

< 落ちたる星は二つ >

正直意味不明だ。

こいつは何を言っているのだろうか。

「もう少しわかりやすい言葉を頼みます。オッサンが皆物知りってわけじゃないんだからさ」

< 一つは強き光を放ち、もう一つは鈍く光る >

「なあ、何言ってるの？」

< 強き光を放つ星は混沌を導いた >

「聞けて」

< 鈍き光を放つ星は新たなる道を拓いた >

「おいこら、おっさんを見捨てるんじゃない。含蓄はないかもしれないが時たまいいこと言っただぞ？」

<混沌を導きし星にはその存在が混沌で身を滅ぼさぬよう既に悪意から己を護る最強の盾を授けた>

もついいよ。

どうせ「このオッサン、マジうざーい」とか思ってたんだろ。

言っとくけどね。おっさん、女子高生とか全然興味ないからね。

諭吉三枚でどう？ とか言われても断固跳ね返すから。っーか説教するから。

英世さん一人の超安値だとしても……行っちゃうか？ いやいや、行かねーよ。むしろ勃たない。あ、別に歳のせいとかではなくて性癖的にノーサンキューなんです。

<故に新たな道を開拓せし星にはその存在が途切れぬよう再生の泉を授ける>

なんのことやら。

<二つの星は交わりて互いを滅ぼさんとす>

<地上で輝ける星はただ一つなり>

<最後に輝くのは強き光か>

<それとも鈍き光か>

<世界は星の答えを待っている——>

【エメラルドスタッグビートルは新たな種^{ムシヒト}虫人に進化した】

【虫人は再生の泉のスキルを得た】

【虫人は昆虫形態のスキルを得た】
インセクトフォーゼ

【虫人は千里眼のスキルを得た】

【虫人は剛力のスキルを得た】

■ ■ ■

「んう……」

目を開けるとそこには透き通るような青い空が広がっていた。

『おお、目覚めたようじゃな』

聞き慣れた声が聞こえて来る。

声のした方へと顔を向けてみると顔の右側が水に浸かってしまう。

「げほっ、ごほっ……うえっ、気管に入った」

慌てて起き上がり、手を口へと当てて咳込む。

そう、手を口に当てたのだ。

クワガタだった体では出来なかった行為。

口から手を離してまじまじと見てみる。

指は五本。関節の数も人間と一緒だ。

ただ、その手の甲や腕には無骨なエメラルド色のガントレットのよ
うなものが接着している。

次に体を見てみる。

こちらはガントレットのようなものと同じ色の鎧みたいなものを着ていた。いや、この鎧みたいなものこそがおっさんの体のようだ。だって、股間に赤黒いカブトムシの頭部が付いてるからね。

クワガタだったのにカブトムシが付くとはこれいかに。

足も同じく脚甲のようなもので覆われており、どこの戦士やねんと思わなくもない。

手の平や足の裏、太股の内側などは装甲みたいなものに覆われておらず、やや赤みがかった薄い黄色の皮膚が見える。感触も色も人間だった時のものと変わらない。いや、ちよいと肌にハリがあるかもな。

つーか顔は？

顔はどうなってるの？

おっさんは水面に自分を映して見てみた。

そこにいたのはどこぞの特撮ヒーローの方ですか？　と思ってしまいきような存在。

顔はフルフェイスの兜のようであり、その丁度人間の目のある位置に切れ長の鋭い赤い目らしきものがある。んでなぜか口の周りだけ剥き出し。エメラルド色の頭の頭頂部にはクワガタの顎を模した二本の角が生えている。

もう一度言っぞ、どこの特撮ヒーローやねん！

え……嘘。これが虫人とやらの姿？

つーかこれで人を名乗るわけ？

あ、でもちよつとかつちよいいかも……

でもでも、下手したら悪の怪人に見えなくもないかも。

うーん、この頭ってヘルメットみたいに取れたりすんのかな？

……無理だった。

つーかそれより股間っ！

何か隠すもの探さないと……

『三日も眠つとるから心配したぞい。もう大丈夫かの？』

おっと、大樹の存在を忘れてた。
つーか……

「そんなに眠ってたのか？」
『そうじゃ』

どんだけ寝てるんだよ。
とゆーかあれは夢だったんだろうか。

『それにしても無事に進化出来たようじゃの』
「ああ。とりあえずなんか下半身を隠せるものないか？」
『すまんが葉っぱくらいしか……』

オーマイゴッド！
んでも無いよりマシか。
そして大樹から一番大きな葉っぱを受け取り、下半身に当てて蔓で
固定する。
これでひとまずは安心だ。

「ふう、恥ずかしかった……」

露出狂でもないのに下半身丸出しはきついものがある。
おっさんは衣食住足りてる日本人なわけだしな。

『それにしても……けつたいな存在になったのう』
「カッコイイじゃん」
『ほむ、本人が言うのならわしがどうこう言うべきではないな』
「そうしてくれ」

そう言っておっさんは湖から出て肩を回して歩いたり、走ったり、スキップしてみたりと体の動きを確かめてみた。
うん、久しぶりに二本足で活動したけど違和感とかは全くない。

「絶・好・調っ！」

無駄に叫んでしまった。

『ほむ、それは良かった。では、約束通りにこれをやろう』

大樹がそう言っていると遥か頭上からグレープフルーツ大の紫色の果実が落ちてきた。

それは万有引力に乗っ取り、かなりのスピードで地面に落下したにも関わらず一切傷が付いていない。
なにこれ……めっちゃめっちゃ怪しい。

「これは？」

『食べればわかる』

ますます怪しく思うが、さすがに今更大樹がおっさんをどうこうしようとは思っていないはず。

とゆーか毒でも大丈夫だし。

そう思いたった時不安は消え、果実を一口口にしてみる。

果実を一口噛むと甘酸っぱい果汁が口の中に溢れる。ぶっちゃけうまい。

貪るように一個を完食してしまった。

【虫人は斬撃無効のスキルを得た】

食い終わったと同時に天の声が聞こえた。

『どうじゃ？ うまくいったかのう』

「これって……」

『わしが長い生の途中で伐採されないために身につけたスキルを実として落としたのじゃよ』

そんなこと出来るのか？

いや、実際やったんだから出来るんだろうな。

それにしても斬撃無効とは…… 木としては生唾を飲み込むほど欲しいスキルではなかるうか

『今更わしを伐採しようとする酔狂な奴もおらんから気にせず受け取ってくれい。おぬしがわしの我が儘に付きおうてくれたこと本当に感謝するぞい』

「いや、こちらこそ色々教えてもらって……」

『ところでじゃが！』

大樹に礼を述べようとしたところ、遮るように大樹が割り込んできた。

「……なに？」

せつかく礼を述べようとしたところを遮られたこちらは若干不機嫌だ。

つーかおっさんの感謝の言葉を聞けよ。

なんかモヤモヤすんじゃない。

『おぬしが起きる前に臨時で超長距離根っこワーク会議を開いて他の木に自慢したら、皆して嘘じゃとか言いおるんじゃない』

「……で？」

まあ、なんとなく先の展開が予想出来るが。

『じゃから他の木におぬしの姿を見せてやってくれんか？』

大樹の願いにどう答えるべきだろうか。

進化出来たのは大樹のおかげだし、願いを聞き届けてあげるのはやぶさかではないが、めんどいんだよな！。

「保留で」

『そこをなんとか』

「えーでも……」

『タファンの森の大樹だけでいいんじゃない？』

タファン？

えーと、確かエルフとドワーフの生まれた森だっけか。つまりは一番自慢できる立場にいる奴ってことか。

『別に期限は定めん。ただおぬしが生きてる間にタファンの大樹に会ってくれば良いのじゃ』

結局おっさんは大樹の願いを聞き届け、タファンの森の方向へと旅に出ることになったのだった。

おっさん、進化後の姿を見る（後書き）

さて、オッサンの進化後の姿はどうでしたでしょうか。

私の中では

クワガタ系仮面ライダー＋ビーファイターのクワガタ＋ライダーマン
そしてライダーで言う装甲が無い部分が肌って感じみたいなビジュ
アルです。

最初は完全なるライダー系の容姿を想像してたんですが、やはり『
人』なので『人』の部分がなくちゃねってことで今のイメージにな
りました。

まあ、あくまでも作者のイメージなんで細かい部分は読者様のイメ
ージで考えてもなんら問題ありません。

ただ、鎧みたいなの着てて、頭にクワガタの顎みたいな角がある、
エメラルドグリーン。この三つだけは外せません。

さて、あと五話以内にヒロイン出せるかなー？

とゆーかヒロインを出す前にあらずじをきちんと書こうと思います。
とゆーのも投稿するために適当に書いたものなので……

おっさん、人と会おう（前書き）

今回、会話文がちょっと読みづらいかもしれませんが。ニュアンスだけでも読み取って頂ければ幸いです。

おっさん、人と会おう

大樹の願いからタフアンの森に向かうことになったおっさん。

めんどくさいけど、生きてるうちに行けば期限は定めないらしいし、ゆっくりと行こう。

そう思ったおっさんはクワガタとして生まれ育ったミズドリウムの森を散歩するように歩いていく。

インセクトフォーゼ

おっさんのスキルの一つにある昆虫形態を使えば前のクワガタの姿になることが出来るため飛ぶことも可能だったのだが、せっかく二本足で歩けるようになったのだ。この感動が続くうちは歩きたい。

途中で出会った肉食な動物達からは隠れて森の出口（便宜上そう呼ぶ）に向かっていく。戦ったりしないのかって？ 理由がないのに喧嘩を吹っかけるとか好戦的じゃないおっさんには無理な話だわ。戦わないで済むならその方がいいに決まってる。とゆるーく脳内で快楽に変換出来ない痛みは御免被る。

大樹から聞いたらしく、歩いていると色々な木々からおっさんが人へと進化したことへの祝福の言葉やこれからの旅路へ対しての激励の言葉がかかる。

うう……皆なんてええ木なんだ。優しくされると泣きそうになるな。年取ると涙腺が緩くなつて困る。

おっさん、感動物にすこぶる弱いんだよ。

途中から見て内容が全然わかんなくても、最後の方だけ見て泣いたことなんてしょっちゅうある。

特に養子の子が自分は養子だから愛されてないと思い込んでたけど実は養父母にすごく愛されてた、みたいなシチュエーションにはすつごく弱い。

……こんな話はどうでもいいか。

む、そろそろ出口みたいだ。

そっぴや初めて森の外に出るな。

どんな世界が開けているのか実に楽しみである。

『あ、そこ危ないですよ』

「へ？ のあつ！？」

『人間がなんか仕掛けてましたから……って遅かったですね』

現在、おっさんは網に捕らわれた状態で宙吊りになってます。

これ、忍者とかかくせ者捕らえるための罠に似てんな。

『大丈夫？』

「あ、へーきへーき」

仕掛けを施された木がおっさんに話かけてくる。先ほどのちょっと遅い警告もこの木のものだ。

「獲物がかかったどーっ！」

「よっしゃー！ 久しぶりに肉が食えるべ」

「わーのしかげがよかったんだがらな」

「オラの戦術眼がよかったんだべ」

ほどこに訛りのある言葉で現れたのは四人の屈強な男達。

全員、皮の鎧に身を包み込んでおり耳とかの諸々のパーツは人間と変わりない。明度の違いはあれど全員黒髪であり、どこことなくアジアンな顔立ちをしている。

なんかこえーな。

オヤジ狩りの一団じゃねーよな？
ダンディハント

「さーで、獲物は……あれ、なんだべ？」

「人でねーが？」

「おいおい、やばぐねが？ 間違つて人ば畏さかけでまっだ」

「おーい、大丈夫だが？」

ふむ、話し合いを聞くにいい人達つばいな。

「大丈夫大丈夫。それより降ろしてくれない？」

「へば、ちよつとこさ待つでろ」

しばらくして地面へと降ろされた。

「すいませんでした」

四人が揃つておっさんに頭を下げる。

「まさか、こんな田舎いながの森に人が入つてくるなんて思つてながつたはんで」

「いやいや、おっさんも驚いたよ。巧妙な畏仕掛けるねー」

「だべ？ 自信作だ」

男達の一人が下げた頭を上げて誇らしげに語る。

「自信があるのもわかるな。全然わかんなかった」

まあ、考え事してて注意力が散漫だったただけだが。そうじゃなかったら、木の注意によつて避けていたことだろう。

「んでも、ホーソラビットとがを捕まえるにはこんぐれえの畏じゃねーとダメなんだ」

「あいづら、ちょっとした違和感を感じたら罨にはちがよんねーがんな」

「んだんだ」

ホーンラビットって、あのロップブイヤーさんか？

忘れもしない、寝てるおっさんを角で突いてたあいづらの姿だけは！

……よく考えたらあんまり恨みに思っていないんだよね。どうでもいって言うか……

「ホーンラビットってうめーの？」

「ん？ まあ、そこそこだな」

「ハイキングベアーの方がうめえげっちょ、ありやつええがら」

ハイキングベアーとは多分二足歩行してた熊のことだろう。

おっさんはこいつを見かけたらすぐに逃げる。

「うん、そっか。大変だね。じゃあ、とりあえずお詫びの品をくれ」

「は？」

「え……」

場が哑然とした空気に包まれる。

そりゃそうだ。

元々の話、獲物を捕らえるために仕掛けた罨にかかったマヌケはおっさんの方ではある。罪悪感もあつて謝罪した彼らではあつたが、おっさんの友好的な態度に胸を撫で下ろしていたに違いない。だが甘い。

普段のおっさんなら笑って許して終わりだろうが、今のおっさんの状況は無一文。

こうゆう機会は活用せねば。

「えっと……」

「とりあえず金銭での詫びを入れてくれ」

「オラ達、ほとんど自給自足だから……金はあんま持つでねえ」

「よしわかった。あんた達全員その場でジャンプしろ」

おっさんの言葉に対して男達は素直にその場で跳びはねた。

おっさんは素直な奴は大好きです。つーか素直すぎる気もするけどね。

そして男達のジャンプに合わせて聞こえる金属音。

「お、持ってんじゃん。出しなさい」

「い、いや……これはナイフの音だあ」

「とりあえず出しなさい」

無駄に強気なおっさん。

だがしかし、内心逆上されたらどうしようかとドキドキものです。

ただどこいつらのオドオドした感じが、その心配は杞憂だと思われる。

オッサンとは反発する若者は苦手な奴が多いが、従順な若者には強気な生き物です。おっさんもその内の一人さ。

差し出されたのは刃渡り10cmちょいの外見果物ナイフみたいな物。つーか果物ナイフにしか見えない。

りんごでも採りにきたのか？

まあ、毒りんご的なのかないけどね。

狩りに出た人間の装備としては貧弱だ。ナイフの良し悪しが分からないおっさんでもこれはナマクラだと判断出来る。

「はい、返す」

「あ、どうも……」

「他の奴らも提出ー」

おっさんの声にまたも男達は素直にそれぞれ金属音の元を差し出してくる。

ほんと、こんなに素直で良い奴ら初めてだ。

差し出されたのは全員似たり寄ったりの品で、おっさんの食指は全くといっていいほど動かない。

「はぁ……」

自然とため息がこぼれる。

ため息をひとつ吐くと幸せがひとつ逃げてくなんて俗説もあるが、この際仕方ないだろう。

「……なんが、すみません」

謝られた。

こいつらは全然悪くないのに。

やべ…… おっさんの罪悪感がチクチクと刺激される。

「こちらこそ調子に乗ってしまったようで……」

「いやいや、オラ達が悪いんです」

「なんだ。貧乏で何もあげられるもん持つでねえのがわりいだ」

「お前ら……」

いい人過ぎやしませんか？

「好きだぜ」

「……え」

「あ……」

「ぬう……」

「オラ、嫁っこがいるんだげっちょ……」

「そっという意味ではない。おっさんは女好きだよ？」

めちゃくちゃって頭に付くくらいな。

「それにしても優しいのはいいが、優し過ぎるぞお前ら」

「だって……なあ？」

「ああ」

「んだ」

「何？　なんで知り合い同士、目で会話してんの。おっさんも話の輪に入れてよ」

「だつて、あんた……鎧は着てっけども股間は葉っぱで隠^{かく}してるぐらいだから、哀れで……」

……うん、まあ、そうだね。

おっさん、そんな格好してたね。

自然と受け入れてたよ。

とゆうーか胸とかは鎧じゃなくて一応、おっさんの肌なんだけだね。
感触あるし……

つまり、全裸に葉っぱだけだった。

「……じゃあ、腰に羽織るもんない？」

「どんぞ」

差し出されたのは四枚のタオル。

おっさんはそれで簡易版の褌^{ふんどし}を作成し、葉っぱの代わりに股間を隠すのだった。

……あ、激しい動きだと取れちゃうな。

おっさん、人と出会う（後書き）

いつか来るかもしれない質問を先に回答しておきます

Q・なぜ言葉が通じるのか？

A・ファンタジーだからです

Q・主人公は戦わないのか？

A・そのうちあるかもしれませんが、少なくともそこそこの話です

Q・主人公の名前って？

A・一応、次話にて名乗る予定

私が現段階で思い付くのはこれくらいですかね。

他に何かあれば遠慮なくどうぞ。ただ、ネタバレになるような質問には回答できません。

おっさん、名乗る

タオルのお礼と言ってはなんだが、スキル木々の声を活かして狩人達の狩りを手伝うことにした。

要はホーンラビットがよく通る道やホーンラビットの餌場などを教えてもらえばいいだけの話だ。樹木達はおっさんの味方なので基本的に何でも教えてくれる。

狩人達も良い狩場知ってるよと言ってやったら両手を挙げて大喜びした。

そんなに喜んでくれるのは嬉しいが、結果が出てからにして欲しいものだ。

あと、もう少しおっさんの素性を疑うとかないわけ？

客観的に見ると結構怪しい奴よ？

まあ、説明するのもめんどくさいから聞かれない方が都合いいんだけどね。

よし、気分がいいからサービスだ。食える山菜とかキノコも採ってやんよ。

結果として狩りは成功だった。

成果はホーンラビット六匹。いや、ラビットだから六羽の方が正しいのか？

とりあえず成功だ。

おっさんの指定したいくつかのポイントに狩人Cがおっさんの引っかけた罠を設置し、獲物がかかるまでひたすら待つ。そしてかかった獲物を狩人A、Dと協力して捕まえる。その後にもた罠を仕掛ける。

これを狩人達が繰り返している間におっさんは狩人Bを連れて食用

植物を取りに行った。

狩人Bもそこそこ食用植物には詳しかったが、木の声を直に聞けるおっさんほど森の植物に詳しい奴はいない。

一時間もすれば両手に抱えきれないほどの食料を得た。

それにしても動物を殺す瞬間って惨いよな。おっさんも真つ当な人間だった頃に田舎で飼ってた鶏を絞め殺して羽根^{はね}揃ったことあるけど、途中で祖母^{ばあちゃん}に変わってもらったもん。今じゃ、食料確保してる間に時々見かける事のある弱肉強食の世界によって見慣れた光景とは言え見ると気持ちが悪くなってくる。

「大丈夫だか？」

「……そんなに大丈夫じゃない」

「あんた、グロ耐性のスキル持ってないのが？」

グロ耐性のスキル。

そんなもんがあるなら是非とも欲しいもんだ。

「どうやつ……」

どうやったら獲得できる？ と聞こうとした口を閉ざす。

スキルを得る方法は経験か修業。

ならばグロいものを率先して見たり、運悪く見てしまった奴が得るスキルなのだろう。

ネット画像とか写真とかならまだいいけど、隣でグチャグチャやってんの見るのはいやだ。

「大丈夫だあゝ。解体作業は百匹も見れば取れっからゝ」

励ますな。

別にグロ耐性ないからって落ち込んでるわけじゃない。

「んでも、これだけ取れば力カアに怒られなくていいな」

「これもあんたさんのおがげだあ」

「あんたも村さ来い。わーの作った野菜ばやる」

「オラの作った野菜はうめど」

すっげえ笑顔でおっさんの方を見てる狩人達。

笑顔が眩しいぜ。

それにしても、野菜作ってる奴ってお礼とかに大抵自作の野菜あげるって言い出すよな。おっさんの実家の連中もそうだったし、農家の友達もそうだった。

まあ、嬉しいんだけどね。

「狩人A、B、C、D……じゃあ、誰か泊めて？」

沈黙が降臨した。

なんか悪いこと言ったかな？

あれか？「泊めて」はまずいか？

芸能人が田舎に泊まるテレビ番組でも難儀することがあるからなー。でもテレビが入るわけじゃないからハードル低くね？

いや、よく考えると今日会った奴を泊めること自体がレベル高すぎか。

例え彼らの家が掘って建て小屋であっても褒める自信があるのに残念だ。

「なあ」

沈黙を破るようにAが口を開く。

「狩人エー、ビー、シー、デーっておら達のことだが？」
「うん、そうだけど？」

なるほど、まずは他愛ない話をしつつお泊りを拒否るわけだな。
はつきり言ってくれていいのに……

「そついえば、お互い名乗りあつてながたな」

「まんず名乗りあうのが礼儀でねえが」
「んだ」

というわけでお互いに自己紹介する運びとなった。

とりあえず簡潔にまとめていこう。

「だば、おらがらいくが」

狩人A。本来の名前はスノー。

スノーとか言いつつ、肌は日に焼けて茶色だ。

彼は四人の中で一番でかい。

また、Aを冠するだけあつて彼らの中のリーダー的存在だ。既婚者。

なお、嫁の尻に敷かれているらしい。また、嫁が妊娠中。

「次はわの番だな」

狩人B。本来の名前はトイース。

一緒に森で収集した男だ。

顔立ちはまだ二十代だというのに可哀相な頭をしている。でも既婚者。

「だらわーがいくど」

狩人C。本来の名前はスサウ。
罨の名人。

身長は小学生くらいしかないけれども、あごひげの影響でかなり年
がいてるように見える。やはり既婚者。

「最後はオラだな」

狩人D。本来の名前はウエスト。

他の三人に比べると細い。だが、筋肉質だ。

また、彼らの中では頭がいいらしい。はあ……既婚者。

全員既婚者だよバカヤロー！

なんだよ。三十過ぎても結婚出来なかったおっさんへの当てつけか？
くやしくないよ？ だって、三十過ぎても結婚してない野郎なんて
いっぱいいるしー。

「んで、あんたは？」

今度はおっさんの番のようだな。

「おっさんの名前はたか……」

ちよつと待て。本名を名乗っていいものか……

こいつらの名前を聞く限り日本的な名前だと浮いちゃわね？

とゆーかすでに以前のおっさんは死んじゃってるわけだから新しい
名前が必要ではなかるうか。

とは言っても西洋風な名前なんて咄嗟に思いつかん。本名を換^{もじ}るか？

……ないな。

うーん……一旦持ち帰って考えたい。

だけど、考えれば考えるほど坩堝に嵌まる気がする。

だったら……こうしよう。

「おっさんには名前がない。この森で生まれ、この森で育ったが故に。だからどうだろう、君達がおっさんに名前を付けてくれないか？」

「おら達が？」

聞き返すスノーに頷いて返す。

自分で名前を考えるのが面倒ならば、他人に考えてもらおう作戦だ。

「でも、なんでわー達が？」

「んだ。自分で付けられいーべ」

まあ、こうくるわな。

理由がめんどくさかったからじゃダメだよな。

どうやって言い訳しよう……

「それはだな……」

考える。考えるんだ。

自分を叱咤激励する。

すると、天啓のようにパツと頭に最適な言い訳が浮かんだ。

「名前つてのはさ、自分で付けるものなのか？ 君達だって親に付けられただろう？ つまり、血の繋がりがあるとはいえ他者に名付けられたはずだ」

おっさんの言葉に四人が理解の表情を浮かべる。

「だからこそ、信用出来る君達におっさんの名前を付けてもらいたいんだ」

ここで信用してることもアピールしておいて、お泊まりの許可をもらいやすくする算段を練る。

ふふふ、おっさんたらなんてクレバーなんだ。

「よ、よし。おら達がいい名前付けでやつから！」

「任せどげ^{まが}」

「どんなんがいいべ？」

「テソロとかどんだ？」

「それは今度生まれるおらの子供の名前だべ！」

四人で固まって話し合ってくれている。

はてさて、一体どんな名前を付けられるのかな？

よほど変じゃなければ、どんな名前であっても受け入れるつもりだ。その名前でこれから生きていこうと思う。

近くにある木に寄り掛かって座り、結果を待つことにする。

『あんっ』

「おっと、すまん」

どうやら寄り掛かった時に木の性感帯に触れてしまったようだ。

『いいんですよ。それより名前付けられるみたいですね』

「え？ あ、うん」

『その旨を報告しましたら、ラウルス様がわしが名付けると言っていましたよ』

「へー」

ちなみにラウルスとは大樹の名前である。

ただとおっさんの中では大樹は大樹。名前などない。

「参考までに何て言ってるの？」

『えーと、ですねえ……ムシビト1かムシビトαで迷ってるそうです』

「却下つつといて」

『はい』

大樹に名前付けてもらうことを考えつかなくて良かった。

そういえば、修業中にこの森のほとんどの木の名付け親は大樹だと聞いたことがあったな。あの杉15065みたいな感じのセンスのカケラもない奴。

絶対名付けられたくないね。

自分の案が即座に却下されたことで大樹が激しく落ち込んだ事はここで語るような事ではあるまい。

そうこうしている内に話し合いの終わった狩人達がおっさんの元に近寄ってきた。

「いい名前付けてくれたのかな？」

「最終的に三つ候補がでぎだ」

「ふーん、そっから選ぶわけね」

おっさんにも選択肢を与えることで、華を持たせてくれてるのかな？

「どんなのがあんの？」

「エメ、ラルド、グリーンの三つだ」

そっかその三つの中ならどれかな〜……って!?

「なにそれっ!?! 全部見た目からじゃん! なんでそんな安直になった？」

エメ、ラルド、グリーン。繋げて読めばエメラルドグリーン。まだ。

「いや〜、パツと思いつぐのがなくてえ」

「スサウがプリンプリンとかふざげっからあ〜」

「おめだつて、悪ノリして名前ばアナルにしようとか言つてたっぺ」

なんでこいつらこんなに学生のノリなの？

判断間違っちゃったかな〜。

とりあえず真面目に考えてみる。

プリンプリンとアナルはないな。

でも、アナルって響きはちょっと惹かれるものがあるから将来息子が出来たら案として使わせてもらおう。

んで、エメラルドグリーンに関してだが、安直ではあるがわかりやすい。

面倒だし、この中から選ばう。

まず、エメ。

エメさんと呼ぶ姿を想像してみる。

なんかひょうきん者のイメージだな。ダンディーなおっさんには合わない。よって却下。

次に、ラルド。

これ単体で見れば、そこそこな代物だ。響きがいい。おっさんの名

前の第一候補にしよう。

最後に、グリーン。

歌を唄うイメージがある。響きは悪くない。だけどどこことなく主人公のライバル的ポジションっぽい感じがするのはなぜだろう？

「ラルドだな」

吟味した結果、やはりこれが一番しっくりくる。

「おっさんの名前は今日からラルドだ」

「そうが」

「よろしく、ラルドさん」

「いい名前だあ」

「名付けだオラ達も納得だべ」

【虫人は固有名ラルドを得た】

天の声が聞こえた。

おっさんの名前はラルドで本決まりしてしまったようだ。だが、これでいい。

おっさんはこの世界で生きていくのだから。

こうして名前を得たおっさんは狩人達に付いて行って、彼らの村へと訪れるのだった。

ちなみに泊めてくれと頼んだ時に沈黙が降りたのは、おっさんが自分達を記号の如く認識しているのに気付いてちよつと傷付いたためらしい。

泊める事自体は奥さんに聞いてみないとわからないとのことだった。

なお、おっさんはラルドという名前が豚の脂ラーのことだとは知る由も
なかった……

おっさん、名乗る（後書き）

固有名詞はだいたい適当につけてます。

主人公の名前も本当にエメラルドグリーンから取ったんですが、まさか適当に取った名前がこんな意味を持つとは……

まあ、ありかなしで言えばあります。むしろ彼には合ってる気がします。

おっさん、旅立つ

「ラルドさん、このキノゴって食べっぺか？」

拝啓、大樹様。

「おっさんは食べる。だけど、トイース達はダメだ。食ったら体が痺れて動けなくなるぞ？」

お元気ですか？

まあ、根っこワークでお互いの近況はよく知ってるでしょうが、改めて報告しようと思います。

「危ねーどごだったなー」

おっさんは今、三ヶ月ほど前に出会った狩人達の村で彼らと同じく狩人として生活しています。

「この実は食べるべか？」

最初は苦難の連続でした。

だって村人の視線、特に女性の目がドライアイスみたいに冷たかったからです。

「うん、食べるよ。スノーの嫁さんみたいに産後の人なら丁度いいんじゃないか？」

それもこれも、村に着いた時におっさんが腰に装着していた簡易型の褌ふんどしが外れていたのにも関わらず、それに気付かないで村の中を闊

歩したのが悪いんだと思います。

露出狂の誤解を解くのに大変苦労いたしました。

今ではちゃんとした禪を着用しています。あくまでも禪のみで、他はなんも着てません。なぜなら装甲的な身体のせいでおっさんに合う服がないからです。

まあ、慣れましたけどね。

「おお、キャロルにいいつつーんならいっぱい採って帰んべ」

女性の反応はすこぶる悪かったとしか言いようがありません。

あっちに行つては逃げるように視界から消え去り、そっちに行つては露骨に嫌な顔をされました。

ただどなぜでしょうか。

……ゾクゾクしました（悦）

「キャロルって、いいケツしてんだよな」

あの冷たい視線がたまりません。

しかし、彼女らは皆旦那付きです。つまりは人妻。

基本的に旦那が知らない野郎なら大興奮してしまうのですが、先に旦那達と仲良くなってしまうと、人妻と言うよりも〇〇の嫁と思つてしまい、正直萎えます。ゾクゾク感は半減です。

おっさんは友人の嫁に手を出すほどひとでなしではありませんからね（笑）

「ラルドさん。いや、ラルド……嫁に手え出したらぶっ殺すかな
！」

あ、友人も増えました。

男なんて一緒に酒飲んで夢でも語り合えば、そこそこ仲良くなれま

す。

あとの夢なんかねえよって奴らは、下ネタで落としました。
どこいっても男のエロさは変わらないなとしみじみ思いました。

「いや、キャロルはケツはいいんだが、胸が更地過ぎて欲情しないんだよね。だからスノーはきっとロツククライミングが趣味なんだなと常々思ってる」

話は変わりますが、つい先日、村の畑におっさんが植えた作物の収穫がこの間ありました。

早過ぎると思うかもしれませんが、実はおっさんには植物の成長を促進する秘められた能力があったのです。

「それは抱いてるおらに失礼しつぱいでねえが。キャロルは確かに胸たすはねえけども、美人だ」

きっかけはおっさんが種蒔きに参加した後のこと。

成長具合が気になって仕方がなかったので、早く芽を出せと祈ったことからはじまります。

その後、あれよあれよという間に作物が成長していったんです。これによって、おっさんはどうやら植物成長促進というスキルを持っていたことが判明しました。そういえばエメラルドスタッグビートルになった時にそんな感じの天の声が聞こえたかもしれません。

「うん、美人（笑）だよな。ま、おっさんはもつとボン・キュツ・ボンなおねーちゃんがいいけど」

植物成長促進のスキルが判明してから女性達の態度がすごく軟化しました。

でも、どこことなく残念な気持ちなのはなぜでしょう……

「だったらオラの嫁は狙ってんのが？」

村長さんにも村人として永住しないかと言われました。

おっさんとの心の距離を縮めようと必死なのが端で見ててもよくわかります。

「ウエストの嫁ははつきり言って顔の造形が好みじゃないな」

どうするかはまだ決めてません。

だけど、わりと前向きに検討しようかと思っています。

「ラルドさんは女の好みにうるさ過ぎるんでねえべが？」

この村はおっさんに仕事をくれました。

そしておっさんが生活するのに必要な物を無償で提供してくれました。

「好みってゆーか、二十五歳以上でナイスバディな美人がいいってだけ。これだけ満たせばどうでもいい。おっ、美味そうなキノコみっけ」

仕事ではいなくてはならない存在として重宝されています。
無駄に自信が付きました。

落ち込むこともあるけれど、おっさん、この村が好きです。

「明日にでも村出ることにした」

「……え？」

突然のおっさんの発言に驚いた表情でその場にいた全員がおっさんの顔を見る。

今度は何を言い出したんだコイツ？　みたいな表情がありありと浮かんでいる。

ここは村で唯一の酒場。

内装は西部劇にでも出てきそうな造りで、扉は例のパコパコするタイプのやつだ（ウエスタン扉）

二階に宿泊も出来るので、おっさんは現在そこに住まわせてもらっている。

今日は狩りの成果もそこそ良かったので東西南北の四人と祝杯を挙げてるというわけだ。

ちなみに東西南北とはトイス、ウエスト、スサウ、スノーをいくりにした呼び名だ。

その現場にておっさんは自身の今後の予定を告げた。

はつきりいえば急な話だ。おっさんは事前になんのそぶりも見せたことはなかった。とゆーかさっき決めたんだから当たり前だ。

突然の引退は周りに迷惑をかけることも理解している。

ただおっさんは元々外様だし、問題はないと思う。

手紙口調でこの村が好きだと言ったが、ずっといるとは一言も言っていない。

あくまでも前向きに検討すると言った政治家答弁だ。むしろこうい

う発言が実現されることはあまりないのではないだろうか？

「つか最近、大樹が「まだタフアの森には行かんのか？」って根っこワークを通じて村にある木に言付けてくる。

どうやら永住しそうな勢いで村に馴染むおっさんを杞憂してるらしい。

そこまで自慢したいのかよ。

「随分と急でねえが？」

「んだ」

「用事があるんだよ」

「だけんども……」

引き止めようと言葉を紡ぐ東西南北の面々。

お前ら、そこまでおっさんが好きか。

人気者だなー。

ただどな、おっさんが村を出る決意をしたのはお前らのせいでもあるんだぞ？

ぶっちゃけ羨ましいんだよ。

嫁と仲良くキヤツキヤウフフしやがって……

目に毒、心に罅^{ひび}なんだよ。

この村は二十歳越えた奴は男女を問わず、ほとんど結婚済みだ。

なんかしらないけど心に焦りが生まれる。

結婚願望はそれなりだったんだけどなー。

まあ、でも……

「いつかこの村には帰ってくるよ。今度は嫁を連れてな」

農家とか狩人とかはおっさんの的には天職っぽいしな。それにやはり東西南北との固い友情はあるわけだし。

「……だったらー、せめでもう少し出発^{すし}ば延ばせねえべか？」

「んだ、明日つてのは急過ぎるっぺ」

いや、確かに急だけどさー……

「事前に言ったら村長が全力で引き止めにきそつなんだよなー。それに……」

「それに？」

一拍置いて四人の顔を見回す。

おっさんが何を言うのかを期待して、生唾^{なま唾}ゴクリって感じた。やれやれ……なら、その期待に応えてやろうかな。

「親しい奴にだけ告げてフラリと消えるってのかつこよくね？」

さすらいのダンディさ加減に痺れるぜ。

「ねえわ」

東西南北が口を揃えて言った。

まったく、ダンディってのが分かってねーなー。

翌日、宣言通りにおっさんはまだ日も昇っていない早朝に村を出た。村人の朝は異常に早いんだから仕方ない。

起きられなかつたらまずいのでおっさんは徹夜だ。
ずっと酒を飲んでいた影響でフラフラである。

見送りは四人の男達のみ。

こいつらもおっさんに付き合って夜通し飲んでたので具合が悪そう
だ。

なんかもう、出発は明日でもいいんじゃないかと思わなくもないが、
そしたら明日は明日でこんな状態になってそうなので無理を推して
今日出発する。

「ここらで見送りはいいぞ」

「だらもう家さ帰るじゃー」

「んだらまだなー」

「まだ来いよ」

「だらまんつ」

名残惜しさは微塵もない。

わりとあっさりと東西南北は背を向けて歩き出す。

さ、寂しいなんて少ししか思っただいぞ？

去っていく東西南北の背を見つめていると、不意にスノーが振り返
る。

「ラルドさーん！ 嫁ば見つけだらまた帰ってこいよー！」

そしてスノーと同じように三人も振り返りおっさんへと声をかけて
くる。

「帰っでくるまでにラルドさんの家ば造っておぐがらなー」

「いい女つがまえるよー」

「とりあえず素を出すのは控えどけー」

口々に投げかけられるエール。

そう、彼らと交わした言葉にさよならはない。

いつか再び会えると確信し、『また』と全員が言った。

おっさんは四人の気持ちに応えるように声を張り上げる。

「また……ウツ……」

やばい……声を張り上げたせいで胃から込み上げてくるものが……

ここで込み上げてくるのが涙でなくてどうする！

ゲロはダメだ。

折角の微感動場面が台なしだ。

せめて……あいつらが各々帰るまで耐えるんだ……

くそっ、いつまで手を振ってやがる。さっさと帰れ……

くそっ……もう……ダムが……決壊する……

——しばらくお待ち下さい——

はぁー、スッキリした。

んじゃいこつと。

背後は振り返らない。

むしろ振り返ることができない。

おっさんの吐瀉物はそのままだ。

きつと大地へと還り、綺麗な花を咲かせることだろう。

こうしておっさんはやっと旅に出た。

東西南北の四人は折角の旅立ちのシーンを台なしにした一人の男の背中が見えなくなるまで見送っていた。

「吐いだな」

「うん、吐いだ」

「盛大にな」

「台なしだべ」

「んでも、ラルドさんらしいな」

「あ、それわかるべ」

「あん人はあれでいいんだ」

「ちゅーか、わーもなんが吐きそうなんだけど……」

「もらいゲロかよ」

「あ、ダメだ……ウォエッ！」

「あーあーあー……」

「まっだく……」

四人は笑い合いながら家路へと向かう。

四人が一晩中飲んでいたことによって無断外泊の形になってしまったがために、嫁が家でどういう心境で待っているかなど考えもしないで……

ちなみに最も被害が大きかったのはスノーであった。

おっさん、旅立つ（後書き）

オッサンの村での生活をダイジェストでお送りしました。
植物成長促進のスキルは作者自身も忘れかけてましたね。

おっさん、捕まる

それは今にも雨の降り出しそうな雲に覆われた日のことだった。
すでに村から旅立って四日というところだ。

たった四日と侮ることなかれ

おっさんは昆虫形態のスキルを使ってクワガタの姿になることが出来る。
インセクトフォーゼ

つまりは飛べるのだ。

そんなおっさんの移動距離は一般ピーポーとは比べものにならないほどだからね。

まあ、初日は途中でへばってあんまり進めなかったけど……

だけどそれを帳消しにして有り余るオッサンの勇姿。割れながら惚れ惚れする。

しかしなんだな。

おっさんは性格のせいなのか分からないけど、わりと友達はいるタイプなのよ。

まあ、逆に嫌われる場合はとことん嫌われやすくもあるんだけどね。
まあ、それは置いておいて、つまり何が言いたいかというところ……おっさんは寂しいんですっ！

そりゃ、移動をやめればそこらにある木に話しかけて相手してもらうんだけどさー。移動中はそんなこと出来ないわけで……

東西南北の奴らと交流持ったことで人と触れ合うことを思い出して寂しさ倍増しちゃってんだよ。

一人旅も嫌いじゃないけど、ワイワイ楽しい旅の方が好きだ。

旅は道連れって言うんだし、東西南北の連中も連れてくりゃよかった。

どっかに旅してる集団とかいないかな？

いたら混ぜてもらうのにな。

まあ、おっさん以外全員が知り合いって状況は疎外感が半端ないけど、話を下ネタに持っていけばおっさんのターンに持ち込める。

「なあ、周辺に誰かいらないかな？」

ということとで近くにいる木に周辺の情報を聞いてみる。

木の一本も生えてない荒地などなら別だが、一般的な大地の状況について彼らが知らないことは少ない。

彼らは無駄に他人の秘密を知っている。また、それを木にしか言えなかった反動なのかやたら口が軽い。トイースが外で嫁と子作りに励んだ場所とかはあんまり聞きたくなかったぜ……

『任せんしゃい。十秒あれば根っこワークで周辺の奴らから情報がくるけん』

何より、何度も言ってる気がするが、こいつらはおっさんに協力的なのだ。

おっさんのことは根っこワークを使って情報がいつてるらしく、いきなり話しかけても嫌がったり疑問を感じることはなく、むしろ喜々として話し合いに応じてくれる。

程なくして、周辺にいる者達の情報を受け取ったおっさんはそういったところへ向かった。

その集団の姿はそう動かないうちに見えた。

とは言ってもまだ距離はそこそこ離れている。

しかし、おっさんの目には新聞の活字よりはつきりとその様子が見て取れた。

これはおっさんが進化することで手に入れた千里眼のスキルの恩恵だ。

千里とは大体四千キロくらいだった気がするが、さすがにそこまでは見えない。しかし、十キロぐらいならば余裕で見ることが出来る。本気を出せばもっといけるに違いないが、まだ試してはいない。とゆーか青看板みたいな「〇〇まで〇キロ」みたいな指標がないからしょうがないよね。

さて、話は変わって集団の様子を述べよう。

集団とは言っても見える範囲には五人しかない。テントを張ってるからその中に誰がいるかもしれないので、五人以上ということだ。それでこの集団、物々しいことこの上ない。

体には重そうな鎧、腰や手には剣やら槍やらを携えている。

顔はやの付く職業のお方みたいな強面で、傷やら入れ墨みみたいなのが付いている。

ぶっちゃけ怖い。

なんつー物々しい集団なんだ。

こんな奴らに財布出せって言われたらおっさん即効で逃げるぞ。

え？ 差し出さないのかつて？

嫌だよ、もったいない。

あいつら人からカツアゲした金で絶対キャバクラとか風俗行くんだよ？

おっさんだって滅多にいけないつーのにそのおっさんの金で行くとか許せますか？ いや、許せません。

それで捕まって殴られて脅されるならそれがおっさんの運命。逃げられたらラッキー。

むしろ財布に入ってる免許証やら保険証見られる方が怖いよ……

まあ、なんだかんだ言っただけでそういう方々とまともに出会ったことがないから好き勝手言えるんだけどね。

うーん……それにしても声をかけるべきかかけざるべきか悩むな……普段なら悩まずにスルーするんだが、寂しさ募るばっちなおっさん的には会話出来るならこの際ヤーさんでもいいとか思っただけで……ん？ スルーする？ ぶほっ！ スルーするとか秀逸なダジャレが偶然出来てしまった。言いたい。これは誰かに伝えたい。

よし、彼らに言ってみよう。

なーに、おっさん渾身のダジャレに全員大爆笑するだろうから全てはノープロブレムだ！

などと、浅はかにも思っていた時期がおっさんにもありました。現在おっさんは縄で縛られて轡を噛まされて地面に横たえられています。

なぜ、こんな状態になったのか。

理由は簡単に推測出来るかもしれないが、あえて言おう。

おっさんは盛大に滑ったのだ！

あれだよな。

発見されて開口一番に「貴様何者だっ！」とか「怪しい奴めっ！」とか威圧的に言われてんのに「あんた達が見えたから仲間に入れて

貰おうと思ったんだ。ホントはスルーするとこなんだろうけどね？
スルーする、スルーする……笑えない？」とか言ったのがダメだったのだろう。

もう、ダジャレを放った瞬間に「あ、これダメだ」と思いましたよ。それなのにダジャレだつてことに気付いてない可能性を考えてスルーするってとこの説明までしちゃった。

寒さは倍率ドン更に倍。

清々しいまでに事態は悪い方向に転がり、怪しい奴つてことで取っ捕まった。

縛ったのがむさ苦しい男なら轡を噛ませたのもむさ苦しい男。

テンション下がるわー。

せめて女はいないものか。

「報告にあつたのはその男かしら？」

おっさんの想いが天に届いたのか、鈴のような響きを持つ声がおっさんの耳に届く。

視線を動かしたおっさんの目に飛び込んできたのは、深紅のローブを身に纏う高校生くらいの女の子の姿だった。

周りにいる男達よりも頭一つ分は背が低いが周りの男達はおっさんよりもでかいので、女性としては高身長であるう背丈。これだけ見ればおっさんのストライクゾーンにいるのだが、腰元辺りまで伸びたローブに負けないくらいに鮮烈な赤色をした髪をツインテールにしており、それが彼女の容姿を幼く演出している。ま、胸の發育具合が残念なのも一つの要素か。勝ち気そうに釣り上がった瞳やこちらを見て微笑む仕草などはおっさんの好みなのだが残念なことに……

おっさんの好みではない！

要はストレートだったらストライクだったのに、大きく縦に割れるカーブを放ったせいでベース手前でワンバウンドしてキャッチャーに届きました的な感じ。

美少女ではある。それは認めよう。

だが、おっさんは美少女には興味が無い。美少女から美女にクラスアップしてからお会いしたかった。あ、胸ももう少し成長して欲しいな。

「アイリス様、この者いかがいたしましたでしょうか？」

「殺しなさい」

はい？

え、何て言ったのこの娘？

殺しなさいとかいきなり過ぎやしないか？

もしかしておっさんの心の声が聞こえちゃったのかな？

「かしこまりました。おい」

重厚な鎧に身を包んだ巨漢の声に、おっさんの近くにいた細身の男が腰から剣を抜き放つ。

その剣は鈍い光を放ちながら上段へと振り上げられた。

「んーんー！」

必死に止めてくれるように声を張り上げるが、如何せん轡によってその声が他者に理解されることはない。

「あら、何か言ってるようね？」

「今生への別れか怨嗟の言の葉かと」

「それは是非とも聞いてみたいわね」

「かしこまりました。轡を外せ」

巨漢の男の言葉に剣を振り上げたままの細身の男とは別の顔に入れ墨のある気合い入ったにーちゃんがおっさんの轡を外す。

「さあ、あなたの死に際の呪いの言葉を聞かせてちょうだい」

少女がやたら期待の籠った瞳でおっさんを見つめる。

どうやら少女は特殊なご趣味をお持ちのようだ。

これが俗に言う変態なのかもしれない。

「とりあえずおっさんを殺すのは待とうか？」

「嫌よ」

「なして？」

「だってわたくし人が死ぬ直前の絶望や怨嗟の声が好きなんですもの。殺さなければ聞けないでしょう？」

それが本音からくるものなら、この娘はかなり危ないよな？

おっさんってば知らず知らずのうちに虎穴に入ってたわけか……才ーマイガット！

「……殺さないで下さい」

「ダメ！」

おっさんの切実な願いは可愛らしく断られた。

どうする？

どうすんの？

どうすりゃいいのっ！

おっさんめっちゃピンチじゃん！？

絶体絶命とかそんな雰囲気じゃん。

口八丁で丸め込むとかそんなこと出来るレベルじゃない気がする。あっちはおっさんを殺す気満々過ぎてどうしようもない。

よし、ここは法を盾にしよう。

「人殺しは犯罪ですよ？」

「あら、ここがどこかの町の往来で、わたくし達の他に誰か目撃者でもいれば別ですけどここは町ではありませんし、周囲にわたくし達以外の誰かおりますかしら？」

いませーん。

木に確認してもらったけどあんたらしか人はいませんでしたー。くそっ、なら一か八かで良心に訴えてみよう。

「おっさんには妊娠中の妻と三人の子供が腹を空かしておっさんの帰りを待つてるんだ」

「子供がお腹を空かせるなんてあなたの罪だわ。無計画で作るからダメなのよ。どうせ養いきれなくて口減らしに捨てるといふ更なる罪を犯す前にわたくしが断罪して差し上げるわ」

なんか怒られた。

彼女は自分が言っていることが目茶苦茶だと気付いてるだろうか？

「……もういいわ。やっぱり死ぬ間際でないといい声では鳴いてくれないみたい。殺しなさい」

下される死刑執行の言葉。

振り上げられた剣がおっさんの首へと降ろされるのがスローモーションのように緩やかに見える。

終わった。

よくよく考えればすでにおっさんの生は大分前に終了している。
今は何の因果か意識はそのままに新たな生を与えられたに過ぎない。
その与えられた生を返還する時が来ただけのこと。

これでおっさんに主人公補正というものが存在するならば、空から
雷が落ちて剣を振り下ろす男に落ちるのだろうが、そんなことがお
っさんに起こるわけがない。

あ、でもとりあえず「大樹、東西南北……わりい、おっさん死んだ」
とか言って笑った方がいいんかな？

しかし、今更間に合わないよね？　どんだけ早口で言わなきゃなら
んのよって話だし。

ならば足掻くだけ無駄なのかもしれない。

ちよつと理不尽が過ぎすぎて納得出来ない部分もあるが、無理矢理
でいいから納得しとこう。

理不尽が過ぎすぎ……ぶほっ。

キンツと甲高い音。

それはおっさんの首へと当たった剣から発せられた。

しかしその剣はすでに元の姿とは掛け離れ、刀身を半ばから失って
いた。

辺りに静寂が満ちる。

誰もが起こった事象に啞然として言葉を紡ぐことが出来ない。

そんな中、おっさんの耳には聞き覚えのある声が聞こえてきた。

【ラルドは武具破壊のスキルを得た】

おっさん、捕まる（後書き）

主人公がポジティブ過ぎる……

作者がネガティブな反動かもしれないっすね

一里は約3・927キロメートル。ということで千里は約四千キロメートルです。間違いないですよ？

本来の千里眼は遠隔地の出来事や将来の事柄、隠された物事などを見通すことのできる能力とのことですが、主人公の千里眼は今のところ遠くがよく見えるだけです。

おっさん、逃げる

「た、助かった……のか？」

思わず口から声が発せられる。

それはこの場の静寂を切り裂いてその場の全員に正気を取り戻すには十分過ぎた。

「お、おれの剣が……」

細身の男はすぐ悲しそうな顔でその場に両膝をついた。

まあ、自分の剣が折れたのだ。大切にしてればただけその衝撃も大きいだろう。

それにしてもなぜ剣が折れたのか？

いや、そもそもなぜおっさんは死んでない？

「あなた……一体何をしましたの？」

少女がその鈴のような声を欺瞞色に染めて聞いてくるが、おっさんの方が聞きたいくらいだよ。

何をしたかの問いは簡単だ。答えは何もしていない。

とゆーか縛られてるんだから何も出来ないと言うのが正しい。んじゃ、どうしておっさんは死んでないのか。

普通、剣で斬られれば人は死ぬ。

ん？ 剣で……斬る？

あ、斬撃無効だっ！

大樹にもらった斬撃無効のスキルがおっさんの命を繋いだのだ。

いやー、もらったはいいいけど使う場面ないし、実感したこともないからすっかり忘れてた。

「わたくしの問いに答えなさい」

おっさんが思考に耽っていることで返答しないことにイライラしているのか、苛立ちの感じられる声音で少女がせっついてくる。

「おっさんが何したかは自分で考えてね」

ここでむやみやたらに正直に言うこともあるまい。
斬撃が効かないんだったら槍で突き刺しなさいってなる可能性が高いわけだし。

「くっ、なるほどね。剣が当たる間に笑ったのは自分が死なないと確信していたのね」

はて？ 剣が当たる間際におっさんってば笑ったわけ？ そりゃ、笑った方がいいのかな位の思考はあったけど実際には……あ、そういえばくだらないことにウケてたかも。

とっさに浮かんだダジャレほど後々思い返して見るとくそ寒いことが多いんだよな。

そもその話、理不尽が過ぎすぎてなんてダジャレでもなんでもなく、ただ『すぎ』って言葉を一つ多く使っただけだ。

「アイリス様、わたしがザラ殿に代わりこの者を処刑しましょう」

あ、まだ諦めてなかった。
当然か。

次に進み出たのは上半身マッチョな男だった。

ただ……顔がチワワだ。

え、嘘？

何これ可愛い。顔ちっちゃい。

「いいわ。クピン、やりなさい」

「御意」

名前も可愛い。

マッチョなのが残念かと思いきや、それがギャップになって更に可愛い。

って、和んでる場合じゃねーっ！

ヤベーよ。早く逃げねーと殺される。

でもどうやって？

「ふんっ！」

とりあえずおっさんを束縛する縄に力を込めてみる。

【剛力のスキルが発動した】

天の声が聞こえる。意識発動型のスキルは発動と同時に天の声のお知らせがある。おっさんが現状持つてる意識発動型のスキルは千里眼、魔力波、昆虫形態、そして剛力の四つだ。

スキルを発動させるとブチブチッという音になってあっさりと拘束が解けてしまう。

そういえば、抵抗らしい抵抗したことなかったけどこっもあっさりといくものなのか。

最初からやっつけば良かった……いや、使っていないから忘れてただけなんだけどね。

「逃げちゃダメ。＜赤熱の鎖よ 拘束せよ＞」

おっさんの拘束が解けたのを見た少女が腕を振るって言葉を紡ぐ。するとどこからともなく現れた赤い鎖がおっさんを拘束する。

「あつつ！」

ジューという肉が焼ける音が耳に届く。

この鎖、熱いなんてもんじゃない。

「ウフフツ、その苦悶の顔堪らないわ」

少女はおっさんの顔をみてその表情を喜悦に歪ませる。

「さあ殺しなさい」

「覚悟は良いか？」

「熱いとゆーか痛くなってきた」

チワワが背中に背負っていた大きな剣を構える。

何キ口あるのかわからないほどに重量感タツプリの無骨なデザイン。数多の獲物を斬ってきたのか、その刃はところどころ刃零れしている。

しかしそんなことに今のおっさんが注目出来るはずはない。

熱くて痛くて悶えることしか出来ないのだ。ぶっちゃけ、チワワが何もせずともこれだけでいずれ死ぬ。

くそー、これが蠟燭から垂れた溶けた蠟ならばご褒美なのに……

イメージだ、イメージしろ。このあつつい鎖は女王様の賜ったものでしかないんだ、と。あ、大分マシになってきた。

「さらば」

大剣が振り下ろされる。

「へぶっ」

その一撃は斬撃無効のスキルによりおっさんを切り裂くことは出来なかった。だが、その重量とチワワの腕力でおっさんの体が地面にめり込んだ。

痛い。確かにこれも痛いのだが……

「鎖の方が痛い……」

素直な感想がこれだ。

もう、マジで拷問だよこれ。まあ、イメージの影響でちょっと興奮するけど。

「まだ生きているだど？」

チワワが驚愕している。

驚いた顔がまた可愛いなオイ。

そういえばさっきまた新しいスキルを手に入れたんだよな。

武具破壊ってことで多少の当たりは付けられるけど具体的な条件とかはわからん。しかし、幸いにも大剣はまだおっさんに接触してるわけだし試してみる価値はある。

「壊れる」

【武具破壊のスキルが発動した】

天の声とともにチワワの剣に輝が入り、そのまま砕け散った。

「なっ！」

少女、周りの男達から声が挙がる。

おっさんとしては鎖も壊れて欲しかったが残念ながらそうはうまくことが運ばなかったのは悔しい。

「……なるほど。武器破壊のスキルですか……他者の武器を幾千幾万も破壊したものが至ると言われている境地。有象無象かと思いましたが、存外あなたは武人でしたのね」

「違います」

勘違いもはなはだしいことこの上ない。

おっさんが壊した武器なんて細身の男のものが初めてだ。

だったら何故おっさんがスキルを得たのかという疑問に突き当たるが、得たものは得たのだから仕方がない。細かいことは考えないようにしよう。

「謙遜は煩わしいからいいですね。あなたに武器破壊のスキルがあると知れば恐れるに値しませんわ。ドラゴンを殺す前に武器を壊されては敵いませんから、わたくしの魔法で殺して差し上げますわ」

「ドラゴン、だと？」

いるのか？

いや、ここがファンタジーな世界だというのならいても不思議ではない。

「あら、知らなかったんですの？ いいえ、違いますわね。あなたも狙っていてしらばつくれてるのですわね？」

「どういう、ことだ？」

「演技がお上手ですわね。まあ、あなたの狙いがドラゴン討伐による勇名か魔法具の媒介としての最高級品であるドラゴンの素材なのかはわかりませんが、それでも目的が同じならばあなたはわたくしの敵はが非でも殺しますわ。ライバルは少ないほうがいいですものね」
「いやいやいや、おっさんドラゴンに興味ねーから」
「さあ、遺言は済みまして？」

聞いちゃいねえよ……

くそつ、やべーな。逃げなきゃいかんが、剛力のスキルを使用しても鎖が引きちぎれない。それならば昆虫形態を……

インセクトフォーゼ
「昆虫形態！」

【失敗。対象に接触する不純物あり。昆虫形態時分のスペースを確保しろ】
インセクトフォーゼ

えー……うそーん……

そんな条件があつたんだ。

「何をわけの分らないことを……死になさい。く古の炎よ 全てを滅ぼせ」

少女の言葉とともにその背後に炎が現れる。

それは雪のように白く、圧倒的な熱量を誇る炎の塊。
しかし、間近にいる少女は汗ひとつ掻いていない。周囲にいた男達は最も傍にいた巨漢の男以外は熱いのか少女から距離をおいている。おっさんにとって幸いなのは白い炎が現れたその瞬間に体を拘束していた鎖が消えたことだ。これなら逃げられる！

「昆虫形態」
インセクトフォーゼ

【昆虫形態のスキルが発動した】
インセクトフォーゼ

おっさんの姿がエメラルドグリーンのクワガタへと変わる。
しかし己へと迫る白き炎はすぐ目の前まで迫っていた。

「うおりやあああ！」

火事場の馬鹿力とでも言うのかがむしやらに羽ばたいて上昇した結果、辛うじて炎の一撃をかわす。
でもその炎の余波は凄まじく、おっさんの体のあちこちが焦げた。

「面妖なスキルを持つてますわね」

空のおっさんへと目を向けた少女が面白いものでも見たかのような
微笑みを顔に携える。

「あんたは危ないもん持つてるね」

「危ないなんてとんでもないですわ。魔法ほど高尚な力なんてありませんわ。魔法とは……」

「そうですか。んじやおっさんは逃げます。あばよ、貧乳」

「こら、わたくしがせっかく魔法について講釈をしてあげようと言
うのですから聞きなさい！ とゆうか今なんつた！？」

おお、すっぱードスの効いた声。

こりや殺意割り増しだな。

殺されても敵わん。逃げられる時に逃げる。

そもそも人恋しいからと言って関わって良かった人種ではなかった。

「逃がしませんわ。＜真紅の魔弾よ 敵を穿て＞」
「ぬおっ」

向かってくる赤いスーパーボールみたいな奴を華麗にかわしていく。
ふふふ、おっさんがクワガタ姿でどんだけ飛んでると思ってるんだ。
これくらい避けるのなんて楽勝だ。

「何をしてますの！ 弓でもなんでも使ってあいつを落としなさい
っ！」

「は、はいっ」

むおっ、今度は弓矢かよ。

まあ、狙撃ライフルとかがなくてよかった。さすがにライフルの弾
はアニメのキャラクターでもない限りはよけらんねーからな。

さーて、逃げることに集中しないとさすがにヤバい。おっさんの全
力、その身に受けやがれ！

なんとか追撃をかわしながら逃げていると次第にポツリポツリと
雨が降り、次第に雨足を強くしてきた。

そのせいなのかどうかわからないが、少女の追撃は止み、おっさん
も一安心ということとで近くの森へと身を隠した。

しかしあれだ。天然のシャワーは有り難いんだが、降り注ぐ雨が強
すぎて一メートル先も見えない。

どこか雨宿りが出来るところが必要だろう。

おっさんはそんな場所をわざわざ探す必要はない。

ここは森。つまりおっさんのホームグラウンドなのだからそこの

木にでも適当な場所を聞けば良いのだ。

教えてもらったのは森の奥地にある洞窟。

入口は人が一人ようやく入れるほどに狭く、中は先が見えないほどに暗い。

熊とかが住んでるわけではなさそうだが、蛇とかがいそう。

「ふい」

人型になって洞窟に入ったおっさんは入口付近に寄り掛かって座り、大きく息を吐いた。

なんとも言えない体験だった。

まあ、一度殺された身からすればすでに通った道だと開き直れるのだが、やはり問答無用で殺されるというのは慣れないものだ。

斬撃無効のお陰で斬られることはなかったが、少女の魔法で火傷を……あれ？ ない？ 火傷の跡がないぞ？ 火傷しなかったのか？

いやいやいやあれで火傷しないなんてことはありえねーよ。でも現に火傷はしてない。

「わけわかんねえ……」

この世界はおっさんの想像を斜めにした出来事がよく起こる。

だからと言って自分で考えても埒がない。まあ、難しく考えてもしようがないのかもな。

誰か説明してくれる人が現れるまで保留にしよう。

今は火傷しなくて良かったことで一件落着。おっさんはハッピー、はい終わり。うん、これでいい。

それにしても腹減ってきたな……

おっさんが持っていた日保ちする食料なんかの荷物は少女らに捕まった場所に置いてきてしまった。

森にいけば食べられる物を採集出来るだろうがさすがに土砂降りの中をと言うのは億劫だ。

では選択肢としてあるのは、我慢するか洞窟の奥に行ってみるかしかないわけだが、軽率な真似は危険だということを実感したばかりのおっさんは雨が晴れることを信じて待つことを選択したのだった。

おっさん、逃げる（後書き）

アニメのキャラクターでもない限りとか同じ架空の存在である小説のキャラクターが言うことに我ながら違和感を覚えてます。

なーんか次の展開が読めるぞって思われるかもしれませんが、それは胸のうちに秘めといて下さい。

おっさん、洞窟の中で……

洞窟に入ってからどれくらいの時間が経ったのだろうか。

少なくとも丸一日近くは経とうとしているのかもしれない。

その間ずっと天候の回復を祈っていたのだが、その祈りは通じず空の機嫌は悪くなっていくばかりだ。

雨が強くなるだけでなく、風が吹きすさび、雷公様が絶え間無く降り注いでいる。もうこれは嵐と言っても過言ではない。とゆーか嵐そのものだ。

洞窟の入口付近にいては風に煽られた雨が侵入してくるので、おっさんは現在、洞窟内をちよつとばかり進んだところにいる。

腹の虫はすでに限界の域に到達しようとジワジワと近付いてきてるところだ。

たった一日でと思うかもしれないが、この体は存外燃費が悪いのだ。

車で例えるならば一リットルで五キロくらいだろうか。昨今の低燃費の風潮で一リットル三十キロ走る車も開発されているというのに嘆かわしいことだ。

まあ、おっさんが乗ってた車は一リットル十五キロ程度でそれを基準にしているから、大体人の三倍は食料を消費すると考えてくれ。

おっさんが村にいた頃に畑仕事をするようになったのも、お前はよく食うんだから自分で作れみたいな揶揄があったからこそだ。

とりあえず、おっさんは人より食うので食料を確保せねば餓死してしまう恐れがあることはわかって頂けたかと思う。

そして、外に出るのは天気都合上無理となれば残る選択肢は洞窟の奥に何かないか探すしかない。

どんな生物がいるか分からないから危険？ そんなものこの空腹の前では関係ない。

むしろどんな生物であろうとも不意について殺して食ってやるくら

いの意気込みを見せなければなるまい。

弱肉強食焼肉定食、所詮この世は食うか食われるか。道具がないから火をおこすことが出来ないのが残念だ。

暗い暗い洞窟を進んでいく。

その歩みは牛歩の如くゆつくりと、細心の注意を払いながら恐る恐るといった調子だ。

この洞窟は内部が入り組んでおり、先を見通すことが出来ないが、身を隠しながら進むにはうってつけだった。

どれほど進んだのだろう。

入口から計れば大した距離を進んでないかもしれないし、もしかしたら結構な距離を進んでいるのかもしれない。

そんな曖昧な感覚でしかなかったが、この光景を見ればそんなことは吹き飛んでしまった。

洞窟内を進んだ先にあったのはとてつもなく広い空間だった。

暗く狭かった洞窟の中を進んでたどり着いたというのにそこは仄かに明るく、野球場が丸々入る大きさで、天井は見上げるほどに広い。

「ん？」

天井を見上げていた視線を戻すとおっさんの入ってきた道とは反対側に明らかに人の手によるものと思われる扉があった。

「行ってみるか……」

扉の前に立ったおっさんは意を決して扉をノックしてみる。次いで

「ごめんください」

声をかけてみたが反応は返ってこない。

聞こえなかったのかと思い扉に手をかけて開けてから中に声をかけることにする。

そして開け放った扉の中に見たのは確かに人が暮らしていると思われる場所だった。

洞窟の中に作られた住居とでも言うのだろうか。

天井は約三、四メートルの高さがあり、通路の幅はおっさんが昆虫形態のスキルを使ってクワガタになっても余るくらいはある。

「すいませーん」

声をかけたがやはり反応はない。

誰もいないのだろうか？ それとも居留守？

どっちにしろ人が来るまで扉の前で待機しているべきではないのか。しかし、そんな考えは懦弱だとばかりに腹の虫が催促する。

おっさん自身も限界が近い。それがおっさんから冷静な判断力を奪っていく。

そしてそのまま扉の内部へとおっさんの足は進んでいった。

扉内部の通路の横には部屋のように区切られたスペースがあり、中を覗いて見れば寝台であろうものが確かにあった。

その他にも調理場や書庫などの確かに人が住んでいる形跡がある。

「すいませーん。誰か居ませんかー？」

声をかけてみる。

これが住居ならば侵入したのはおっさんだ。

不法侵入など泥棒の所業だ。そんなことは分かっている。

なのでおっさんは迷い込んだ旅人という設定だ。設定というかその

もののだが、そういうスタンスをアピールしとかなないと住んでる人に会った瞬間に切り掛かって来られそうだ。
あの赤髪少女みたいに人の話を聞かないような人物だったら出会った瞬間にアウトだが、あれはわりと稀な例だろう。

「あのー、すいませーん」

しかし、おっさんがいくら声をかけようとも反応は返ってこない。
うーん……とりあえず誰もいないと仮定して調理場を漁ろうか。いやいや、そんなんしたらもう言い訳できない。
とりあえず誰かいないかくまなく探してみよう。

いくつかある部屋の中を探してみたが、人の姿を確認することは出来ない。

やはり誰もいないのだろうか。

最後に残ったのは通路の奥にある扉。

他の部屋には扉がないのにここだけには扉が存在する。

そのことに微妙に嫌な予感がしなくてもないが、ここだけ見ないということは出来ない。

生唾を飲み込み、扉に手をかけ開けてみる。

しかし、そこには誰もおらず十畳ほどの空間があった。

ただし、中がちょっとおかしい。

なんとゆーかファンシーな世界観なのだ。

壁一面がピンク色でぬいぐるみやらおもちゃやらがいっぱい。お、幼児が使う滑り台まである。

部屋の中央には普通の三倍はある大きさのベビーベッドらしきものがあり、その頭上にはクルクル回るおもちゃ、通称オルゴールメリーである。

完璧に赤ちゃんの部屋だ。

とゆーか品揃えが豊富過ぎてこの部屋の持ち主の親バカ度がよくわ

かる。

ただ、その部屋の持ち主である存在の姿はない。その代わりにベビーベッドにはダチヨウの卵より大きな真っ白い卵が鎮座している。今のおっさんは猛烈な空腹に襲われている。そんな時に卵なんてご飯に合いそうなものを見つけたのだが、こんな部屋に君臨する卵を食材として見る事が出来るのだろうか？ いや、わかる。あれは食材として決して見てはいけないものだ。ただ好奇心がくすぐられてしまうのは仕方あるまい。一体あれは何の卵なのか。そして卵生の生物におもちゃなどをわざわざ用意するのはどんな人なのかと疑問が沸いてでてくる。

溢れる好奇心を抑え切れず卵へと近付く。
そしてそつと手を触れてみた。
手触りはツルツルで微かに温かい。

【無色の魔力溜まりを感知。吸収成功】
【ラルドは認識偽装のスキルを得た】
【ラルドは衝撃無効のスキルを得た】
【ラルドは時間遅延のスキルを得た】

え、何？ 何事？

いきなり天の声が聞こえたけど……
つてあれ？ この卵つてこんなでかくなかったよな？
なんか小学一年生のお子さんが丸々入ってそうなくらいに巨大化してんだけど……

あまりの出来事におっさんビックリというか呆気にとられています。

しかし、そんな時間も長くは続かない。
なぜなら卵にひびが入ったからだ。

「え、嘘？ 生まれんの？ えーっ！？」

はい、パニック状態です。

体が自動的に動き、卵から一步、二歩と後ずさる。ついには壁へと背中がくっついた。

そうこうしているうちに卵は割れ、中から出てきたのは卵と同じく真っ白な体の翼のあるトカゲ。

違う。

どう見ても竜だ。

竜はおっさんの見ている前で翼を大きく広げ、辺りをキョロキョロと見回す。

そしてその蒼い瞳がおっさんへと向けられ、ぱっちり目が合ってしまった。

「■■■■■」

竜が何事か叫ぶが、それはおっさんでは判別出来ない。聞いたままを表現すればギャウーだろうか。

竜が口を広げておっさんへと飛び掛かってくる。

生物の親というのは大体が子供のために餌を用意するものだ。実際おっさんも幼虫時代は親であるクワガタに餌をもらっていた。

ならば竜がおっさんのことを親が用意した餌だと認識しても不思議ではない。

「お、おっさんを食べたら腹壊すよ！ 装甲とか邪魔でしょ！？」

理解していないだろうとは思いつつも必死で弁明を試みる。

無駄な弁明をする前に逃げろと思うかもしれないが足が竦んでしまつて動かない。

ファンタジーな世界とは割り切つていてもその象徴たる竜の前では

おっさんの思考など関係なく、いざ目の前にしてみると体の方が反応してくれないのだ。

だが、竜はおっさんの予想に反して目の前で静止し、おっさんの顔をペロペロと舐め出した。

「ほえ？」

思わずマヌケな声が漏れる。

しかしそんなことは意にも返していないのか、竜のペロペロ攻撃は尚も続く。

うわぁ、顔が竜の唾液でベチョベチョだ。

「ストップストップ舐めるのやめなさい」

竜の頭に手を置いて行為を制止する。

ちゃんとおっさんの意図が伝わったのか竜はペロペロするのをやめてくれた。だが、今度は頭をおっさんの胸にグリグリと押し付けてくる。

その……なんだ、もしかしておっさんってはこの竜の親とか思われてたりすんの？

「おっさんはお前のお父さんじゃないよ？」

そうは告げても理解はしていないのだろう。

グリグリ攻撃が止むことはない。

なんとゆーか、こつも懐かれるとおっさんの父性を刺激されるな。

だがおっさんが親でないのは純然たる事実だ。

それに、本当の親御さんに申し訳ない。

だってベビー用品をこんだけ揃えるくらいにこの子が生まれるのを
楽しみにしてたんだろうから……

「リリーッ！」

その時だ。

扉を蹴破る勢いで一人の女性が部屋の中へと入ってきた。

その女性は一言で表すなら美人と言う以外に言葉が浮かばない。

髪の色は光沢を持った白で歳をとって増えて来る白髪とは似ても似つかない。髪の長さは肩くらいで水分を多分に含んでいるのかポタリポタリと髪の中から水滴が落ちている。

どこかのパーティーに出てたんですかと聞きたくなるような艶やかな青のドレスも同様に水に濡れてその肢体に張り付いており、メロソソと云いたくなるような胸元やむっちりとした臀部をより艶やかに演出している。

「卵が割れてる……っ！」

女性は愕然とした表情を浮かべた次の瞬間にこちらに視線を移し、まずは竜の姿を見て頬を緩めたかと思いきや、ギロリとおっさんのことを睨む。

彼女が部屋の中に入って初めて真つすぐに顔を見たのだが、少し長めの睫毛や目鼻立ちが綺麗に整っているため、やはり美人である。そしておっさんが勝手に認定した左目の目元にある泣き黒子がやたら色っぽい。

ただおっさんを睨んでいるためなのか竜を見ていた時は穏やかで少し垂れ気味だった蒼い瞳は鋭角に吊り上がり、口は歯ぎしりが聞こえてきそうなほどに噛み締められている。

「リリーに何をしたあっ！」

女性が声を怒り一色に染め、おっさんに近付いてくる。
そして同時におっさんの顔に向かって彼女の握られた拳が迫ってくるのが見えた。

あ、これ問答無用で殴られるやつだわ。

おっさん、洞窟の中で……（後書き）

やっとここまで来たって感じですよ。

ただ、またおっさんが強化されてしまった……

全然戦ってないのにまた防御力アップ

タグがあらすじにその旨を入れるべきなのかどうか……

おっさん、話し合う

女性の拳はおっさんの顔の中心を正確に打ち抜いた。

「普通に痛いっ！」

「なっ!？」

激痛に顔をしかめるおっさんと驚愕の表情を浮かべる女性。

おっさんの味わった痛みは例えるまでもなく人に殴打された時のそれだ。

だというのにその衝撃自体は全くないためのけ反るということではなく、ただ単に痛みだけが顔を起点に全身に回る。

「効いてないですって……」

「いや、痛いって言ったじゃん」

「くっ、ならばっ！」

女性はおっさんのツッコミを無視して距離をとり、構える。

「限定、部分解除」

女性の呟きと共にその右腕が白い鱗と爪を持ち肥大化する。

女性の華奢な身体には似つかわしくないその腕は、今なおおっさんの胸に顔を擦りつける竜のものと酷似していた。

「見かけによらずたくましい腕をお持ちですね……」

あれはやばくね？

殺る気が伝わってくるんですけど……

「とりあえず落ち着いて話でも……」

「黙れっ！」

そうは言っても……

とゆーか、なんでもこうも立て続けに人の話を聞かない女と出会うの
だろうか。

おお、ゴッドよ……おっさんはあんたになんかしましたっけ？

「リリーに施された護りを解くだけに留まらず、拐かそうなんて万
死の刑に処してもまだ足りないわ」

要するに凄く怒ってますと彼女は言いたいらしい。

事の成り行きを弁明したいのだが、どうせ聞いてくれないんだろう
な……

だったら！

「武装を解除しろ。こいつがどうなってもいいのか？」

胸に擦りつけられる竜の頭を抱え込みながら女性を脅迫する。

第三者の目から見ればおっさんは悪だ。

だが、こうでもしないと話聞いてくれそうにないんだもん。

「……下種め」

女性の腕が元の白魚のような腕へと戻っていく。

ああ、心が痛い。

だけど睨みつけるその瞳はご褒美と言えなくもない。

「おっさんの話を聞いて貰おう。あと、いくつか質問がある。拒否

権はない。拒否すればこの竜がどうなるかわかってるだろうな……
あ、こら顔を舐めるんじゃない」

ペロペロ攻撃リターンズ。

おっさんの顔は飴じゃないんだから、甘くないよ。むしろ塩っ気があるはずだからね。

「……リリーに手出しはしないで」

「君がわっぷ……素直にぬおっ……おっさんのおほっ……要求をのほほ……受け入れてくれるのならにあっ……だからやめなさいってば」

「クウーン……」

「そんな叱られたワンコロみたいな声で鳴いてもダメだよ。おっさんらは今から大人の話し合いって奴をするんだからね」

竜に言い聞かせるかのように言う顔と顔を舐めるのは止めてくれたのだが、おっさんの胸板という名の装甲に顔を擦りつけるようにして甘えてくる。

まあ、顔を舐めないだけマシか。

さて、これからこの女性への質問タイムだ。
しかしその前に……

「まず、食べ物をお恵んでくれませんか？」

腹を満たすことを優先しよう。

与えられた食料は黒いパンと干し肉だった。欲を言えばスープレッ的な汁物が欲しいのだが、用意してくれと言って素直に従ってくれるかは不安だ。

そりゃあこっちには人質ならぬ竜質がいるのだから表向きは素直に聞いてくれるかもしれないが、これ以上好感度を落とす行為はいただけない。

今もおっさんがパンを咀嚼する行為の一挙手一投足を注視し、下手なことをしたら暴力に訴えて立場を逆転されかねない。

「さて、話し合いをはじめようか」

「……望みはなに？」

「だから話し合いだってば」

「リリーの心臓？ それとも鱗や爪、牙かしら？」

「いや、聞いてよ……」

「でもおあいにくさまだけど、リリーはまだ生まれて間もない幼竜に過ぎないわ。あなたの欲するドラゴンの魔力素材としてはまだ大した力を持っていない。だからリリーを今すぐ解放して。代わりに私があなたへ心臓を提供するから」

おっさんの話を聞いてないのか、それともあえてそうしているのか女性は一気にまくし立てる。

「だからまずはおっさんの話を聞きなさいっ！」

故に怒鳴り付けるように声を発した。

まずは何事も話し合いが肝心だ。

相手を話し合いのテーブルに着かせることは先の少女の時は失敗したが、今度こそはと意気込みをかける。

「わかった……」

おっさんの熱意が通じたのか女性が話を聞く態勢をとってくれたのは僥倖だ。

「まずは円滑な話し合いのためにお互いの自己紹介と行こう。まずはおっさんからね。名前はラルド。ダンディかつストイックな男で未婚です。あえてもう一度言つと未婚です。好みのタイプは君のような果物屋さんを開けるボディの女性です」

「ラルド……ふっ」

なんか名前を鼻で笑われてしまった。

とゆーかおっさんの好みのタイプはスルーですか？

まあ、今思つと好感度がダウンするようなことを言ってしまったのでスルーしてくれるのは有り難い。

「次はそつちね」

「クラベジーナ」

女性の答えは簡素な単語ひとつだ。

恐らくではあるが、

「それが君の名前かな？」

おっさんの言葉にクラベジーナさんはコクリと一回だけ頷いた。なんとも素っ気ないことだ。

「んじゃまずはおっさんの釈明を聞いてくれ……」

そうしておっさんはどうしてここまで来たのかと、なぜか竜が卵から生まれておっさんに懷いたという状況を一からバカみたいに正直に説明した。

この場において嘘を混ぜるのは大した益を生まないし、ばれた時に厄介だからな。

「……それを信じると？」

「出来れば信じて欲しいかな」

「たまたまここへ入り込み、偶然リリーの卵に触れたら、なぜかリリーが生まれて懷かれた。ドラゴンの魔力素材には全く興味が無い。そんなご都合主義のような豚の言葉を信じると言うのか」

「そうだよ……っていうか今、おっさんのこと豚って言った？」

「お前はラルドという名前なのだろう？　ならば豚だろ」

全く脈絡がない。

でも豚と呼ばれても悪い気はしないな。

「まあ、いい。リリーを解放して即刻ここから出ていけ。ここを口外しないと言うのなら殺しはしないでやる」

それに正直が過ぎて立場が逆転しちゃった。

おっさんと竜の様子を見れば、竜質としてどうしようと思っていないことが丸わかりなのも原因の一端を担っているかもしれない。

「よし、リリー」

「リリーが汚れるから名前で呼ぶな」

……君はクラベジーナさんの元に行きなさい」

……行く気配がないな。

どないしょ？　とばかりにクラベジーナさんへと視線を移す。

「リリー？ そんな豚なんか構ってないでこっちにおいで？」

しかし、リリーはクラブジーナさんの言葉を無視しておっさんに纏わり付く。

「リ、リリー？」

クラブジーナさんの顔に困惑と焦燥が浮かぶ。

ハッキリ言えばリリーの中ではおっさん>クラブジーナさんの構図が作り上げられていると言ってよいのかもしれない。

「豚、どういうこと？」

「……おっさんが聞きたいよ」

「あんたリリーに何かしたわけ？」

「神に誓ってないはず……だよね？」

おっさんがしたことと言えば卵に触って、リリーが生まれて、リリーがおっさんを見たかと思っただけ。ただそれだけ。

しかしそのプロセスの中に何かしらでかしてないと言い切れない。

「ちなみに竜って生まれて初めて見た存在を親だと思う生物？」

「断じて違うわ。確かにドラゴンは初めて見た存在を親と思うけど、ドラゴンは同種の魔力を感じ取ってるからドラゴン以外の種を親とは認識しないわ。だからたかが人間のあんたを親と誤認するのは有り得ない話だわ。ほんつつつつとおおおに何もしてないのね？」

念を押されて聞かれてもなー。

頭を働かせる。

そもそもおっさんはカテゴリーで見ると人ではあるがただの人つてのには当てはまらないかもしれない。

なにせ虫人だ。^{ムシヒト}そのせいなのか。

いや、竜は同種どうしゅの存在を感じ取っているのならば、おっさんはアウトだ。だって竜じゃないもん。

じゃあ、何が原因だ？

考え込んでいると天啓のようにピロリンと考えが降って湧いてきた。

確か、おっさんが卵に触れた時に無色の魔力吸収のスキルが発動したはずだ。

これによって吸収したのが竜の魔力ならば、それを感じ取ったりリーがおっさんを同種として認識してしまった可能性がある。

だが、正直にこれを告げたらおっさんの命がまずいことになるのか？

結局お前のせいだとか言われて殴られるオチが見える。

隠すべきだ。そう、これはおっさんの秘め事にするべき事項である。

「な、なんにも知らないよ？」

「なにか心当たりがあるのね？」

な、なぜわかった。

クラベジーナさんは読心術でも心得ているのか……

「ない。何もない。おっさんまるで何もわからないです」

「言え」

「何も知らないってば！」

「だったらなぜ挙動不審になるのかしら？」

「おっさんは元から挙動不審だよ」

「……はあっ、まあ、リリーがあんたを父親として認識している以

上どうこう出来ないわね」

どうやらクラベジーナさんは追求を諦めてくれたみたいだ。

「すでにあんたを父親として認識してしまっている以上、あんたを殺せばリリーが悲しむ。だから今はあんたを殺さないわ」

「この子と君はどうゆう……」

「あんたには関係ない」

おっさんの質問は途中でばっさりと切られてしまった。

「とりあえずリリーの親権をあんたから私に移すわ」

「出来るの？」

「出来るのって言うかするの。あんたは父親ではないということはこの子に認識させて私が母親だと認識させる。これしか問題解決の手はないわ。少なくとも言葉を覚える前に本能に刷り込まないと……」

……」

クラベジーナさんの呟いた言葉の最後の方は小ささ過ぎて聞き取ることが出来なかった。

それにしても……

「親権がどうのこうのって、おっさん達、なんか夫婦みたいだね。クラベジーナさんのことジーナって呼んでいいかな？」

まあ、親権を争っているのなら崩壊間際ではあるけどね。でも、これを期にクラベジーナさん、いや、ジーナと仲良くなれたらいいと思う。

「嫌」

しかし、回答はただ一言だった。
手厳しい。

だが、脳内ではジーナと呼ばせてもらいます。

「あー……そうだ。もしかしたらなんだけど、クラベジーナさんって竜？」

「……ええ」

「だよ。腕とか竜っぽいのに変わったし、リリーの代わりに心臓をどうのこうの言ってたからそうかもってちよっと思ってたんだ」

腕が変わるの見なかったら、そういう考えなど微塵も起きなかったに違いないが、さすがにあれを見てしまうとそういう考えも起きるとゆーか

「この子の母親ってクラベジーナさんなんだ」

人妻で子持ち。

旦那を知らないだけに何か滾るものがありますなあ。

「……あんたには関係ない」

しかし、そこでジーナは言葉を濁してしまった。

もしかして、リリーの本当の母親ではないのだろうか？

それにしても、ジーナと仲良くなるというのは前途多難なようである。

おっさん、話し合う（後書き）

リリーもクラブジーナも最近買った『幻想世界11カ国語 ネーミング事典』を参考にさせていただいております。
便利です（＾－＾）

おっさん、下半身が……

「で、親権を移すってどうやんの？」

裁判所で協議するみたいなことは出来ない以上、具体的な案が必要だ。

「さあ？ 私もこんなこと初めてだし……とりあえずリリーの目の前から消えて。期間は一生」

「ふむ、それが一番確実なのかもね。ただ……外はまだ嵐だね？」
「ええ」

笑顔で肯定された。

「とりあえず嵐が止むまではリリー」

「呼ぶなっば」

この子の視界に入らないところで過ごさせてくんない？ おっさんも用事があるから嵐さえ収まれば出ていくから」

「……いいわ」

おお、却下されて今すぐ出ていけとか言われるかと思ったけど話がわかるね。

「んじゃ、おっさんはテキトーにくつろいでるからあとヨロシク」

そう言って懐くリリーを引っぺがして部屋を出ていこうとする。

「ちょ、リリー。付いて行っちゃダメよ!？」

後ろの方でジーナが慌てたような声を上げるので振り返って見れば、リリーがおっさんのあとをちょこちょこ付いてきていた。

「いいかい？ おっさんはこれにてドロンするから君はお母さんと一緒にここにいなさい」

「■■■■■」

うん、全然わかってないね。

だってすっげー嬉しそうに鳴いてるもん。

竜の表情とかよくわからないけど確実に笑顔だわ。

「こうなったら実力行使だ」

身を翻して部屋の外に出て即座に扉を閉める。

いやー、おっさんの人生で五本の指に入るスピードだったよ。

「■■■■■」

おっさんが扉の外で達成感に包まれていると部屋の中からリリーのものらしき慟哭の叫びが聞こえてくる。

ああ、出会ってまだ一時間未満だというのにそこまでおっさんのことを……

なんて感慨に耽る余裕などなかった。

ドンツという音と共に局所的な地震が起きる。

音の発生源は今しがた閉めた扉からだ。

中の様子を伺うことなど出来ないが、ジーナの「リリー、止めなさいっ！」って声が聞こえたことから何が起きているのかは推し測る

ことが出来る。

おっさんが扉から数歩離れるのと扉に亀裂が入るのはほとんど同時だった。

亀裂が入ってしまうとあとは容易に扉は粉碎されてしまい、中から白き幼竜であるリリーが現れた。

「
■ ■ ■ ■ ■」

リリーはおっさんの姿をその視界に入れると喜びの声を上げて近寄ってきた。

「ダメって言ったじゃん……」

ここまでやるのか。

いや、竜に人の常識など説いても詮無いことなのかもしれん。

それにしても、よく扉もあれだけ持ったものだ。五発くらいは耐えたんじゃないか？

すっげー頑丈。

「ちょっと、なんですぐに遠くへ行かなかったのよ」

リリーのあとに続いてジーナが部屋から出てくる。

顔に不満と書いてありそうな表情だ。

「まさか扉を破壊するなんて思わなかったんだよ……とゆーか力づくで止められなかったの？」

「バカ。そんなことしたらリリーが怪我するかもしれないじゃない」

言葉が出ません。

こいつはアレだ。典型的な子供を叱れない親バカって奴かもしれないな

い。だてに子供用のおもちゃを買い揃えてないな。

「じゃあ、今度こそうまくやるから協力ヨロシク」

「……ダメよ」

「は？」

「リリーがあんな声で泣くんだもの……可哀相過ぎる」

「もしもし？ それじゃ目的は達成されないのでは？ ここは心を鬼にするべきだよ」

「鬼になるならあんたがなりなさい。私には無理」

諦めるのはえーな……

まあ、おっさんが原因であるわけだし、おっさんに出来ることならなんでも協力しなければなるまい。

おっさんの挑戦が今、始まる。

で、程なくして終わった。

結果は惨敗。

リリーったら何してもおっさんの居場所嗅ぎ付けやがんの。

何度か見えないところに移動できたのに即効見つかって、はいペロペロです。

「もう一回」

ジーナが無感情に告げる。

序盤までは協力してくれたのに最早ただの傍観者に近い存在と化していた。

「うーん、でももう外に出るしか方法がないんだけど……」

外はいまだに嵐。

台風のリポーターじゃないんだから、そんな中に突撃するのは御免だ。

「外はダメよ。万が一にでもリリーがあんたに付いていったら最悪の結果が待ってる」

「ならクラベジーナさんが全力で押し止めればいい話だと思うんだけどな」

「リリーには怪我一つなく育って欲しいの。そう誓ったから……」

誰にとは聞くべきではないのだろう。物凄く気になりますけどね。それにしてもリリーのことはどうするべきか。

ジーナが実力行使を忌避している以上、打つ手がないと言える。

それにジーナの言葉から察するにおっさんが実力行使でどうこうするのには止められそうだ。暴力でもって。

まあ、そもそも何の罪もないリリーに対して実力を持って排除する考えなど端から除外の対象だ。実力自体がないとも言えるがね。ならばいっそ

「もうおっさんが父親でいいんじゃないかね？」

出来ないと言うのなら受け入れてしまった方が良い。

しかも、おっさんが父親ってことはジーナは母親だ。

つまりリリーを通しておっさんとジーナの間に内縁が生じる。

あれ？ 悪くないどころかこれって名案だろ。

おっさん目茶苦茶忤えてます。

「嫌よ」

「即答ですね」

やっぱ旦那とかいて、その辺りを気にしてるのかな？
気配のカケラすらもないのに忌ま忌ましい奴だ。

「リリーの父親が豚とか有り得ないわ」

「……それだけ？」

「十分な理由でしょ」

「いや、ジーナの旦那の立場がなくなるからとか……」

「は？　なんで私に旦那がいる設定なのよ。とゆーかジーナって呼ぶな」

旦那はいない、だと！？

未婚の母って奴か！

た、堪らん……

「鼻息荒い、気持ち悪い」

「おつとスマン。つついジーナの属性に興奮してしまった」

「だからジーナって呼ぶなってば！」

「H A H A H A、ソーリーソーリーヒゲスオーリィー」

「殺す」

あ、痛い。

マウントポジション取られた。

ジーナってば無心に殴ってるよ。

しかしなんだな……このアングルは絶景だ。

したから見上げる二つの丘のなんと見事なことよ。

熱情を持て余すとはこのことか……

「ひつつ」

突然ジーナが可愛らしい悲鳴を上げ、瞬きほどの時間でその場から跳び退く。

一体どうしたと言っのだろうか……

理由はすぐにわかったが深くは語るまい。ただ、カブトムシがヘラクレスとまではいかないがアトラスくらいにはなっていたとだけは告げておく。

ジーナはその変化でも感じ取ったのだろう。

「な、なんで……バカ、変態っ！」

「男ならば当然の反応だっつーの。まあ、おっさんも恥ずかしいけどね」

顔を真っ赤にするジーナ。

しかしおっさんは断固として不可抗力の看板を掲げたい。

未だに禪一丁ふんどしなのはおっさんに合うズボンがないからに他ならない。でも恥ずかしいことは恥ずかしい。溜まってるんだろっな……

「とりあえず何か腰に羽織るもんくれ」

この台詞、虫人ムシヒトになってから二回目である。

これを言った瞬間におっさんに哀愁さが滲み出てやしないだろうか？

「ほらっ」

顔に叩きつけるようにジーナがおっさんに衣類を渡す。

それを手にとっておっさんは驚愕するしかなかった。
なぜならば……

「ス、スカートだと……」

渡されたのは青いスカート。
それもミニだ。

下半身に当てて確認してみたが太ももの真ん中辺りまでしかない。

「いやー、ジーナは冗談きつついなー。おっさんの性別は男だよ」

「冗談もなにもあんたに渡せるのはそれしかないわよ」

「いやいや、タオルとかでいいんだよ？」

「取れたら嫌じゃない」

確かにそうかもしれないけどさ。

「じゃ、じゃあせめてロングなスカートを……」

もはやスカートを着用する覚悟は決めた。

ズボンとかがあればまだいいのだろうが、村の男連中のものでダメだったのだからジーナのサイズではパツンパツンどころか入りもしないだろう。

だったらもう妥協するしかないじゃない。

「気に入ってるからダメ」

「そーゆー問題？」

「お気に入りの服をあんたが着ていると想像しただけで寒気が走るわ」

「うう……これしかないのか……」

渋々ながら着用してみるのだが……

「ウエストがきつい」

「当然ね」

全然閉まりません。

「そこでこれよ」

そう言つてジーナが取り出したのは安全ピンみたいな形のもの。つ
ーかもう安全ピンだ。

それを数珠繋ぎにしたものの端っこを閉まらないスカートへと刺し
て留めた。

「これでよし」

よくはない。

だって男の尊厳とか諸々が崩れてくもん。

でも待て。世の中にはメンズスカートという分野のオサレアイテム
も存在する。

これもそれだ。

例えばメンズスカートは一般的にズボンの上から着用するものであつ
てもそれは一般的な話であつて、一般的じゃないならばズボンを履
かなくてもオツケーなんだ。

改めて自分の下半身を見してみる。

スカートから禪が見えるのはご愛嬌としてオシャレとして見ると悪
くないかもしれないかもしれない。

「気に入った」

笑顔でジーナに伝える。

しかし、その発言を聞いたジーナの顔は確実にドン引きだった。

「気持ち悪い」

彼女の言葉がおっさんの心を貫く。

現実とは斯くも厳しいものであった……

おっさん、下半身が……（後書き）

R15ならこれくらいの表現は許されますよね？
これでも二度ほど書き直したんですよ……

おっさん、相互理解を深める

ジーナは反対しているが、おっさん自体はリリーの父親になると決意を固めた。

確かに母親であるジーナの意思は重要だが、もっと重要なのは子供であるリリーの意思だ。

そのリリーがおっさんに懐いている以上、父親と名乗るのは絶対にダメと言えるわけはなかった。

渋々、本当に渋々ながらもおっさんが父親と自称することを認めてくれたジーナとリリーと共におっさんは暮らすことになった。

一つ屋根の下に赤の他人同士が住む。まあ、厳密には屋根の下ではないのだがそれは瑣末な問題である。

要はおっさんとジーナは同棲状態というわけだ。

これはもはやアレがあれしてコレがこれする状況になっても大丈夫ってことに違いない。

大樹の用事？

ふん、そんなもんはおっさんが死ぬまでに果たせば問題ないのだ。

大樹と美女との同棲ならばどちらを選ぶかは火を見るより明らかである。

「ところで、ジーナって竜なんだよね？　でも見た目人間そのものなのは進化したから？」

腕が竜っぽくなるのはわかったが、ジーナは腕を竜っぽく出来る人間とは思えない。

おっさんも心臓云々のことをジーナが言わなければそうだと思っていたことだろう。

「だからジーナと呼ぶなって……いや、もうジーナでいいか……」

私が人の姿をとるのは進化などではない。既に人より優れた存在であるドラゴンが人の姿をとる。それは進化ではなく退化ではないか？ 人の姿になるのは擬態のようなものだ。私の父親が人間だったらしくてな。だから人間の姿をとっている」

「ふーん、それじゃ父親がエルフだったりドワーフだったりしたらそれになれるわけ？」

「そうだ」

なら、仮におっさんとジーナの間に子供が出来たら虫人ムシビトになれるってわけか。

「リリーは何になれるの？ やっぱ人間？」

「リリーは……確かエルフだったか」

「つまりエルフとヤツて出来たんだ」

「もう少しオブラートに包んで話せないのか……。まあ、認めたくないがあのかそエルフがリリーの父親には違いない。認めたくないがな」

どことなく他人事なんだよな。

それにしてもなんで憎々しげに肯定するんだろうか。

もしかしてリリーの本当の父親はかなりの遊び人とか？

とにかくリリーの本当の父親の話は避けた方がよさそう。

「どれくらいでエルフの姿になれるのかな？ つーか今更だけどリリーって息子と娘どっち？ まあ、名前の響きからして娘っぽいんだけど、生まれる前から名付けてみたいだしさ」

「ドラゴンは雌しか生まれない」

「じゃあ娘か」

元の世界の親父&お袋様。

いきなりですがあなた方の息子に娘が出来ました。

あなた達にとつたら孫です。

体長はすでにおっさんより多少でかいですが、元気な『竜』です。

いや、冗談とかじゃなくマジ。

天国から見えるならば見守ってやって下さい。

もし、まだ生きてるなら身体に気をつけて年金が受給出来るまで長生きしてくれ。

「んで、どれくらいで擬態だっけ？ それが出来るようになるの？」

「大体、半年から一年くらいの間だ。言葉を話せるようになった辺りで親が教えてやるんだ」

「えっ、おっさんだと出来くない？」

「私が教えるから問題ない」

そうだよね。

あれ？ じゃあおっさん、親としてなにをすればいいわけ？

父親初体験だから何していいのかわからん。しかも、娘は竜だ。人間とはまた勝手が違うだろう。

「なら、おっさんは生き様を見せるか」

「どうしてかわからないが、果てしなく不安だ」

失敬な。

おっさんの生き様が素晴らしいものならばそれを手本にすればいいし、ダメならば反面教師にすればいいだけの話だというのに……
いや、別におっさんの生き様がダメだっと思ってるわけじゃないからね？

「とゆーか今度は私が言いたいことがあるのだが、その前にその変

な兜くらいは取れ」

そう言つてジーナはおっさんの顔を見つめる。

だが、おっさんは兜など被つてはいない。

まあ、兜を被っているように見えるのは否定しないがな。

そのことをジーナに言つてみたが当然信じてもらえず、なら取つてみろみたいな流れになつて頭を引つ張るジーナと踏ん張るおっさんの構図が出来上がり、おっさんの首がもぎ取れるんじゃないかくらいの痛みに耐えた結果、おっさんと兜みたいな頭は着脱不可ということを感じてもらつことが出来た。

「まったく、お前はなんなんだ？」

「おっさんは虫人^{ムシビト}つて言う、虫から進化した新たな人らしいよ」

「……で？」

「でつて……」

「その話のオチ」

「いやマジだからオチとかないよ？」

「本当になのか？」

「イーエスツ！ 見ててくれ。昆虫形態^{インセクトフォーゼ}」

「^{インセクトフォーゼ}昆虫形態のスキルが発動した」

「

天の声と共におっさんの姿がクワガタへと変身する。物理的には有り得ないが、その大きさはリリー並にでかい。

ジーナがそれを確認したところで昆虫形態を解いて人型に戻る。

どこをどうやったらそうなるのかわからないが、禪^{ふんどし}もスカートも昆虫形態^{インセクトフォーゼ}をすると消え去り、人型に戻ると履いた状態で戻れるという不思議現象が起こる。

そのことに細かいツツコミはしない。なぜならおっさんにとっては

都合がいいのでな。

「……頭痛い」

言葉通り頭を抱えるような仕草をするジーナ。

まあ、新種の人種って言われても普通は信じられるわけではないよな。今は脳が処理しようとして踏ん張っているのだろう。

でも、ジーナには知っておいてもらいたかった。

何より……

「竜って狙われてるんだろ？　なんでもかは推測でしかないけど理解はしてるつもりだ。要は珍しいからだ。なら、竜並に珍しいおっさんは同様に狙われる恐れがある。なら、運命共同体としておっさんはジーナ達に相応しいでしょ」

「……そうか。最悪、お前を差しだけばリリーは助かるかもな」

なんか怖いこと言われてる。

でもまあ、娘のために命を賭けると言われたら従うのもやぶさかではない。

しかし命を賭けるほどリリーに愛着があるかと聞かれればまだ首を傾げてしまう段階かもしれない。

そこらへんは追い迫いの話だ。

「それはそれとしてさっきから竜竜と言っているが、私達はドラゴンだ。多少イラッとするから直せ」

「わかった」

素直に頷く。

彼女なりのこだわりなのだろう。尊重できるところはするべきだ。

「ところで、お前いくつだ？」

「なぜにそんなことを？」

「いや、外見から判断はつかんし、自分のことをおっさんと言うからふと気になってな」

おっさんの年齢が……

うーんと、今の世界でクワガタになってからは一年くらいか？でも、元の世界では三十代も半ばを越えてるし……

あれ、でも人間として死んでからクワガタになるまで空白の時間とかあったけどそれも入れるべき？

なんかごっちゃになってわかんねー。

「永遠の十七歳です」

とりあえずそう答えてみた。

別にテキトーに言っただけじゃないぞ？

物語と違って大体十七歳とか高校二年生が多いんだもん。

とゆーか十代後半が大半じゃん。

だからおっさんも主人公気分を味わいたかったとゆーか……

まあ、人間生とクワガタ生を足して二で割ったら大体そんなくらいだから少し鯖を読んで……あつ、ジーナがすげー胡散臭そうなおっさんを見る。

そりゃ、十代で自分のことおっさんとか言う奴はいないよ？でもいいじゃん。

おっさんはいつまで経っても気持ちちは少年なのだから……

「とりあえず心はそんなくらいの気持ち」

「で、本当は？」

ああ、逃げられない。

ジーナの目は真実を追求する探偵のごとおっさんを捕らえて離さない。

もう、足した年齢を言っちゃうか？

否、押し通る！

「十七歳でっす」

「無理してる感が出てるぞ。まあいい、それほど興味もないしな」

「ああん、酷い。でも……いい」

何がいいってその冷めた視線と態度だね。

相性バツチリじゃね？

実はおっさんもジーナの年が知りたいのだが、女性に年齢を聞くのは野暮つてもんだ。

これでジーナが二十五より下ならばそれだけで今のおっさんの気持ちが萎えてしまう。

だが、折を見て聞いてみよう。

とりあえず今は、

「リリー、よろしくな」

おっさん達の会話の間、ずっと甘えてきていたリリーの頭を撫でてやる。

するとリリーは嬉しそうに目を細めておっさんの行為を享受した。

うむ、可愛いな。

「ちっ、リリーに気安く触るなと言いたいがリリーが嬉しそうに受け入れているから、文句が言えない……」

「ジーナも撫でてやればいいじゃん」

「そうだな」

ジーナは立ち上がってリリーに歩み寄り、背中を撫でた。
リリーはその行為に対して気持ち良さそうな唸り声を発す。

「ああっ、リリーったら可愛いわ。すごくキュートよ。もう、可愛
過ぎる。ハアハア……」

そんなリリーの反応がジーナの心の琴線に触れたのだろう。
めちゃくちゃ興奮しながらリリーに頬擦りし出す。

そしてそれを受けたリリーはおっさんに頬擦りし始めた。
これはおっさんも何かに頬擦りした方がいいのか？

具体的にはジーナの胸とかに……

うん、撲殺される未来しか見えないから控えておこう。

とにかく、こうしておっさんとジーナとリリーの二人と一匹の生活
はスタートしたのだった。

おっさん、相互理解を深める（後書き）

色々な補足回でした。

まだこの世界でのドラゴンの設定や主人公のパーソナルな設定はあるのですが、大体の感じを掴んでくだされば幸いです。

クラベジーナと料理（前書き）

閑話のようなものです。

クラベジーナと料理

ジーナ達と過ごすことに決めた日の翌日。

と言ってもここは洞窟の中なので朝と夜の区別はないので、眠ってから目が覚めた時のことだ。

おっさんはそこはかたなく漂う異臭によって強制的に脳を覚醒させるに至った。

「なんだこの臭い」

声を発してから再び漂う香りを鼻から吸い込む。

「うげっ」

感想を言えば、鼻の奥に不快な痛みと涙を誘う臭いだ。

例えるならばガソリンとくさを足して二倍した感じが近いだろうか。

おっさんガソリンの臭いって微妙に好きで、目の前にあればとりあえずチャレンジするんだけどこいつはノーサンキューだ。

鼻を摘みながら起き上がって隣を見てみれば、おっさんから離れようとしなかったために一緒に寝ることになったリリーがぐったりしていた。

「リリー大丈夫か？」

「……■■■■」

明らかに元気ねーな。

原因は言うまでもなくこの異臭だろう。

立ち上がって臭いの元を探すことにするが、おっさんがどこ行こうとも付いてこようとするリリーが微動だにしないことから相当参ってる様子が伺える。

おっさんを見つめるリリーの目には「逝ってらっしゃい」と語っているように見えた。

臭いの発生源は簡単に見つかった。

そこはこの住居における厨房で、ジーナが鍋で何かを煮込んでいた。

「あ、おはよう。よく眠れたかしら？」

「……多分」

この臭いがなければ快眠だっただろうがね。

「何やってんの？」

「何って、料理よ料理。リリーに精をつけてもらわなくちゃならないからね。はりきっちゃった」

料理ではなくて何かの実験じゃないのかと言いそうになるのをかろうじて押し止める。

まだ臭いが酷いというだけの判断材料しかない。これがまずいとは限らないのだ。

「ちなみに何をお作りになられてるのでしょうか？」

「シチューに決まってるでしょ。匂いで分かるじゃない。安心なさい。ついでにあんたの分も作ってあげてるから」

シチューってこんな臭いだったっけ……

つか鍋の中が紫なんですけど。

いや、おっさんが知らないだけで紫のシチューがこの世界に存在しているのかもしれない。

おっさんの常識に当て嵌めるのは間違いの元だ。

「朝からシチューって重くない？」

「何言ってるの？ シチューは凄く栄養価が高いんだから精をつけるって意味でこれほど適した料理はないわ！」

それ自体は間違っではないかもしれない。

「あ、ありがたいね。ところで味見はした？」

ここで予防線を張る。

こうゆうののベタな展開として料理音痴は味見をしないというのがある。

ならば味見と称した毒味を本人にさせるのが一番だ。

「今する。……うん、美味しい」

ジーナは小さな皿にシチュー（飯）を味見して満足したように微笑む。

「ほら、あんたも」

差し出される小皿。

それは今までジーナが使用していたもので……

「いただきます」

おっさんはそれを躊躇なく口にした。

まあ、味の面ではジーナ自身のお墨付きもあるし大丈夫だろう。問題は食べた後に胃から立ち昇ってくるであろう異臭しかない。

だが、その判断は間違いだったと言わざるを得ない。

口にした瞬間、おっさんの背後に雷のエフェクトが発生したかのような衝撃が口の中に広がり、視界が白一色に染まる。

意識が戻って無理矢理シチュー（飯）を嚥下すると食道を通る時に通った道をシチュー（飯）が焼いていく。

無事に胃に達したとしても胃酸と互角の戦いをみせ、なおかつ異臭となつて食道を逆流してくる。

はつきり言おう、クソまずい！！

おっさんの人生でもナンバーワンのまずさだ。

これなら砂場で作った泥団子の方がマシと言えるレベル。

一体何を入れればこの化学兵器を料理しながら作成できるのだろうか。

意識を失い、動きを止めそうになる頭を女王様に罵詈雑言を浴びせ掛けられる妄想をすることで必死に駆動させる。

そうでもしなければ忽ち意識は闇の彼方へと消え去り、お花畑と川が見えるだろう。

くそつ、おっさんには毒は効かないはずだ。だったらこれだけの力を持つこいつは毒ですらないと言つのか……

「どうだ？」

ジーナが期待を込めた瞳でおっさんを見つめる。

「クソよりまずい」

正直は美德だ。

これを美味しいとかのたまったジーナの味覚は信用してはいけない。美味しいとも言おうものなら、三食これになる。それだけは嫌だ。

「味覚大丈夫か？」

「え、ジーナの？」

「私じゃなくてお前のだ。こんなに美味しいのに」

ジーナは再び小皿に移したシチュー（飯）を口に運ぶ。

そしてやっぱり美味しいと言呟いた。

もはやシチュー（飯）ではなくヘドロと呼ぶに相応しい液体をなんでもないかのように摂取するとは……アンビリーバボーやで。

「さ、出来た。早速リリーに持って行ってあげなきゃ」

「そのヘドロを？」

「味音痴は黙ってる。とゆうかそれ以上私を不快にさせる発言をすればお前の〇〇〇を×××××って□□□に沈めてやる」

「すいません」

さすがに〇〇〇を×××××されるのは勘弁だわ。

とゆうか味音痴言われたよ……

確かにおっさんの味覚なんて大きく分けると美味しい・食えるけどまずい・食えないほどまずい・至って普通の四つくらいしかない。あとは辛いとか甘いみたいな味の感想を判断するくらいだ。これらは一般的な範囲からはあまり外れてないはず。

そんなおっさんの味覚はあのヘドロを絶対に食えないほどクソまずいと新たに五つ目の評価を作り出した。

なおかつ味の感想は『痛い』だ。

こいつをリリーに食わせるのはいかなものか。

しかしおっさんはリリーに食べさせる前に無理矢理ヘドロを全て平

らげるほどのガッツはない。

……すまない。リリーよ、犠牲になってくれたまえ。

「■■■■■ー！！！」

ジーナが厨房から去った後、リリーのあげた悲痛な叫び声がえらく耳に残った。

「た、大変よ！ リリーが……リリーが！！」

慌てた様子でジーナが厨房に舞い戻ってくる。

まあ、何が起こったかおっさんは察してるわけだが……

「どうした？」

一応聞かねばなるまい。

「それがいきなり意識を失っちゃったの」

予想通りではある。

「ハラナオールとドクケセルとキキメバイゾはあるか？」

「あ、あるわ」

「んじゃ、ハラナオールとドクケセルをすり潰して水を加えて混ぜ合わせ、一煮立ちさせたものにキキメバイゾを加えたものを飲ませればとりあえず大丈夫なはずだ。すぐに用意しよう。手伝ってくれ」

「う、うん」

急いで準備をする。

リリーはおっさんより丈夫そうだから死にはしないだろうが、早ければ早い方がいい。

ちなみにこのレシピは村に暮らしていた時にトイースの嫁から教わったものだ。なんでもこれであらかたの毒や病状は癒せるらしい。でもどちらかと言うと二日酔いでお世話になる薬だ。

「で、リリーはどうだったんだ？ 詳しく教えてくれ」

「シチューを口にしたらいきなり白目を向いて口から泡を吹いたの。病気がしら……」

「十中八九このシチューという名のヘドロが原因ですから」

「またそれ？ いい加減にしないと……」

「お仕置き？ ねえ、お仕置きすんの？」

「なんでちよつと嬉しそうなのよ……」

「とまあ、半分冗談だからいったん横に置いて、ジーナの作ったシチュー（飯）が色々な意味でまずい代物だったのは間違いないよ。毒が効かないおっさんをも殺しかねないほどにね。はつきり言えばジーナの味覚は変ってことだね」

「どこがどう変なのよ」

変だと言われて自覚のある奴もいれば自覚のない奴もいる。

ジーナは後者だ。

こういう奴には自身がいかに関わりとズレているのか思い知らせるほか自覚を促す処方箋はない。

しかし、現在ジーナの周りにいるのはおっさんとリリーのみ。そのうち未だ言葉を話せないリリーは数にいられていいものか迷うからとりあえず除外しておく。

すると、おっさんしかいないわけだが、おっさんの言葉をジーナが素直に受け入れてくれるかどうかは心許ない。

だが、男にはやらねばならない時がある。

「だからこれクソまずいんだって」

「どこが？」

「そりゃあ……全てが」

「あんたの味覚に合わなかっただけでしょ。自分が美味しくないと感じたものが共通の意識だと思っちゃダメよ」

「それは逆にも言えることだよ。ジーナが美味しいと思えるものが全てにおいて正しいわけじゃない。そもそもおっさんの知ってるシチューって料理に紫色なものは存在しない。普通は白だし、許せて黄色（カボチャ入り）とかそんなもんだ。あと、これ臭い。何より——<中略>——だから、ジーナの料理は体に毒でしかないんだ。」

「んで、臭い。ドゥユーアンダースタン？」

「長すぎて全然入ってこない。あと、なんかねちっこい」

おっさんの体内時間にして約十分間は無駄になったようだ。

「よし、薬が出来たようだな。早速リリーに飲ませるとしよう」

そう言っただけでジーナは完成後ある程度冷ましたおっさん謹製の薬を持って厨房を出ていった。

「……おっさんもいい」

そう呟いてジーナに続いてリリーの元へと向かった。

「ほら、リリーお薬飲みなさい」

■■■■■■■■■■

嫌がってる。

リリーがすげー嫌がってる。

とゆーかも涙目だ。

どうやら薬を作っている間に目を覚ましていたらしく、そこに再び何かを食べさせようとするジーナに恐怖すら覚えている様子だ。

そしてその瞳がおっさんの姿を捉えるとお父さん助けるとばかりに縋るような視線を向けてくる。

「ほら、リリー」

ジーナは頑なに閉じられたリリーの口を無理矢理こじ開けようと上あごに手を当てて力を込めているが、リリーもリリーで必死に抵抗している。

なんかもつ見てられないな。

「ジーナ貸しなさい」

ジーナの手から薬を奪い、リリーの目の前に立つ。

「大丈夫。これはジーナの作ったものじゃなく、おっさんが作ったから安全だよ（結構苦いけどね）」

おっさんの言葉にジーナが何か言いたそうな顔をするが、空気を読んだのか黙って様子を見ていてくれる。

「ね？」

「■■■■」

おっさんの言葉が通じたのか、それともおっさんが食べさせるから

なのか、何となく後者だと思うがリリーが素直に口を開いてくれたのでそこに薬を注ぎ込む。

「■■■■■」

リリーは顔をしかめるようにしたが、それでもジーナの料理よりはマシだったのだろう。きちんと薬を飲み込んだ。

「うん、いい子だね」

リリーの頭を撫でてやるとリリーも嬉しそうに目を細めた。

「あんたばかりずるい！ 私も撫でるわ」

（ビクッ）

「リ、リリー……？」

ジーナがリリーの頭に触れようとした瞬間、リリーの体が妙な反応を起こし、震え出した。

客観的に見るとどちら也可哀相だな。

ジーナは良かれと思い愛情をたっぷり込めてあのヘドロを作り上げたのだろう。だが、その愛情によって怖い目にあつたリリーの反応もまた当然だと言える。なにせ初めてといっていい食べ物があれば浮かばれない。

まあ、どっちが悪いかわれればジーナが十割悪いけどね。だからおっさんは心を鬼にして言わねばなるまい。

「リリーはジーナの料理に恐怖を覚えたようだ。これ以上嫌われたくなければおっさんの監督の元で料理を作るか、二度と作るな」

「……わかったわよ」

さすがにリリーの反応で自分に非があることを理解したのだろう。
ジーナが神妙に頷く。

やはりおっさんの言葉よりもリリーの言動の方がよっぽど効くみたいだ。

こうして『ジーナ料理毒化事件第一章』は幕を閉じた。

なお、ジーナ作のシチューはスタッフ（ジーナ）が半分ほどは美味しく頂きました。しかし、別のスタッフ（おっさん&リリー）が美味しく頂けなかったのと臭いに耐えられなかったことが原因でもう半分は捨てました。

大地よ、環境を汚染してすまん……

クラベジーナと料理（後書き）

次話は早ければ今日中、遅くとも明後日には投稿予定です。

おっさん、やることはやります

あれから六日ほどの日数が経った。

時間の感覚は相変わらず己の体内時計を目安に活動している。

時計というものは大都市でもない手に入らないらしく、村で生活していた時は太陽の位置で時間を計っていたのだが、ここは洞窟内であり、それすらも出来ない。

しかし洞窟内の生活もそう悪いものではないと思う。

暇ならゴロゴロしたりリリーと遊んでやつたり、ジーナに今までのことを語ったりした。

基本的に喋るのはおっさんばかりだが、それでもおっさんの話を聞きながらジーナは頷いて相槌を打ったりしてくれるので聞き役としては及第点を挙げたい。

まあ、いざジーナの話を聞くこうにも適当にはぐらかされてしまうのは残念無念といったところだ。

生活の必需品とも言える水に関しては洞窟内をちよつと行つたところに澄んだ水の湧き出る場所があり、困ることはなかった。

ちなみに料理に関してだが、ジーナがちよつとアレ過ぎるのでおっさんが作ることになった。

確かにおっさんは一人暮らししてたし自炊もしないことはないけど、基本コンビニのお弁当やら外食にお世話になつてた人ですよ？

夜なんてビールと枝豆、焼き鳥だけで十分だ。

このトライアングルは高級フレンチのフルコースすら打倒すると思つてます。

まあ、そんな考えの奴に繊細な料理を期待するのは間違いだ。

カレーのルウや味噌、醤油があればもう少し多彩な料理を作つてやれるのだが、如何せん調味料が塩と胡椒しかない。なんか赤い香辛

料もあるにはあるが調理初心者には手が出しづらいのが現状だ。

だったらもう作れるのなんて野菜炒めとかくらいじゃないじゃない。一回、小麦粉もあるし塩と水もあるからうどんでも打ったるか！

と意気込んだが、結果はボロボロでグズグズの麺をぶっこんだ塩味スープの素うどんとなったので諦めた。

そしてまた野菜炒めへと料理は戻る。

そうしておっさんが作り上げた一品にジーナだけでなく、リリーも

「またかよ……」みたいな視線を投げかけるが無視だ。
だって……

ジーナの料理よりはマシだから！！

リリーもそれが分かってるのだろう。

視線は不満そうだが、出されたものは黙々と食べてくれる。

だがしかし、ジーナは違った。

「もう野菜を炒めて塩と胡椒を振っただけのインパクトのない食事には飽きたわ。明日は私が作る」

決意を秘めた瞳。

そして有無を言わさぬ迫力がそこにあつた。

「リリー、明日は塩を舐めて過ごすことになりそうだ」

「■■■■■」

「そこっ、何で最初から食べようとしなない」

「だって……なあ？」

「■■■■■」

おっさんの問い掛けにリリーが何度も頷く。

この六日の間にリリーはこちらの話す言葉を理解するまでに成長し

た。

成長早すぎないかとも思うが、おっさんはキラースタッグビートル時代に十日強で幼虫から成虫になった経験があるので、それに比べたらまあ遅いよなあってわりとすんなり受け入れちゃってます。

リリーの成長による利点としては意志疎通が図れることと、長い時間は未だに無理だが二、三時間くらいは傍から離れても大丈夫になった点だろう。

「大丈夫よ。あんた、私が料理する時は監視するんでしょ。だからあんたも食べられるものしか出来ようがないじゃない」

その設定をすっかり忘れてた。

だってジーナってば、あれ以来全然料理しないんだもん。

しかし、おっさんが監督するならばジーナも変なものはいれられないはずだ。とゆーか入れそうになったら全力で阻止すればいい。

「リリー、どうやら塩の結晶以外も口に出来そうだなぞ」

■ ■ ■ ■ ■

「ああ、本当だとも！ おっさんに任せなさい」

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

「うん、お父さん頑張る」

「なんでリリーの言葉が通じるの……。これはあいつの方がリリーをわかっているってこと？ いいえ、違うわ。あれは単なるあてずっぽうに決まってる！ 豚、私の方がリリーを愛してるんだからねっ！」

「え、宣言がいきなり過ぎる。どっからそのセリフが導き出されたんだ？ はーん、さては生理でイライラふべしっ！？ ……痛い」「デリカシーがない。あと、殴られたのなのけ反るくらいしろっ！」

そうは言っても、衝撃無効だから痛みしか感じないんだよねー。
それにしても顎とか頬じゃなく唇を狙って拳打を叩き込むのはどう
なのよ。

まあ、殴られるのは嫌いじゃないけどさ。

「前向きに検討し、直していきたいと思います」

インパクトの瞬間におっさんの意志でのけ反ることが出来れば可能
である。

こいつは高等技術だが、ジーナのサディスティックな心を満たすに
は習得せねばなるまい。

「べ、別にそこまで真剣な顔して考えなくてもいいんだぞ？」

なんでそこで一步引くんた。

もつとガンガン来いよ。

お前を殴っても面白みがないからどこかで別の獲物でも探そうかな
ゝ的なおっさんをくすぐる言葉が欲しいというのに！

「いや、おっさんはジーナからのごほう……ジーナの心の安寧のた
めに努力するよ」

「ごほうつてなんだ？」

ご褒美（拳）のことですとは言えない。

話を逸らさねば……

えーと……あ、そうだ。

「薪があと少しでなくなるんだけどどうすんの？」

料理をするには火が必要だ。

その火を起こす燃料は薪を使用している。

なんともアナログだが、洞窟内にガスが通ってたらそれはそれで怖い。つか村でも薪が主燃料だった。

「あからさまに話題を変えたな。まあ、いい。薪がないなら取ってこい」

「どこにつて……外か」

「ちょっと待ってる」

そう言つてジーナはどこかへと向かい、すぐに戻ってきた。そしてその手に握られていたのは一降りの斧。

「これで適当な木を切つて持つてこい」

「なぬ？」

その言葉に耳を疑った。

「えつと……薪つて落ちてる木を拾うんじゃないの？」

「それじゃいつまでかかるか分からないし、量も心許ないでしょ。ほら」

押し付けるように斧を渡される。

柄は木製で、刃の部分は鉄で出来ているそれはずっしりと重かった。

「さつさに行け。リリーはお母さんと一緒にいましょうね。絵本読んであげるからね。今日は何がいいかな……」

「……無理だ」

「は？」

「おっさんには無理だ」

「たかが木を切るだけのことの何が無理なのよ？」

「おっさん、木と会話できるんだよ」
「ふーん、で？」

何その目。

町中の人混みの中でいきなり奇声を発した人を見つめる視線と同じじゃない。

くそっ、これまでの経緯を話す中で大樹や他の木達と会話したことを省いたのがいけなかったのか。

「だからきつとおっさんには木を切る時に木々の上げる断末魔の声が聞こえるはずなんだ！」

「それは多分幻聴だつて」

「違うよ。そうゆうスキル持つてるんだよ！」

「そうだとして、あんたは明日も明後日も温かい食事を食べられることとどっちが大事なの？」

「いってきます」

仕方ないよね。

どことなくヒンヤリとした気温の洞窟内であつたかいご飯は楽しみの一つなんだ。

例え、毎日野菜炒めだとしてもそれが温もりを持っているだけでホッとする。

世のお父さん方があくせく働いて夜に帰宅した時に、ラップのかかったご飯をレンジでチンするのはそこに家族の温かさを求めるからなのだろう。

おっさんもまたその温かさが恋しい。

それが出来立てとなるならばなおのことだ。

利己主義と罵られようが一生恨むと言われようがやらなければいけないことなのだ。

「とゆーわけで木を切りたいわけだが……」

洞窟を出て一番先に目に入った木に話し掛ける。

この出口はおっさんが進入した洞窟の入口とはまた別で、結構広めの通路を抜けた先にある。

ジーナ曰く、森の深部に出るから滅多なことでは人に見つかることはないのだと言う。

『あな恐ろしや……』

「確かにアールというのは魔性の穴だね。うん、恐ろしい」

『ワラワを伐採すると言うのか……』

「ツツコミなしか」。確かにこの状況で言うべきじゃなかったけどね。それはそれとして、別に君でなくちゃダメってわけじゃないよ。なんか嫌われ者の木とかいないの？」

『そのような者など……』

『きるならワターシをキリなさーい』

『そ、そなたは……』

名乗り出たのは、手と手を合わせて輪を作れば収まるような幹の太さの細長い木だ。

『ワターシがいる。それだけでミナさんにメイワークかけマース。』

『ワラワとそなたは良き友ではないか！』

『スミマーセン。でも……』

なんか切りにくくなる会話してるな。

『シャツチョさんヤツチャてくださーい』

「おっさんはいいとこ係長止まりだったの。それにしても本当に切つていいんだな？」

『ハーイ、ワターシ背だけちよつとおつきすぎるせーでホッカのミナさーんのせいちよのジャマーね』

「君の決意、しかと受け取った。いくぞっ」

実際問題、斧で木を切ったことなんておっさんの経験にはない。

故に野球のバッティングをするように構え、幹目掛けておもつくそ振ってやった。

『ギャー』

ああ、予想通りの悲鳴。

ただ木を切るという行為が悪行のようにおっさんにのしかかる。

『鬼！』

『悪魔！』

『ひどいわ！』

『よせ！ 彼もまたつらいんだ』

『くそっ、僕達はただ見ていることしか出来ない……』

『見届けてやろうじゃないか。彼の覚悟とプレギーラの最期をな』

なんか勝手に周りで話が纏まったらしい。

つーかプレギーラって名前なのか……

どうやらこいつらは大樹の管轄から外れてるようだ。

何しろ名前がわりかし普通だからな。

辺りは静まり返り、聞こえるのはおっさんが振るう斧がプレギー

ラとやらに当たる音と悲鳴のみだ。

いや、時々『ひっ』とか言ってるのは聞こえる。
正直なんだかつらいものがある。

「ふんっ」

『ヤラレタヨ』

プレギエーラの最期の言葉はあつけないものだった。

ごめんね。

おっさんはプレギエーラに向けて心の中でそう呟いた。

『どわっ、こっち倒れてくんなよ』

『ちよつと痛いんですけど』

『うぜー、マジうぜー』

つてあら？

『ああもう邪魔じゃ』

「え、もう少しなんかないの？　つーかお前、プレギエーラを友達とか言つてなかった？」

『そうじゃ、プレギエーラはワラワの友じゃった』

「いや、その友が切り倒されたんですけど……」

『おう、そうじゃな。しかし、プレギエーラはすでにプレギエーラではなく、かつてプレギエーラであつたただの木材じゃ。疾く持つていっとくれ』

「……はい」

頷きはしたが、納得は出来ない。

切ってる間はすっげー罵った癖に。

木が相手だからただただ心が痛かったのに……

つまり、木は所詮木。

おっさんとは感覚が違うものらしい。

イマイチ掴めん。

こうしておっさんは薪の材料としてかつてプレギエーラであった木材を手に入れ、剛力のスキルを発動させてそのまま洞窟の中へと持っていた。

「アイリス様、奴がいました」
「そのようですわね」

穏やかに過ぎる時間もそう長くは続かない。

おっさん、帰宅する

剛力のスキルのお陰で苦もなく木を運んで来れたので報告のためにジーナの元へと向かう。

木を広間に置いて住居の扉を開くと仄かに生活臭が漂ってくる。

「ただいま」

中へ向けて声をかける。

ごめんくださいでもお邪魔しますでもなく

『ただいま』

自分から思わずといった調子で放たれた言葉が自分はもうこの住人であると感じてるんだな、と思わせられてしまう。

そんな考えに浸りながら中からの返答を待つが、一向にお帰りなさいって言葉は帰ってこない。

「ただいまー！」

今度はもう少し大きな声で呼びかけるが最早返答があるなどという淡い期待はない。

普通に住居の中を進み、ジーナがいるであろう奥にあるリリーの部屋の扉（直しました）を開けた。

「ただいま」

「ああ」

「ただいま」

「ああ」

「私もリリーにおかえりって言われたい」

ですよー。

なんとゆーか、ジーナにとったらおっさんなんてホントどうでもいい存在なんだろうな。

「ところで、切ってきた木を広間に置いてるんだけどどうすればいいの？」

「うん？ ああ、そうね……切ったばかりなら水分含んで薪としては使えないから、まずは薪割りしてその後乾かしておかないといけないわね」

「へー、そうなんだ」

「そうなのよ。んで、すでに乾燥させた薪が広間の隠し部屋にあるから薪を割ったらそこに入れといて」

「分かった……ん？」

なんかおかしいこと言われなかったか？

「すでに乾燥させた薪が隠し部屋にある……？」

「なに？」

「え、嘘。薪の備蓄あんの？」

「ええ」

あっさりと肯定される。

じゃあ、おっさんがさっきやったことはなんだったのか。

「備蓄あるなら、おっさんが木を切りに行く必要がなかったんじゃない？」

「いずれその備蓄もなくなるんだから、あらかじめ増やしておくのは悪いことじゃないでしょ。あと、リリーと二人つきりになりたか

つたし」

「絶対、後の方が本音じゃん」

要はおっさんはハブられたのではなからうか。

「だっていつつもあんたはつきりリリーと一緒にいるでしょ」

「そのことは否定しない」

リリーとは料理したり憚りに行く時以外は大体一緒にいる。なぜならリリーの方がおっさんに寄って来るからね。そう、おっさんに非はない。

「だから少しの時間リリーと二人だけにしてもらったんじゃない」

「だったら一言リリーと二人だけになりたいっておっさんに言えばいいだろ。邪魔者をこっそり排除する真似しなくたって……」

「はいはい悪かったわよ。んじゃ、まだリリーと二人だけで楽しみたいから薪割り行つてきなさい」

「■ ■ ■ ■ ■」

「リリーはお母さんと一緒にいようねー」

「■ ■ ■ ■ ■」

「ついていっちゃダメよ。あいつはまだ仕事があるんだから。ほら、さっさと行きなさい」

リリーがおっさんの方へと歩み寄ろうとするのを押し止め、ジーナは野良犬を追い払うかの如くおっさんを追いやるとする。

まあ、本当はおっさんという異分子なんて存在せずにリリーとジーナの二人で生活出来ていたんだと思うとジーナの気持ちもわからないではない。

だけとおっさんが言ったこととはいえ、こつもあからさまに邪魔者扱いされると物悲しいものだ。

だが、おっさんは話のわかる男である。

その場に無言で背を向けて、広間へと戻ることにした。

「あ、隠し部屋は入口の扉を出て右に十歩くらい歩いたところにあるから。それと……おかえり」

ぶっきらぼうに投げ掛けられた言葉。

だが、それだけでもおっさんにとっては十分な威力を持っていた。

「うん、ただいま。そして行ってきます」

「はいはい」

なんか元気出た。

隠し部屋はジーナの言った通りの場所にあった。

そこは壁がくり抜かれたような場所で、忍者の隠れ身の術みたいに壁に似せた模様の布で隠蔽されていた。

その中には一年くらいは余裕で持ちそうなほどの大量の薪や、小麦粉、塩などの色んなものが入っていた。

どうして今まで教えてくれなかったんだと思うが、この洞窟の中で生活する上で最も重要な場所だと言えるので、外様のおっさんには教えてくれなかったのではないだろうか。

今回、ジーナがおっさんにこの隠し部屋のことを教えてくれたのは多少なりともおっさんを信用してくれたことの表れに違いないと勝手に解釈する。

まずは切り倒してきた木を程よい大きさに切ってから薪割りをしよう。
フレギエーラ

大体三十センチくらいの長さになるようにのこぎりで木を切っているのだが、なんとも地道な作業である。
なんかもう間怠っこしいな……

インセクトラフォーゼ
「昆虫形態」

ものは試しとクワガタ形態になり、狙いを定めて顎を閉じた。すると、あっさりと木が切れてしまう。

おっさん、思い付きだったとはいえ、初めてクワガタの顎の強さを思い知りました。

俄然作業効率も上がり、五分もしないうちに三十センチのぶつ切りになった木材が出来た。

あとはとりあえず半分にしとくか。

横にした木材を顎で挟んで持ち上げ、一気に閉じる。

これを何度か繰り返すとすぐに半分にする作業が終わる。そしてその半分になった木材を同じ要領でさらに半分にしていくとあっという間に薪割りは終了だ。

「おっさんに薪割りの才能があるとは……」

きこりもビックリの早業だ。

しかしなんだな……

この切り刻んだ木材とついちょっと前まで会話してたかと思うとやるせない。

これが木じゃなくて人だったらぶち殺してバラバラにしたようなも

んだ。

そして、さらにそれを火葬するために保管しておく。

……おっさん外道じゃね？

ま、木だし。

いちいち気にしてたら飯も食えなくなるから、あまり感情移入しすぎるものじゃないよね。

人型に戻って切った木を紐で束ねていき、隠し部屋の空いてる場所へと置いていく。

運んでみるとそれなりの量があつたが、いざ備蓄分と比べるとおっさんの作った薪の量は微々たるものだった。

ジーナはこれを一人で用意したのだろうか。

もしかしたらまだ見ぬリリーの実父がセコセコシコシコと用意したのかもしれない。

どちらにせよ関係ないことが。

積んである薪を両手に抱え込み、住居の中へと持って行くことにする。

しかし、ここで予想外の出来事が起こってしまう。

隠し部屋から出て住居に戻っている時、いきなりおっさんの抱える薪が燃えだしたのだ。

「あつっ！」

慌てて薪を放り投げる。

一体何が起こったのか。いやいや、何が起こったのかは抱え込んだ薪が燃えたということでファイナルアンサーなのだが、どうして燃えたんだ？

自然発火とかだったら逆に不自然極まりない。

その答えはすぐに分かることになった。

なぜなら原因の方から話し掛けて来たからだ。

「外してしまいましたわ」

そこに居たのは以前おっさんを殺そうとしたツインテールの貧乳だった。

確か名前は……… 忘れた。とにかく貧乳の少女だった。

おっさん、侵入者と相対す

「こんな暗い穴蔵に住んでるなんて、さすがゴミ虫ですね」

こちらを問答無用で攻撃してきた貧乳ツインテールは周りを見回すと大仰な仕草で話し掛けてきた。

「なぜここにつてのは愚問かな？」

確かこいつの目的はドラゴンを殺すことだったはずだ。ならば狙いはリリーやジーナということになるだろう。

「確かに愚かな問いですわね。そんなものあなたを殺しにきたに決まっていますわ」

え？

あれ、ドラゴンは？

つーか狙いはおっさんかよ！？

「な、なんで？」

ムシビト
虫人だからか？

いや、言っていないしわかんないはず……

あ、でもこの子の目の前で昆虫形態インセクトフォーゼしちゃってたな。もしかしてそっからバレたのか。

「なぜってそんなの……わたくしのことを貧乳呼ばわりしたからに決まっていますわ」

「……えー」

「今までわたくしはわたくしのことを貧乳と言った輩を全て半殺し or 全殺しにしてみましたの。わたくしが言ってること理解出来ますかしら？ わたくしを貧乳と呼んだ輩は絶対に許さないってことですわよ！」

ちっさいなー。

胸だけでなく器もちっさい。

「ごめん。君の名前知らないからさ。外見の特徴で呼ぶしかないじゃん」

「それでしたら女神でも天使でも他に呼びようがありますわ。そこにきて胸のことを言うなんてわたくしを侮辱する魂胆がスケスケですわ」

理不尽に殺されそうになっておいて、その発端となった人物を褒めたたえられるような精神構造をおっさんはしていない。

あれだけのことをされておいて、侮辱のひとつもしない方が問題ある。

つか、おっさんが女性を見るときには胸の大きさってのは確実に確認する部位だから仕方ないことなのだが、言ったところでどうこうなるわけでもないの口に出さないでおく。

「つまり、狙いはおっさんだけってこと？」

「ええ、あなたにはフルコースをお見舞いしてさしあげますわ。まずは両手両足の指を一本ずつ引きちぎり、次に腕、足、耳、鼻ときて、最後に首を絞りつつあげます」

「フルコースをお見舞いって、君いきなり魔法撃ってきたじゃん」

「ちゃんと火傷程度で済むよう手加減しましたわよ。まあ、当たり前ませんでしたけど……」

話を聞くと、どうやらリリーやジーナのことは知られてないようだな。

そいつは良かった。

どうやらこれはおっさんが蒔いた種のようなことから、ジーナ達に迷惑がかからないようにしないとね。

貧乳の元の狙いがジーナ達である以上、接触させてはいけない。

あーあ、本当に蒔きたい種は未だに下半身で燻つてるというのに寂しいな。

息子よ、どうやら日の目を見ることはなさそうだ。

「そっか、わかった」

「あら、抵抗はなしかしら？　せつかくあなたのために色々用意してきたのですけど？」

そう言った貧乳の背後からゾロゾロと二十人くらいの男達が沸いて来る。

その中には以前捕まった時に見た男達もいるし、見知らぬ顔もいた。とゆうーかやたら小さい髭モジャやらタイガーマスクだとかバラエティ豊かなな。

「んー野郎だけのパーティーでも開くのかな？　おっさんとしては華が欲しいとこだけど？」

貧乳や依然見たお付きの連中くらいの人数なら引き連れたまま洞窟を脱するのも不可能ではなかったかもしれないが、この人数では無謀だろうな。

ジーナに気付かれないうちにこいつらを洞窟から追い出さないと。

「ふふふ、パーティーの華ならばわたくしだけで十分ですわ」

「なるほど、納得納得」

「あなたには武器での攻撃が効きませんから徒手格闘技を嗜む者達を集めましたのよ？ 楽しい趣向でしょう？」

「おっさん如きに大袈裟だよ」

しかし、どうやってこいつらを洞窟の外に連れ出せばいいんだ……

広間から外に繋がる道はあいつらに塞がれている。

飛んで逃げれるかというが無理っぽいな。

なら、口で丸め込んで誘導するしかないか……

「おっさん、抵抗する気は微塵もないけどどうせ死ぬなら最後に空が見たいな」

「そうなの？ なら、ここで殺すことにしましょう」

「うそー！？」

「ふふ、だって最後の望みを叶えてあげると安らかに死んでしまうでしょう？ それじゃ楽しくありませんもの」

貧乳がこういう奴だったかもしれないってことを忘れてた。

今更真逆のこと言ってもおっさんが外に行きたがっていることを安易に示してるようなもんだから、迂闊なことも出来やしない。

「さあ、問答は終わりかしら？ そろそろパーティーをはじめましょうか。あ、そうそうあなたには身重の奥さんと三人の子供がいるのでしたわよね？ あなたの目の前でまずはそいつらを殺してみるのもまた一興ですわ」

「え？」

「ここがあなたの住み処なら、その扉の向こうかしら？」

何言ってるんだコイツ？

身重の妻と三人の子供？

そんなのおっさんにいるわけがない。

あんなものはあの時のその場凌ぎに出た言葉だ。
それを一々覚えてやがった。

しかも、今の状況が当たらずも遠からずつてとこが質が悪い。
おっさんの軽口がジーナやリリーにまで害を及ぼした。

「誰もいないよ」

「その声音、いると言ってるのと同義よ？」

「いやいや、いないってば。おっさんが浮気性なせいで嫁さんは子供連れて逃げちゃったんだよ」

もはや騙せるなんて思っていない。

でも、万が一、億が一でも騙されてくれるのなら……

「中を改めれば分かる話ですわ」

やっぱりダメか。

「お行きなさい」

貧乳が指をパチンと鳴らすと男達がそれぞれ向かってくる。
そしてその行き先はジーナやリリーのいる住居の扉だ。

「くそつたれ」

まずはジーナ達からってことか！

おっさんは男達に先んじて扉の前に陣取る。

距離が近い分おっさんの方が大分早い。

「こっから先には通さないよ」

そう宣言し、迫り来る男達を睨みつける。

まず、最初におっさんに肉薄したのは細身の顔が猫ってる男だった。なぜ、男かどうかわかったかと言うと、上半身が裸で胸毛とギャランドウが生えていたからだ。

そいつはボクサー宜しく構えながらおっさんに近付くとその拳をおっさんの顎へと振り上げた。

それ自体は見えてはいるが、かわせるかとなると話は別だ。顎が持ち上がり、脳が縦に揺れる。

だが、その衝撃はスキルによって無効化され思った以上にダメージはない。

しかし、猫頭はおっさんに一撃を加えると斜め後ろにバックステップで下がってしまう。

そして中華っぽい服を着た黒髪を後ろで一本の三つ編みにした男が入れ替わるようにして近付き、縦にした拳をおっさんの腹に叩き込んだ。

その後も入れ替わり立ち替わりおっさんを殴り、蹴っていく男達。特にローキックを正確に同じ場所に叩き込んでいく髭モジャ男がウザったいことこの上ない。

外側だけを見ればおっさんは壁のように未だにそびえ立ち、男達の攻撃を一心に受け続けている。

だが、内側は結構ボロボロで、全身にかなりの痛みが走ってる。

しかし、確かに痛いのだがそれはダメージの総量としての話。一撃一撃に関しては男達の攻撃はジーナの拳に及ばない。

とゆーか何気におっさんってば素の防御力が高いのでは？

まあ、そんなおっさんに大の男よりもダメージを与えるジーナは何者だって話になる。いや、ジーナはドラゴンか。
うん、それなら人間と比べちゃいかんよね。

そうして更にぼこられていたのだが、先に悲鳴を上げたのはおっさんをフクロにしていた男達の方だった。

「拳が！ 拳が〜！」

「ぐおお〜」

「ヒーズベリータフだよ」

「アイリスの嬢ちゃん、このままじゃ蹴りすぎて足の骨が折れちゃう」
「う」

無欲の勝利である。

「まったく、どいつもこいつも役立たずですわね。下がちなさい」

鶴の一声で男達はおっさんから離れていく。

「まさか、打撃すらも効かないのではありませんわよね？」

貧乳が訝しんだ声で聞いてくる。

「どうかな？」

おっさんがそれに真面目に答えてやる必要などない。

「なあ、そろそろ勘弁してくれないかな？」

余裕ぶつてはいるが、一度でも膝をついた瞬間に起き上がれなくなってしまうことは間違いない。

「何を言ってますの？ 俄然殺しがいでしてきましたわ」

しかし、どうやらおっさんの態度は彼女の闘志を漲らせてしまった模様である。

「ザラ、クピン、ヤーコフ」

「ほーい」

「ここに」

「はい」

貧乳少女の呼びかけに答えたのは、かつておっさんに剣を振り下ろした細身の男とチワワ男、そして常に少女の側に控えていた重厚な鎧に全身を包んだ巨漢だった。

「お前達にとつてはリベンジね。わたくしが魔法を詠唱する間の時間稼ぎをするもよし、そのまま殺してしまってもいいですわ」

「まずは奴の前で家族を殺すのではなかったのですか？」

「そうねえ……でも、どっちにしろ殺すんだから順番はどうでもいいわ。お前達があいつを殺すなら、わたくしはあれの後に妻や子供を蹴るだけですもの」

「……御意」

「へいへい、お姫様の言う通りにしますよっと」

なんかこうして見ると、どこまでも悪役剥き出しな台詞しか言わないんだよね。

「では、今一度相手になつてもらおうか」

チワワが大剣を構えながら言う。

確かおっさんが壊したはずなのだが、新調したのだろうか。

まあ、所詮は剣。

斬撃無効を持つおっさんにしてみれば怖くない。

「ほら、見ろよ。あんたに剣壊されちまったからさ、お姫様に頼んで新しいの買ったんだ。前の奴の倍はするんだぜ？」

そう言つて嬉しそうにおっさんに剣を見せてくる細身の男。

こいつも怖くない。

一番怖いのは……

「私は己の武器を壊されたわけではありませんが、主を侮辱されて何とも思わないほど不忠者ではないのでね」

そう言つて、穂先から柄までの全ての色彩が銀色で出来た槍を掲げる鎧の男。

槍の攻撃と言えば突く・払うだ。

恐らく無効化することは出来ない。

「その主が理不尽に他人の命を奪おうとしてるのを諫めてやらないのかい？ 自称忠臣さんは」

「ふん、主が白と言えば例え黒であっても白。それこそが絶対なる我が忠義だ」

なんだかな。

とりあえず揚げ足取りでもしてみよっかな。

「だったら主が死ねつつたら死ぬの？」

「無論」

「肉親とか友人を殺せって言われたら？」

「元よりそんな者などいない」

すっごい寂しい人なんだな。

「もはや、貴様と口で語る言葉はない。あとはこの槍にて問答する
としよう」

「それで語られてもおっさんには全然解読できないからね」

「二人共いくぞっ！ 私に合わせろ」

「御意」

「ういっす」

主従揃って人の話をまともに聞かないんだから！

おっさんと侵入者達との攻防の第二幕が幕を開けた。

おっさん、攻勢に出る

三人が前、右、左の三方から向かってくる。

おっさんが守らなければならないものは背にした扉への相手の侵入である以上、離れるわけにもいかない。

迫り来るその姿をおっさんはただ見ているしかないのか……

せめて何か一矢報いる攻撃手段がおっさんにもあれば……
あ、ないこともないな。

——でもあれだと相手殺しちゃわないかな？

——でもでも実際相手はこっちを殺そうとしてるわけだし、お互い様な感じしない？

——しかし実際問題マジで相手が死んだらどうするよ？

——そいつは自業自得だし、正当防衛が成り立つよ。

——でも……

——ああもう、うつさいな。なら、あの鎧男にやればいいじゃん。
頑丈そうだから死なないっしょ。

——なるほど納得。よし、やろう。

おっさんの中にいる天使と悪魔の話し合いの末、おっさんは目の前から駆けてくる鎧の巨漢へと攻勢に出ることにした。

まずは半身になり、足を開いてがに股中腰の姿勢をとる。

そして臍の上辺りで左手が下になるようにして重ね合わせ、その中にソフトボールが入るくらいの空間を作る。

そして静かに、されど地の底からはい上がるかのような声でその言葉を唱えた。

「まー」

何か感じているわけではないが、自然と指に力が籠る。

「りょー」

地面に突き刺されとばかりに脚へと力を込め、両手を右側に少しずつずらしていく。

「くー」

左腕が限界を迎えるまでずらされた位置にて動きを静止する。今、おっさんはかなり斜めっている。

「はー！ーっ！ー！！」

そして声と共に両手を鎧の巨漢に向けて突き出した。

【魔力波のスキルが発動した】

天の声と共におっさんの手から溢れ出る白い閃光。

それは巨大な光の柱となって鎧の巨漢へと襲い掛かった。

「……ぬ？」

おっさんの魔力波に当たる直前に鎧の巨漢は両腕を自分の前でクロスさせ、ガードの姿勢をとった。

しかし、だからどうしたとばかりにおっさんの魔力波はそこにぶち当たった挙げ句、そのまま鎧の巨漢を連れて壁へとぶつかり、それでも尚止まらず壁に巨漢を道連れに長大な穴を空けていった。

「き、消えろ」

慌てて魔力波を消す。

何と言えがいいのだろう。

とにかく、おっさんの想像より威力が大きかった……

確実に前出した時よりもでかかった。おそらく三倍はあったな。

よくよく考えれば魔力波なんて最初の一回しか使ってないスキルだ。そして無色の魔力吸収のスキルは常時発動型であり、おっさんが外にいる間は上限がどこまであるかはわからないが、勝手に魔力を貯蔵していく。

その貯めに貯めた魔力のお陰でこの状況となったのだろう。

場に呆然とした空気が流れる。

あの貧乳少女でさえも今し方出来た穴をアホの子みたいに見つめている。

「や、殺っちゃった？」

あれで生きてる可能性なんて希望的観測だよね。

でも死体とかないせいなのか、実はやっちゃった感はあるても殺っちゃった感はあまりなかったりする。

「や、ヤーコフの旦那……」

「ヤーコフ殿……」

他の二人も足を止め、ヤーコフとやらの消えた彼方を見つめる。

「な、なんですの……あの魔力量に任せた美しくない魔法は……」

呆然としたままで貧乳少女が視線をおっさんへと移す。

「まさか武器破壊だけでなく魔法まで……とんだ怪物ですわね……
つて！ ザラ、クピン！ あなた達いつまでボーツとしてますの！
さつさとそいつを殺りなさいっ」

「……ですが」

「いや、お姫様それはさすがに……」

「雇い主の意向に逆らいますの？」

「うーん……おれはヤーコフの旦那と違ってただの傭兵だし、死を
覚悟してまでお姫様に従おうとは思わないんだよね。そもそもおれ
つてば勝てる戦いじゃないタイプなんだよ。クピンの旦那は？」

「私は……アイリス様に従う」

「そっか、じゃあおれは一抜けする。んで、どうだい緑色の旦那。
おれを雇わないか？」

「は？」

やばい。話についてけない。

とりあえず、細身の男は敵ではなくなったのかな？

「いやさ、おれとしては勝ち馬に乗りたいわけよ。大丈夫、報酬は
いらねーよ。とゆーか勝つこと自体が報酬かな」

「よくわからんから断る」

ただほど怖いものはないし、すごく怪しい。

ついさっきまで敵だった奴を無条件に受け入れるほどおっさんは甘くない。

「いや、聞いてくれよ。おれってばあのお姫様と契約してんだけど、状況的に敵前逃亡と離反起こしてるじゃん。これってすっげー馬鹿高い違約金取られんの。払えないわけじゃないけど、払いたくないのが人の性だよね。だからさ、踏み倒すためには雇い主に消えていただかないといけないってわけ」

つまり借金してた金融会社が倒産すれば借金帳消しになるとか思ってるのか。

「ふっ、借金つてのはな、借りてた金融会社が倒産しようとも別のところに債権が引き継がれて取り立ては終わらないものなんだよ。いいか、現実にはそんな都合のいいことはないんだよ！」

「よくわかんねーけど、お姫様とおれの契約は傭兵仲介センターを介さない非公式なもんだから、お姫様さえいなくなりゃチャラになるぞ？」

「そんな甘いもんじゃないっての！」

「だあーもうっ！ 味方になってやるつつってんだから、『わーいラッキー』とでも思っ受けて入れりゃいいじゃねえか！」

「やだよ。味方になる理由がすぐに裏切るフラグにしか見えない」

どうせあっちが優勢になった瞬間に背後から刺すに違いない。

「裏切らねーから！ 絶対裏切らねーから！」

それを今まさに向こうを裏切っている奴に言われても説得力がない。だが、昔の人は言った。

『立っている者は親でも使え』

ならば使ってやろうではないか。

だが、保険はかけておくに越したことはない。

「なら、おつさんには今の距離以上に近寄るな。近付いたら敵だと認識するから」

「うわぁ、全く信用されてねえな。ま、当然だけど」

「お話は済みまして？」

それまで、なぜか黙ってことの成り行きを見ていた貧乳の少女が声をかけてくる。

「あ、お姫様。わざわざ待っててくれたの？ そいつはサンキュー。つーわけでおれ、緑の旦那に付くから」

なんか有名なカップ麺みたいな呼び方だな。

あれっておつさんのこと？

「ザラ、あなたのことは腕が立つので重宝していましたがに残念ですわ」

ちつとも残念なようには聞こえく、むしろ楽しそうに貧乳の少女は笑みを浮かべている。

「確かにお姫様は金払いがいいから客としては最高なんだけどよ、主としては最低だ。もう、人間椅子にならなくていいかと思うと清々するぜ」

「あら、悦んでたじゃない」

「そりゃあ最初はな。だけどその一回でよくわかった。お姫様のケ

ツのポリュームは普通の女と変わんないってな！ 胸がないことと
そのツインテールに騙されたけど、あんたは幼女でも少女でもない
！ 実際、歳も十八だしな」

「身長で大体わかるだろうに……」

「背がちよつと高めなだけだと思っただよ！ 背がちつちやくて
巨乳な少女が存在するように背が高くて色々薄い少女もいるんだ
！」

「ちよつと、わたくしをロリのカテゴリーに入れてましたの！？」

「……ロリコンめ」

「だからおれはロリコンじゃねーよ！ あんなちつちやくて童顔で
あれば二十代だろうと三十代だろうと発情できる連中と一緒にすん
な！ おれが好きなのは十代半ば以下の少女とか幼女だけだ！」

「それがロリコンだと言っただ」

「そうですね。ただ、合法のロリが許せないだけで紛うこと無くロ
リコンですわ」

貧乳少女とチワワ男と細身の裏切り男の三人が内輪で痴話喧嘩して
る。

なんとゆーかうざったいな。

全然話に入れないし、聞いているのが面倒くさい。

おっさん以外のその他大勢の皆さんも同じような顔をしている。

「あの、喧嘩すんなら外出てくんない？」

「あ、緑の旦那すまねえ。あらぬ濡れ衣を着せられてつい熱くなっ
ちまった。よし、いっちょ分からず屋のお姫様にさっきの魔法をぶ
っ放してくれ」

「黙れロリコン。命令すんな」

「だから違っつての！」

話を聞いている限りロリコンとしか判断できない。

この人種は二十五歳以上のバインバインな女性が好きなおっさんとは相容れない存在である。

「さて、時間稼ぎはそろそろいいですわね」

貧乳少女が今までのテンションが嘘だったかのように冷静な声を発す。

「え……あ！ 旦那、まずいつ！」

「どうしたロリコン」

「くっそ、ツッコむ時間すら惜しい。早くさっきの技でお姫様を攻撃してくれ」

そうは言ってもあれだけの威力がある以上、おいそれと使うわけにもいかない。

おっさんだって元日本人だ。

人殺しは良くないことだって認識が強い。

「グズグズしてつと……」

「く古の契約に基づき 顕現せよ サラマンダー 炎の精霊よ>」

貧乳少女の詠唱が終わると、彼女の目の前に幾何学模様の赤い光で出来た円が浮かび上がり、そこから炎を纏ったトカゲがはい出てくる。

「くそ、おれとの会話は魔法陣に魔力を満たすための時間稼ぎかよ」
「ええ、あなた達が口論してる時間だけじゃ精霊を呼び出すための詠唱の前段階までしかできませんでしたから」

どゆこと？

魔法に疎いおっさんには理解が及ばないが、つまりはあの味方にするしないの口論の最中に色々やって、あとは時間稼ぎをしてたってことかな？

とゆーことは

「ほとんどお前のせいじゃん」

「おれ？ あ、いやー悪くないかどうかと言えば悪いかもだけど、あれが召喚される前にちゃんと忠告したじゃん」

「あれはもう手遅れな段階だった。んで、あれはなんなの？」

そう言っただけのトカゲを指差す。

「サラマンダー。お姫様の使う赤の魔法でも超弩級にヤバい代物だ。召喚するのに時間がかかるが、その威力は折り紙付き。さっきの旦那の魔法よりも多分強い」

ヤバくない？

それって物凄くヤバくない？

「ふふふ、わたくしにこれを使わせた事を誇りに思いなさい。ただのゴミ掃除には滅多に使わないんですから」

すでに勝ち誇ったような少女の笑み。

実際、彼女には自身の勝利のビジョンが見えていることだろう。

だがしかし、そいつはまだ早計というものだ。
相手が人でないならおっさんはなんの躊躇いもなく、魔力波を撃てる！

「まーりょーくー」

再び構える。

狙いは炎のトカゲ。

「はーっ！」

【失敗。魔力残量がない】

「……………」

「……旦那？」

「……おしまいだあー」

「旦那!？」

一発で終了なのか。

またしてもどんなスキルなのかを検証しなかった弊害が起こった。

「お、驚かせてくれましたわね」

少女が身を竦めた体勢から顔を上げ、やたらキョドった声を出す。
どうやらさっき撃った魔力波が意識下にあったために反射的に身構えてしまったようだ。

「まあ、あれだけの魔法を使ったんですもの。魔力切れをおこすのは当然ですわ。次はこちらの攻撃を……………」

「さっきからうるさいっ！　今、リリーが眠ったとこなのよっ！」
「いたっ!？」

怒声と共に勢いよく扉を開いてジーナが現れる。

ちなみに扉を背にしていたために開いた時に扉がおっさんの後頭部に当たってしまった。

「…………なにこれ？」

ジーナは扉の外の光景に事態が飲み込めないようだ。
まあ、いきなり沢山の人がいるわけだしな。

「とりあえず全員敵ってことでいいのかしら？」

ガシッとおっさんの頭をわしづかみにしながらジーナが呟く。

…………全員っておっさんは入ってませんよね？

おっさん、攻勢に出る（後書き）

魔力波はド○クエやったことある人ならわかるかもですけどマダ○
テのイメージです。

おっさん、ほぼ空気

ジーナはおっさんの頭を掴みながらその他大勢を睨みつける。

そのえもいわれぬ迫力にロリコン男をはじめ、ほとんどの者がビクッと身を震わせる。

「豚、これはあんたの手引き？」

「断じておっさんの手引きではないです」

「手引き“では”？」

ジーナの指に力が込められる。

「諸々の事情がありまして……」

「そう、ならこいつらを殺した後にでも釈明を聞いてあげるわ。あと、他の奴らはここで殺す」

ジーナの口から冷徹な声音で紡がれる言葉によると、とりあえずおっさんの命は猶予期間を得たようだ。

「ちょっ、奥さん？ おれは敵じゃないですよ？ 味方味方！」

ロリコンが慌てた様子で味方アピールをする。

ジーナはその姿をジロリと見るとすぐに興味を失ったように視線を移した。

「……サラマンダー。へえ、かなりの上級の魔法士がいるみたいね」

視線を移した先にいたのは炎のトカゲ。

それを見たジーナから強烈なまでの殺気が溢れ出す。

「だ、旦那。奥さんおれのことガン無視なんですけど……。つかこええ……」

同感だ。

多分ジーナは物凄く怒っているのだろう。

だってここはジーナにとってのサンクチュアリで、そこには無数の侵入者がいる。

そしてそこでまずはじめに疑うのはドラゴンを狙う存在のこと。

いや、むしろジーナの中ではそう断定していてもおかしくはない。

ジーナのリリーへの溺愛具合は日に日に増していると言っても過言ではないから、それを犯そうとする者達への怒りもまた凄まじいのだろう。

って痛い！　なんかおっさんの頭に加えられる握力が強くなってる。なんかミシミシいつてるーっ！

「さっきから私のことを奥さんって言ってるバカがいるけどどういうこと？」

「色々誤解があっただんです！」

「豚、あとの説明次第じゃ殺すわよ？　あと、そこのお前」

「は、はいっ」

「殺す」

「いやいや、いやいやいや！　え、理不尽。すっげー理不尽。なに、奥さんじゃないの？」

理不尽さ加減で言ったらお前の元主とどっこいどっこいだな。

ま、ここに侵入してきた時点でジーナの中では殺害対象なのだろう。おっさんもリリーに懷かれてなきゃヤバかったに違いない。

「あ、説明するとちよいと長くなるんだけど……っておわっ!？」

ロリコンに説明しようと思った時、急に持ち上げられ横にポイと捨てられた。

「<我 災厄からの護りを 創造す>」

ジーナの言葉と共に彼女の前面に白い光の円が生まれる。その円は複雑な模様が描かれており、貧乳少女がサランダーを出した時に出現したものと似通っていた。

円はすぐに消え去り、その円が消えた場所には馬鹿でかい透明な壁が出現した。

そして次の瞬間、その壁に炎がぶつかった。

それは圧倒的な熱量と威力を持ってジーナの目の前に現れた壁に襲い掛かり、ついには壁にひびを入れていく。

そのひびが壁の全面に至ったところでようやく炎が収まり、それと同時に壁は砕けちってしまった。

「あら、耐え切りましたの？ なかなかやるようですね」

「お前がサランダーを召喚した魔法士か」

「そうですね。希代の魔法士こと、アイリス」ゴッドウィルドと申します」

貧乳少女改めアイリスは優雅に微笑みながら自己紹介をする。

とても今さっき不意打ちしたようには見えない。

「ファミリィネーム持ちだと……貴様、貴族か」

「見たらわかりますでしょ？ この全身から溢れ出る気品と麗容な

姿。どこをとつても貴族としての正しい有様を映してますわ」

ついでに尊大な態度も想像しうる嫌な貴族そのものだ。
だがかし

「ただし、胸はない」

それだけでおっさんの中での女としての魅力はマイナス五十点だ。

「今なんつつたゴラァ！」

「お前は少し黙ってろ」

「旦那、空気読めないってよく言われませんか？」

三者三用に責められる。

だけど、それでも譲れないものってあるじゃん。
ね、チワワさん？

視線を黙ってことの成り行きを見ているチワワ男に向ける。

しかし、おっさんの視線を受けたチワワ男はゆっくりと首を左右に振った。

よしわかった。少し黙っていよう。

「あれのことは置いといて、お前が貴族だろうと手加減はしないぞ」

「あら、わたくしも妊婦だろうと容赦はしませんわ」

なんでそこで爆弾投下すんのよ!？

周りの気温が三度程下がった気がした。

「豚、説明次第では二回殺す」

ジーナと出会う前の発言でこんなにも自分の首を絞めることになる
うとは……

でも、ここに辿り着いた経緯を話した時に殺されそうになったことは
教えてるから、ちゃんと最初からキチンと説明したら許してくれる
よね？

あ、でもお仕置きがあるならそれはそれで楽しみかもしれない。

「ふふふ、説明もなにもあなた方は今から死ぬのですから関係ありません
わ。やりなさい、サラマンダー」

アイリスの声に従い、サラマンダーがその口をジーナに向けて開く。
そしてそこから炎を吐き出した。
さっきの攻撃もあれか。

「<我 災厄からの……>っ！」

ジーナが迎え撃とうとさっきの壁の呪文を唱えようとしたところに
チワワ男が自身の得物である大剣を投げつけることで詠唱の妨害を
する。

このままではジーナがっ！

身を呈して庇おうと動き出すが、反応が遅れてしまったために間に
合わない！

「チッ、限定、部分解除」

迫り来る炎の攻撃を薙ぎ払って現れたのは右腕をドラゴンのものへ
と変貌させたジーナの姿。

おっさんがジーナの無事に安堵する一方で、その他の者の視線はその右腕に集約する。

「は、は、あはははっ！ まさか捜し求めていたドラゴンがこんなところにいるなんてっ！」

最初に口を開いたのはアイリス。

その声は心底楽しそうであり、尚且つ抑え切れていないほどの狂気を内在している。

「……ぶったまげた」

「ふむ」

ロリコンとチワワ男も他に言葉が見つからないといった様子でジーナを見つめる。

「ジ、ジーナ……」

出来るならば隠しておきたかった。

そうであれば、最悪おっさんの命一つを犠牲にしてジーナとリリーが逃げて助かる道もあったかもしれないから。

だが、知られてしまった以上アイリスという少女はどこまでもジーナを追いかけていくことだろう。

「なにを不安そうな声を出してるんだ。確かに正体を知られたことは色々まずいかもしれないが、目撃者など全て消せばいい話だ。それにバレてしまったのだから隠す必要もない。むしろこれで良かったよ」

良かったとはあまり思えない。

「ドラゴン。あなたの心臓、このアイリス」ゴッドウィルドが有効に使ってあげますわ。だから安心して死になさい」

「死ぬのはお前だ。なぜこの空間がこんなにも広い造りなのかわかるか？ それはな……いざという時に私が全力で戦うためだ！ 限定、全解除」

力強いジーナの言葉。

そしてジーナの体が膨張し、着ていた服が破けていき、ついにはリーの五倍以上はある大きな白いドラゴンへとその身を変えた。

[illegible]

耳をつんざくようなジーナの咆哮に思わず耳を塞ぐ。

「サランダー！」

アイリスも同様に耳を塞ぎながらも、視線はドラゴンの姿となったジーナから逸らさない。

サラマンドーへと指示を飛ばしてジーナと相対する。

サラマンダーは召喚者であるアイリスの指示に従い、その口をジーナへと向けて開く。

「遅い」

しかし、サラマンダーが炎を吐き出すよりも速くジーナがサラマンダーへと腕を振るい、サラマンダーを叩き潰してしまった。

「う、うわああああ」

それを見ていたその他大勢の内の一人が恐怖に当てられ、広間から洞窟の通路へと続く道へと走り出す。

それに他の者も追従し、通路へとひた走る。

「一匹たりとも逃がさない」

ジーナが息を大きく吸い込む仕草をし、通路へ向けて口を開くとそこから白い光の球が吐き出される。

それが通路付近の壁へと当たり、通路を塞いでしまった。

「この場所と私の正体を知った以上、皆殺しだ」

死刑宣告と言えるものを淡々とした調子でジーナが伝える。そしてその視線がアイリスで固定された。

「まず、一番厄介そうなお前を殺す」

「あ……くっ！　＜炎の槍よ　我が敵を貫け＞」

赤い底辺の直径が一メートルほどの円錐がアイリスの背後に現れる。円錐は現れた直後に赤い弾丸となってジーナへと襲い掛かった。

しかし

「ふんっ！」

ジーナの腕の一振りで霧散してしまう。

あれがいわゆるチートって奴なんだろうな。

「そ、そんな……」

たった数分。

それだけの時間であの自信満々なアイリスの姿は消え去ってしまった。

最初は悪役っぽかったのに、立場が逆転したように見えるのはおっさんだけ？

なんかもう、アイリスが哀れになってきた。

もはや彼女は放心した様子でジーナを見つめることしか出来ない。

「死ね」

そのアイリスに向かいジーナの腕が振り下ろされる。

「アイリス様っ！」

間一髪のところまで飛び込んだチワワ男によって辛うじてアイリスはジーナの腕から逃れることが出来た。

だがそれは少しばかり寿命が延びたに過ぎない。

「ヤーコフさえ、ヤーコフの槍さえあれば……」

ブツブツとアイリスが呟く。

その声は静まりきった広間の中ではいやに響いた。

「ドラゴン殺しの力を持ったあの槍さえあれば、このような無様なことには……」

「アイリス様、お気を確かに」

「ヤーコフの槍さえあれば！」

「無いものねだりをしてもしょうがありません。今はいかにしてこの場を逃れるか考えるべきです」

「逃がさないわよ」
「くっ！」

迫るジーナの追撃をチワワ男はアイリスを抱えて避ける。
だが、いつまでも逃げ切れるわけじゃないだろう。
いつか二人は捕まり、ジーナによって殺されてしまう。

果たしてそれは良いことなのか。

確かにジーナの正体と居住が知れ渡ったことで口封じに殺すのは合理的なはずだ。

ただとおっさんは人として、そしてジーナと一週間ほど共に過ごした者として彼女に人を殺させてしまっても良いのか。

人としての倫理感とリリーやジーナのためという思いが天秤の両皿の上に乗り、揺れ動く。

だが、結論はあっさりと出た。

つまらない倫理感に囚われてジーナ達を危険に晒すことは出来ない。僅か一週間ではあるが、共に暮らしたことは間違いではないし、情が沸くのは当然のこと。

対してアイリス達はおっさんの命を狙い、ジーナ達をも狙っている。どちらを取るかは単純な図式だ。

おっさんはアイリス達の死を肯定した。

しかし、そう思った瞬間、おっさんの中で何かが失われたような喪失感を感じた。

おっさん、ほぼ空気（後書き）

シリアスって難しいです。

特に私の中では主人公はシリアスキャラじゃないのでなお難しい。
なのでするーっといってみました。

次話で一連の話は終わりにする予定ですので出来るだけ早く投稿しようと思います。

おっさん、飛びます

とうとうアイリス達は壁際まで追い詰められていた。

目の前にはドラゴンの姿となったジーナが悠然と立ち、最早逃げ場など与えないとばかりに油断なく構えている。

「もう、鬼ごっこは終わりだ」

「……クピン、下ろしなさい」

「アイリス様……」

逃げることを諦めたのかアイリスは抱き上げていたチワワ男に自身を下ろすよう命じる。

チワワ男はそれに異論を挟むこともなく、静かにアイリスを地面に下ろす。

「命乞いなんてみつともない真似はしませんわ。抗っても無駄なことも理解しています。ですから一言……死んだら呪って差し上げます」

それが遺言だとばかりにアイリスは言い放つ。

ジーナはそれに答えるでもなく、ただただその腕をアイリスに向けて振り下ろした。

——アイリス様が死ぬ必要などありません

それはどこからか聞こえてきた声。

一体誰が……

そう思い辺りを見回そうとした瞬間、

「があっ！」

ジーナのうめき声とも叫び声ともとれる声が耳に届き、視線をジーナの方へと戻す。

そこにはおっさんが魔力波でぶっ飛ばしたはずの鎧の巨漢がいた。しかし、彼の鎧はボロボロと言っても差し支えないくらいで、左腕の肩から先は破損してしまっただけで腕が剥き出しになっており、その腕も血に濡れ、肘から骨が突き出していた。

それ以外でも所々砕けている箇所は多々あり、フルフェイスの兜も右上の部分が失われ、彼の素顔をかいま見ることができる。

そこから覗く理知的な瞳は優しげにアイリスを見つめている。

「不肖ながらこのヤーコフ、帰ってまいりました」

鎧の巨漢、ヤーコフはジーナの腕を槍で貫き、強引にアイリスへの軌道をずらされた状態で止まっている。

「よく、生きてましたわね」

おっさんも同意見だ。

あれでよくも生きていられたものだ。

「はい」

「ならばここから反撃ですわ」

アイリスがかつての勢いを取り戻し、消えかかった蠟燭の火が再び

燃え上がったかのような気概を見せる。

「申し訳ありませんが私もそう長くは戦えそうにありません。すぐに撤退を」

「どうして」

「左腕と肋骨が数本折れています。ですが、アイリス様が逃げるまでの時間稼ぎくらいならしてみせます。私が吹き飛ばされた穴を進めば洞窟から出られますから急いでください」

ヤーコフは視線で出口を指し示す。

「ですが」

「クピン、頼む」

「承知」

「あ、こらっクピン離しなさい」

チワワ男がアイリスを再び抱え上げ、ヤーコフが吹き飛ばされた穴へと走る。

「ぐっ、逃がさ、ん」

「あなたは私に付き合っていたきます」

「くそっ」

槍を引き抜いたヤーコフがジーナと向かい合いながら突きを繰り出す。

それをかわしながらジーナは逃げ去るアイリス達の背中を見る。

「そいつがドラゴン殺しの槍か？」

「ええ、魔槍ゲオルキングス。ドラゴンの最大の武器である魔力を喰らう正義の槍です」

「正義ねえ……」

またチラリとジーナがアイリス達を見る。

そしてその表情を苦々しいものに変えたあと視線をヤーコフに戻そうとした時におっさんとジーナの視線がピタリと合う。

「豚、奴らを逃がすなっ！」

「あ、ああ」

「旦那、おれも行きます」

ジーナに言われはつとしたように動き出す。

ロリコンも追従するように後を追ってくるのだが、穴の位置はおっさんからかなり遠いため、このままでは間に合いそうもない。

インセクトフォーゼ
「昆虫形態」

インセクトフォーゼ
【昆虫形態のスキルが発動した】

クワガタ状態になって飛んだ方が速いと判断し、スキルを使う。

「あ、ずるいつ！？」

そう言つてロリコンがおっさんの脚に掴まる。

「脚もげるっ！」

「大丈夫です」

お前が言つなよな。

っーかなんでついて来てるんだよ！

くっそー、振り落としてやる。

「旦那旦那、ヤバイよ……」
「あん？」

慌てたようなロリコンの声に浮かんた考えを振り払いながら前方へと目を向けると、アイリスがこつちを見ていた。
その口は何やらパクパクと動いていて――

「お姫様、魔法の詠唱してる」
「何！？ 何の魔法が分かるか？」
「いや、わかんね」

使えないな！。

そう思っているといきなり目の前に炎で出来た壁が現れる。

「危なっ！」

このままだと壁に突っ込んでしまう。
だが、おっさんはある程度の高さまでしか飛べないので急上昇してかわすのは無理。
また、ロリコンが掴まってるせいで横にかわすような小回りのきいたことも出来ない。
選択肢は止まるの一択しかなかったのだが、車が急に止まれないようにおっさんも急には止まれない。

「旦那、達者で」

危機を感じ取ったのかロリコンはいち早く手を離して離脱する。

そしておっさんは翅の動きを止めたのだが、慣性の法則に従い、炎の中に飛び込んでしまった。
めちゃくちゃな熱さの中を再び翅を動かすことでぐり抜けるとも
うそこにはアイリスを抱えたチワワ男の姿はなかった。

「くそ、逃がした」

だがまだ間に合うかもしれない。

急いで穴の中を追いかけてようとした時

「ぬうおりゃあああ」

「きゃっ」

気合いの入った野太い声が聞こえ、次いでジーナのものと思われる
声が耳に届く。

声のした方を見ればジーナが首から血を吹き出している姿が目に入
った。

「このっ！」

血を流しながらもジーナが腕を振るうが、それはあまりにも単調な
攻撃であり、あっさりとヤーコフはかわしてしまい、目の前を通過
する腕を槍の穂先で切りつける。

「くうっ……」

「ドラゴン自慢の回復力や多彩な魔法もこの槍で傷を負えば形無し
だなゴッツ、ゲホッ……もう時間はかけられないか」

ヤーコフは苦しそうに咳込むと視線を鋭くさせてジーナを睨む。

「時間稼ぎの役目は果たした。あとは己への挑戦としてドラゴンに挑むのみ」

「舐めるな人間っ！」

ジーナとヤーコフの戦いはヤーコフ優勢のまま進む。

ジーナの腕や尾による攻撃はかわされ、ヤーコフの攻撃はジーナの体に確実に傷を与える。

だが、一方的なように見えてその実、ヤーコフは内心冷や汗ものだろう。

なぜならばジーナの攻撃は一撃一撃が人にとって必殺の威力を持ち、今のヤーコフの体では掠っただけでも致命傷と成りうる。

そうでなくても槍を一回振る度にヤーコフの体力はガリガリと物凄い勢いで削れていつている。

このまま時間さえ経てばジーナの勝ち揺るがない。

だが、なぜか妙な胸騒ぎがする。

気付けばおっさんは穴へと向かわず、ジーナ達の方へと飛んでいた。言い知れぬ不安、まるでジーナが死んでしまうというような嫌な予感。

その予感は決して間違いではなかった。

「はあっ！」

ジーナが腕を囓に噛み付くために口を大きく開く。

しかし、その瞬間こそヤーコフがずっと待ち望んでいたものだったのだ。

「外は鱗に覆われて致命傷を与えられずとも中まではそうであるまい！」

グングニール
スキル発動、神槍」

それはただの突き。

だがしかし、愚直に突きの修練を繰り返した者だけが辿り着くことができる人の限界を超えた神速の突きだ。

それがジーナの口腔へと迫る。

だけど

「間に合った」

ほんの一瞬だけおっさんが間に入る方が早かった。

「なっ!?!」

「え?」

槍はクワガタ化したおっさんの腹を貫通し、そこで止まる。

今まででもっとも強烈な激痛とも言えるものを感じながら、おっさんの心の内はジーナを守れたことに対する満足感の方が強かった。だけど、まだ終わってない。

この、ジーナを害する『武器』など存在させてはいけない。

「壊れてしまえ」

「しまっ……!」

【武器破壊のスキルが発動した】

崩壊し、ボロボロと崩れ去るドラゴン殺しの銀の槍。

そう、これでジーナの勝利は揺るがない。
おっさんの体は翅に力が入らず地面に落下するが、まだ意識は保っていた。

「今」

ただ一言ジーナにそう告げる。

「■■■■■」

ドラゴンの咆哮とともに振るわれたジーナの腕がヤーコフの体をボールのように吹き飛ばす。

そして淡い光に包まれたジーナの体が段々と人の姿へと戻っていく。
だが、問題はそこじゃない。
人の姿に戻ったジーナが体に何ひとつ身につけていないのが一番の問題だ。

「大丈夫っ！？ 死んでない！？」

ジーナが近付いてきているというのに声はどこか遠くから聞こえてくるような気がする。

視界も霞んでいく。

だが、目の前には桃源郷がある。

おっさんは心の録画ボタンを押して、最期の時を焼き付ける。

初めてジーナの生まれたままの姿を見るのだが、透き通るような白い肌に美味しそうなメロンが二つ。

ああ……この体が動くのなら飛びつきたい。

「なんで私を庇って……」

声がまた遠くなる。

お別れの時間が近いのかもしれない。
出来ることなら笑って終わりたい。

「ただの勘だよ。でも、これがホントの虫の知らせって奴だね。お
っさんが虫人^{ムシヒト}だけに……」

……四十五点くらいか。
もう少し捻りが欲しかった。

そんなことを思いながらおっさんの意識は黒に染まっていった。

「う、うう……」

最早指一本動かない状態ではあるが、ヤーコフはまだ生きていた。
だが、それはほんの僅かな時間であることはヤーコフ自身にもわか
っていた。

そんなヤーコフの顔の傍に何者かが立つ。

「ありや、ヤーコフの旦那ってばまだ生きてんだ。しづといね」
「ザラ……」

その何者かの名前をヤーコフは掠れた声で呟く。

「逃げ、なかったのか……」

「うーん、どうしようか悩んだんだけど今更お姫様達と同じ立ち位置に立つのもなんなんで」

「どう、いう……」

「ヤーコフの旦那。おれね、あんたの主を裏切ったんだ」

その言葉にヤーコフは己の瞳を見開いてザラの姿を捉える。

ザラは主であるアイリスがいきなり連れてきた者であったが、剣の腕が立ち、言われたことにも従う素直な男だ。

少し性癖がおかしい点に目を瞑れば、欠点というものが思いつかないような好青年だ。

ヤーコフの見解としては裏切るような真似をする男ではなかった。

「理由はお姫様には適当に言っただけ、本当はちょっと違うんだ。

冥途の土産に教えてやるけど実はおれさ、———なんだ」

その言葉に見開からたヤーコフの目がさらに開く。

「だからあの緑の旦那に興味が出た。旦那ならもしかしたら——
——になるかもしれない」

「あ、れは……もう、死ぬ」

「死なないよ」

ザラは地面に倒れ伏したエメラルドグリーンのやたら大きいクワガタとそれに寄り添う白い髪の子を見つめながら、やけに確信を持った様子で言う。

「もし、生き、ていても、お前が、ドラゴンに殺さ、れる……」

「そこは秘策があるからね」

そう言つてザラは懷から青い小さな瓶を取り出す。

それは、死に行くヤーコフには喉から手が出るほど欲しいもの。

「私に、くれっ……」

「ヤーコフの旦那、あんたはやれないな。代わりにこいつをプレゼント」

ザラはそう言つと腰の剣を引き抜き、ヤーコフの首筋を切り裂いた。生暖かく、赤黒い血が吹き出るのを避けながらザラが呟く。

「さよなら、ヤーコフの旦那」

そう言つて視線をクワガタの方へと向けて、そちらへと向かつて走り出した。

「旦那ー、大丈夫ですかー」

その手に先ほどの青い小瓶を持ちながら――

おっさん、飛びます（後書き）

一応の収束です。

あ、リリーが全然出てこない……

おっさん、目覚める

【ラルドは貫通耐性のスキルを得た】

【ラルドは九死に一生のスキルを得た】

そんな天の声を目覚ましにして、意識が浮上してくる。

目を開いたところに映ったのは洞窟内の住居の天井。

どうやらおっさんは死んだわけではなく、天国には行かなかったようだ。

なんか顔が妙に水っぱいと思ったらビチャビチャに濡れたタオルが頭に載せられていた。

インセクトフォーゼ

いつの間にか昆虫形態は解け、人型に戻っている自分の手でそのタオルをどけ、目の前で手を掲げて握ったり開いたりを繰り返してみる。

うむ、問題はない。

なぜ助かったのかはわからないが、ラッキーとでも思っておこう。

そんなことを思っただけで視線を横に移した時に思考が吹っ飛んだ。

そこでおっさんが見た光景は異常だった。

何せ、縄で芋虫の如く縛られた男が白目を剥いて泡を吹いていたのだから……

訂正しよう。

もしかしたらここは洞窟内の住居や天国など生易しい場所ではなく、地獄なのかもしれない――

それからある程度の時間が経ち、縛られていた男が意識を取り戻す。この男というのがどっかで見たことあるなと思っていたら、ロリコン野郎だった。

「いやー、旦那が死んでなかったようですねによりです」

「日頃の行いがいいからかもな」

「日頃の行いが良かったらそもそも死にけるような目には遭わないもんですよ」

なかなか鋭いところについてくるじゃねえか。

まあ、そんなくだらないことはどうでもいいんだ。

「ジーナ達はどうなった？」

「ジーナ……ああ、クラブジーナの姐さんですか？ それなら……」

そう言っただけでロリコンがああ後どうなったかを一から説明してくれた。なんでもおっさんがクワガタから人型に戻ったのは瀕死でヤバいつて印だっただけで、たまたまロリコンが持っていた秘薬を飲ませたら治ったとのことだ。

薬一つであの傷が治るとか有り得るのかもと思うが、事実治ってるのだから許容するしかあるまい。

ロリコンはおっさんの命の恩人となるわけだが人間だからという理由で全面的な信頼は出来ないってことで縛った挙げ句、ジーナは用事があるからってことでおっさんを見るよう強制されたとのことだ。

「んで、ジーナの用事って？」

残党狩りにでも出掛けたのだろうか。

「いえ、詳しいことはおれにもわかりません。とゆうかクラベジーナ姐さんが腹減っただろうって持ってきてくれたものを食ってから
の記憶が曖昧で……」

あれを食ったというのか!?

「よく生きてたな」

普通の人間だったら即死しかねないようなものだと思うんだが、そんなに毒性はないのか?

「いやー、変な臭いがあるんで冗談混じりに毒入ってませんよね?
って聞いたたら目の前でうまいって言いながら食ってたんで、大丈
夫臭いだけだと安心して食べたんですけどね。まあ、味もなにも覺
えてませんけど……」

おっさんの時と同じじゃん。

本人が目の前で食ったらそりゃ安心するよね。

「とゆうことはおっさんが意識を失ってからどれくらい時間が経っ
たかはわからないってこと?」

「ですね」

「そうか。まあ、お前がおっさんの命の恩人だってことはわかった。
礼を言う。ありがとう、ロリコン」

「まったく感謝されてる気がしないです。あの薬、まず手に入らな
いんですからね!」

「んなこと言われても、おっさんその薬見たわけじゃねーし」

「いや、薬のことはこの際どうでもいいんです! ロリコンを訂正
して下さい」

「んじゃ、名前なに？」

「おれの名前はザラと言います。よろしくラルドの旦那」

「おっさんの名前……」

「ああ、クラベジーナ姐さんから聞きました」

なるほど。

まあ、おっさんの名前知っててこいつに話す可能性があるとすれば
ジーナしかないわな。

それにしても、普段豚とかお前としか呼ばないくせにジーナってば
ちゃんとおっさんの名前覚えてたんだ。

ん？ 待てよ……

ジーナと言えば確かおっさんが意識を失う前、全裸ではなかっただ
ろうか。

目を閉じればあの時しっかりと焼き付けたジーナの裸体が浮かび上
がる。

うん、ビューティホーバディ。

じゃなくて、つまりはこのロリコンもそれを見たということではな
いだろうか。

しかも、意識が薄れていくおっさんとは違い、しっかりとその眼に
焼き付けることが出来たはず。

ずるい。

別にジーナはおっさんのものなんだから見てんじゃねーよボケとか
言いたいわけじゃない。

むしろあの状況で目を背ける純情ボーイとか、まったく興味すら湧
かない不能者なんかよりもずっと評価する。

だがしかし、おっさんよりも長い時間見てたってことが羨ましい＆
妬ましい！！

あの裸体をジーナと数日間共に過ごしたおっさんに対する神様のご褒美的なものとするならポツと出のこいつの方がより長い時間見るのは不公平極まりない。

「……どんくらい見た？」

「え、何がですか？」

「ジーナの裸だよ。どんくらい見たんだ？」

「……ああ、そっいえばあの時姐さん裸でしたね。ババアには興味ないんで忘れてました。そうですね……時間を全部足してもそんなでもないですよ」

あ、そうか。

こいつ、性的異常者だった。

自分でロリコンとか言っておいてそこら辺考慮してなかった。

つかロリコンでもそこに女の裸があれば興奮するもんだと思ってた。

「ババアってジーナに失礼だろ」

「でも、ドラゴンって千年は軽く生きるって言われてますからわからないですよ？ 旦那は姐さんの実年齢聞いたことあります？」

そっいえばないな。

でも、おっさんとしては二十五越えてりや別にどんだけ歳食ってても構わない。

本当に惚れたらヨボヨボの婆ちゃんでも愛せる自信あるし。

「その思想、まったく理解できません」

おっさんの女性観は真っ向から全否定された。
ふん、こっちだって理解できねーよ。

「それはそうと、さつきから部屋を覗いてる少女はどちら様ですか？ ペロペロしていいですか？」
「ん？」

ザラの言葉に部屋の入口の方に目をやると、体を半分隠して顔だけをこちらに覗かせているセミロングの白い髪 of 蒼い瞳の五、六歳くらいの子供がいた。
おっさんと視線が合うとその子供はビクリと体を震わせ、髪の間から覗いている尖った耳がピコピコと動いた。

「……誰？」

迷子かなんかか？

でも、どっかで見たような……

「……おとーさん」

「はい？」

「おとーさんおとーさんおとーさんおとーさん！」

その子供はもの凄い勢いでおっさんに駆け寄ると胸に抱き着き、顔をグリグリと擦りつける。

この仕草はもしかして……

「リリー？」

「おとーさんおとーさんおとーさん」

「あ、はいはい。んで、君はリリーなのかな？」

「うん」

子供——リリーが頷いて肯定を示す。

どうやらこの子供がリリーってことで間違いはなさそうだ。
それにしても一体いつの間に人型になれるようになったと言った。
いや、それは今はどうでもいいか。
今はもつと考えるべきことがある。
それは……

「可愛いなオイ」

天使じゃん。

なにこれ、天使じゃん！

「旦那……いえ、お義父さん！ その子はいったい……」

「あ、少し黙ってて」

可愛いなあ。

ドラゴンの姿でも甘える仕草は可愛かったけど、おっさんよりちっちゃい今の姿で甘えられると倍可愛いわー。

「おとーさんもうだいじょーぶなの？」

「ああ」

「リリー、おとーさんといっしょにいてもいい？」

「もちのロンだよ」

などとロリコンを置いてきぼりに初めてとなる本格的な親子の会話を楽しむ。

だが、楽しみすぎて本題を忘れてはならない。

「お父さんどれくらい寝てた？」

「うーんとね……」

そう言つてリリーは指を一本、二本と立てていく。
それが両手に差し掛かったところで動きが止まった。

「これくらい」

「六日か……」

かなり長いこと寝てたみたいだ。

アイリス達はこんな長いこと何もしなかったのだろうか。
そこら辺も聞きたいんだけどわかるかな？

「えーと、お父さんが寝てる間に変わったことはなかったかな？」

「かわったこと？」

「うん、誰か来なかった？」

「んーとね、だれもこなかったよ。おかーさんがだれもこれないよ
うについていりぐちこわしたんだって」

あ、そっか。

ここは洞窟なんだから入口ぶっ壊せば早々入ってこれないよな。

「あとねー、おかーさんがおひっこしするっていった」

ひっこし……引っ越しか！

確かに居場所がバレた以上、ここに留まり続けるのは悪手でしかない。

おっさんがやったように無理矢理洞窟を魔法で破壊して侵入するこ
とも出来なくはないのだから。

「どこに引っ越すかは知ってる？」

「しらなーい。ねえ、おとーさんリリーね、おとーさんのかんびよ
ーしたんだよ」

褒めて褒めてとばかりにリリーが目をキラキラさせている。
あ！あのビチャビチャのタオルはリリーが載せたのか！
最初はなんじゃこれとか思っただけ、それなら価値は上昇だ。
これは褒めてやらねばなるまい。

「リリーはいい子だね」

「えへへ」

頭を撫でてやるとすぐ嬉しそうに目を細める。
ここらはドラゴンの時と変わらない。

「あのー、お義父さん。そろそろおれも話に入れてください」

忘れてた。

つーかお義父さん呼ぶな。

微妙なイントネーションの違いがなぜかわかってしまう。

「あ、にんげんのおじちゃんもおきたんだ」

「うっ、まぶしっ！」

「わかる。その気持ちわかる！」

「なにを馬鹿やってるんだお前らは……」

「あ、ジーナ」

「姐さん」

「おかーさん！」

「まぶしっ」

そこにジーナが現れ、事態は最早収集がつかなくなるかに思えたのだが、

「豚、元気そうだなによりね」

ジーナはすぐに視線をおっさんの顔に向けることでリリーの放つ光に抗った。

「お蔭様で」

「そう、ならさっさと支度しなさい」

「それって」

どうゆうこと？

と続けようとしたおっさんを遮るようにジーナが言った。

「引っ越しするわよ」

リリーから聞いていたとはいえ、目覚めたばかりのおっさんにはあまりにも急であった。

おっさん、引っ越し前です

おっさんが寝てる間に引っ越しの準備はほとんど全て完了していたらしく、あとはもう荷物を持って出ていけば完了の段階までできた。

各部屋はもぬけの殻も同然で、ほとんど何も無い。

ってゆーか、これだけなんにもなかったら荷物はどんだけの量なんだと思ってしまう。

「見事に何も無いね」

「うちには必要なものしかないからな」

その必要なものの中にリリー用の大量のおもちゃ等も入っている。

「えーと、荷物は？」

「広間に纏めてある」

「そっか」

一週間ほど（寝てる間も含めればもつとではあるが）時間を過ごしたこの住居ともおさらばか……

なんか村にいた頃よりも離れがたい気がする。

「で、どこに行くかは決まってるの？」

せっかくの引っ越しなのだから海が見えるところがいいな。
だっておっさん、魚派だもん。

「あ」

「あ、つてなによ。決めてないの？」

「全然決めてない。でもリリーが魔力限定を覚えて人形態になれるようになっただから候補はいくらでもあるわ」

「そっかそか。まあ、リリーが人の姿とれるなら、町とかに行っても大丈夫だもんね。それにしても、目を覚ましたらリリーがいきなりちっちゃい天使になってたからビックリしたよ」

おっさんがそう言うのとジーナはこちらに顔を向け、ニヤリと勝ち誇ったような笑みを浮かべる。

「ね、ね、ね？ リリーが初めてしゃべった言葉なんだと思う？」

「なんだろうな……」

リリーってばおっさんのこと大好きだし、やっぱ『パパ』かな？

あ、でも『おとーさん』って呼んでるよな？

まあ、まだ人語を話せないドラゴンの時からおとーさんって呼んでた気がするからパパはないかな？

「リリーったらね……お母さんの料理美味しくないって言ったのよ？」

やたら嬉しそうに言ってるが、ちょっと待ちなさい。

その発言、ツツコミ所がいくつかありはしないか？

「いや、初めて話す言葉が長文過ぎる。あと、ジーナってば否定されてるじゃん」

否定されたのは料理だけだね。

そう言ってしまったリリーの気持ちはわかるが、初めてがそれはな

いでしょー。

「え、普通でしょ？」

「なにが？」

「ドラゴンが話し掛けていくとその言葉を覚えていって、ある程度の語彙が蓄積された状態になって初めて話せるようになるのよ。私だって初めてしゃべった言葉は『お姉ちゃんのご飯盗った』だし」

ああ、そうか。

ドラゴンだもんなー。人間と同じ物差しで測ったらダメだよな。

「おとーさんおとーさん」

ずっとおっさんの傍にいて手を繋いでいたりリリーがブンブンと振ることで私、聞きたいことあるのアピールをする。

「なに？」

「おとーさんはさいしょになんてしゃべったのー？」

無邪気な質問だな。

普通なら自分がなんて言ったかなんて覚えてないのだが、おっさんの場合はよくネタにされてたから記憶に残ってる。

前の世界の母曰く

「お父さんはおっぱいって言ったらしいよ」

おっさんは他の赤ん坊よりも早く言葉を話せるようになったらしいが、結局一ヶ月くらいをこの単語一つで乗り切ったみたいだ。最初はしゃべったと大はしゃぎの両親もさすがにこれはどうなんだと息子の将来を心配したらしい。

あらゆる場所でおっぱい言うから恥ずかしかったとグチグチ言われたもんだ。

まあ、次に話した単語がママだったらしくそれが母の自慢だと言われた時には恥ずかしかったけど少し嬉しかった。

ただ、『今のお前は自慢出来ないけどね』ってオチ付けられるんだよなー。

しかも、この話を初めて聞いた十七歳の正月以来、毎っ回！

それから二十年近くおっさんは母親にとって自慢出来ない息子らしい。

あれ、なんだろ視界がぼやけてく……

「おとーさんどーしたのー？」

「リリー、これはね？ 己の馬鹿さ加減を恥じてるのよ？」

「違うから。いや、親って時に残酷だよなって思っただけ」

こっちが覚えてないこと、いつまでも覚えてやがるから質が悪い。

「私は残酷じゃないっ！ だってこんなにもリリーを愛してるんだから！」

そう言っただけならリリーをおっさんから引き離してギュッと抱きしめる。

あら、リリーの顔がジーナの胸に埋まってるじゃない。

羨ましい……おっさんもハグされたい。

「ジーナってばそんな怒鳴らなくなっただけいいじゃん。あと、ついでに快気祝いにおっさんも抱きしめてくんない？」

「は？ なに、馬鹿なの？ 死ぬの？」

「……冗談だよ。半分」

だからそんなに冷たい目で見ないで……いい意味でゾクゾクしちゃうから！

おっさん、興奮してマジでヘラクレする五秒前だよ！

「リリーがしたげるー」

抱きしめるジーナから逃げるようにしてリリーがおっさんの腰辺りに抱き着く。

なんかほんわかして、邪な感情が霧散しちゃったよ。

「よっこいしょういち」

「しょーいちー」

リリーの脇に手を入れて持ち上げ、右腕でだっこする。

リリーの程よい重さが腕にかかって、なんかいい。だっこするのが癖になりそうだ。

「ず、ずるい」

ジーナがすごく悔しそうにリリーを見ている。

大方、リリーを取られたとか思ってたんだろうな。

「はあ」

溜め息を一つ吐く。

「ジーナ」

そして呼びかけた。

ジーナはその声に反応して視線をおっさんへと移し、リリーを抱き

しめるために屈めていた腰を上げた。

おっさんはそんなジーナへと近付き、あたかもリリーを渡すように見せかけておいて、空いてる左腕でジーナの腰を抱き寄せた。ついで軽く尻にタッチ。うむ、よし。

「なっ……」

言葉を失うとはこの事か、とばかりに絶句しジーナは顔を真っ赤にしていく。

あまり耐性はないのかもしれないな。それにしてもこの尻の弾力たまらん。

「は、離せ馬鹿っ」

「えー、やだー」

「子供かつ!？」

「リリーも三人の方がいいよねー?」

「うん」

この場合、子供を味方につけたおっさんの勝利と言えるだろう。

リリーの言葉ならジーナもおいそれとは抗えまい。

実際、ジーナも不服そうにしながらも甘んじておっさんの行為を受け入れてくれている。

ならもうちょっと大胆に……

軽いタッチ程度の動きだった左手が撫でる動きへとシフトする。

うん、ナイスフォーム!

「いたっ!」

不意にその左手に猛烈な痛みを感じた。
見てみればジーナの左手の指の爪がおっさんの手の甲へと刺さっていた。

「調子乗つてると殺す」

表情はすっごい爽やかな笑顔ではあるのだが、おっさんにしか聞こえない声でジーナは殺意をあらわにする。
はいはいおっさんが悪かったです。

「いいケツだったＺＥ。ジーナは安産型だな」

ジーナから離れた左手でサムズアップして見せる。
ほんつといい尻だった。

まだ少し物足りないけど概ね満足した。

「お前は少しも反省しないのか……」

「してるしてる。なんならお仕置きする？」

鞭とか蠟燭希望です。

三角木馬もあながち嫌いじゃない。

あとは鼻フックとかギャグボールとか？

うーん、ギャグボールはいいんだけど鼻フックは鼻毛が気になるからNGだわ。

「なんか喜んでるからお仕置きはしないぞ」

「放置プレイとはまた高度な……」

なるほど。ジーナは高みに至った女なのか。
と感心していたその時、視界の端になんだか気持ち悪いものが見え

てしまった。

「お前と話していると無駄に疲れる……」

「あ、ひどい。ところで……あいつどうすんの？」

おっさんの指が先ほど視界に入った気持ち悪い物体を指し示す。

「ハアハア、リリーたんカワイイ……マジ萌えだよー」

そこにいたのは未だに縄で縛られながら鼻息が荒くリリーを凝視するロリコンの姿があった。

とゆーか萌えの感性はこの世界にもあるのか!?

「あれは捨てていく」

スッパリはつきりとジーナが断言する。

まあ、確かにあれはなんだか危ないからね。

だが、一応おっさんの命の恩人なわけだし、捨てていくつてのはちよつとアレだ。

「せめて生かしてあげたいんだけど」

「まあ、お前の気持ちもわからなくはないが、なんかあの様子を見るとリリーに粘着しそうで嫌なのよ。ああ、リリー……あなたの愛らしさは早速人を狂わせるのね」

リリーの頬を撫でながら陶醉したようにジーナが言う。

それにリリーはくすぐったそうにしながらも屈託なく笑ってそれを受け入れていた。

「うーん……とりあえず本人の意見を聞いてみないか？」

「ああ、リリー可愛いわ」

聞いてねーな。

いいもん。勝手に行っちゃうからね。

「動くな馬鹿」

「はいはい、ごめんなさいよっと。なあ、ロリ……ザラ君、君はこれからどうしたい？」

ロリコンの前に立ったおっさんはロリコンへと問い掛ける。

それまではリリーを見つめて悦に浸って緩んでいたロリコンの表情がおっさんへと向けられると急に真面目になった。

「出来れば旦那達についていきたいです」

「リリーの間違いじゃないの？」

「正直、今は拮抗しかけてますけど、一応旦那という方が大きいですかね？」

なんの意味があつておっさんなんか……

はっ！？ まさか！！

「ロリコンの癖に男色でもあるの？　なんだか倒錯してんなー。つまりはバイセクシャルってことだろ。っーかお前はどんだけ重い十字架を背負って生まれてきたんだよ」

おっさん、体の大きさは大人だし精神的にもそこそこな年齢だけど、実際のこの体の年齢は一歳かそこらだもんな。

あいつのストライクゾーンに入っちゃったかー。

なんて鋭い嗅覚してんだ……

恐ろしい奴だ。

「いえ、尻の穴は好きですけど男のは嫌です。そうじゃなくて、旦那の男気に惚れたんですよ！」

「さらっと変態発言したぞこいつ……とゆうかこの豚に男気？ そんなのないだろ」

傷付くわー。

「クラブジーナの姐さん、もう忘れたんですか？ 旦那ってば体張って姐さんを守ったじゃないですか！」

「む、うう……」

そうだよ！

ザラ君もつと言ってやって！

「あとは、お姫様がここに入らないように扉の前に立ってここから先は通さないとか言っちゃったりして」

あ、逆に恥ずかしっ！

おっさんってばそんなこと言ってたっけ？

記憶にないなー。

「まさに男の中の男ですよ」

褒められ慣れてないからむず痒い。

ま、悪い気はしないけど？

「いい奴じゃないか。連れてってやろうよ」

「待て。あいつは人間で、私とリリーがドラゴンだってことを知ってるんだぞ？ 一万歩譲って殺さないのは構わないが、連れてくな

んて正気の沙汰じゃない。絶対無理」

「姐さん、お願いします。この通りです！」

「どの通りだよ！」

縄で縛られてなければ土下座でもしそうな勢いだが、生憎ザラの体は縄で縛られたままなので顔を下に向けるくらいしか出来なかった。

それから二人による必死の説得もジーナの心を動かすには至らない。なので最終兵器に出てもらうしかないようだ。

「リリーはどうした方がいいと思う？」

対ジーナの最終兵器であるリリーが味方につくならば一万の兵士を味方につけるよりも心強い。

もし、ジーナの味方につくならばその時は諦めよう。

おっさんはわりと切り替え早いタイプなのだ。

「リリーはね、みんないつしよがたのしいとおもっ！」

「……だって？」

どうやらリリーはこちらの味方についたようだ。

まあ、味方っつーかよくわかってないんだろうけどな。

「ぐっ、リリーをダシにして……でも私はリリーのために……」

悩んでるな。

まあ、ぶっちゃけドラゴンの親という立場からすればジーナの方が正しいのだろう。

おっさんもこいつが命の恩人でなければ提案を一蹴したのだろうが、命の恩人ってわりと重い。

「おかーさんだいじょーぶ？」

「……うん、大丈夫よ。おい、犬」

「おれのことですか？」

「それ以外に誰がいるのよ。いい？ 裏切ったら死よりも恐ろしい目に合わせると共に罪もない人間が死ぬと思いなさい」

やる。彼女はザラが裏切ったら宣言通りに罪もない人間を殺すつもりだ。

だって目が本気過ぎるもん。

「あと、豚。あんたは命に代えてもリリーを守ると誓いなさい。でなければ……」

「問題ないよ。リリーとジーナはおっさんが守るからね」

今更な話だ。

アイリス達と対峙した時にその覚悟は既に決めていたんだから。

「わ、私のことは別にどうでもいいから！ とにかくリリーだけはしっかり守りなさい」

「姐さん、もしかして照れてます？」

「だ、黙れ。とにかく、お前が一緒に行くことはとりあえず許可する。だが、こちらの提示する条件を全て呑んだ上で、それに抵触するならば即座にデスorダイするからなっ！」

「お、お手柔らかに……」

そうしてザラがおっさん達について来るための条件が決められた。

その条件とは

一、リリーと二人きりにはならない

二、リリーに手を出さない

三、誰にも正体がドラゴンであることを告げない

四、裏切らない

半分がリリーのことというのがなんともジーナらしい条件だと思うね。

おっさん、引っ越し前です（後書き）

世間ではもうクリスマスですね。

クリスマスネタをやりたいかったんですけど、話の流れ的に無理かな？
気が向いたら短編として活報にでも書きます。

おっさん、穴蔵から出る

ザラの縄を解いて自由にやると彼はひとしきり体をほぐすように動かす。

パキパキと骨が鳴り、そうとうな時間あの格好だったんだなと想像させられる。

「問題ない？」

「はい、ちよつと胃に違和感があるんですけど概ね良好みたいです」

それはきつと多分メイビー、ジーナの料理を食べたからだろうな。

「それよりここを出るなら一秒でも早く出ましょう。あのお姫様のことだから、金に物を言わせて傭兵集めてるに決まっています」

この住居は名残惜しいが、もうあの貧弱な胸の少女にはあまり逢いたくない。

そんなこんなで四人は住居から出て広間に行くことにした。

しかし、広間で見た光景はおっさんの頭に疑問符を浮かべてくださった。

確かジーナは広間に引越しの準備を済ませ、荷物を運び出したと言っていた。

当然、住居からなくなっていた荷物が置いてあると思うだろう。

しかし、広間には大きめのリュック一つが絨毯みたいなものの上にチヨコンと乗ってる姿しかない。

一体、他の荷物はどこに消えたと言っんだ。

「ジーナ、荷物はこれだけ？」

「見ればわかるだろ」

「いや、なんか、もつとなかったっけ？」

「あれで全部だ」

全部なんだ。

ま、おっさんの私物があつたわけじゃないから何を捨てたかはジーナの勝手だな。

そう、この身一つで転がり込んだおっさんの私物などありはしないのだ。あえて言うならタオルとかのここに来てから使わせてもらつてる日用品がおっさんの私物だな。

「んじゃ、とりあえず行こっか」

おっさんはそう言ってリュックへと近付くと、今までだっこしていたリリーを隣に降ろして、代わりにリュックを持ち上げようとした。こつゆうのを率先して持つのが男の嗜みだからね。

「ふぬっ」

だが、予想以上にそのリュックは重かった。

いや、予想以上と言うかむしろ重くて持ち上がらないレベルだ。

「……はあっ！」

【剛力のスキルが発動した】

なんとか持ち上がったな。

っーか重っ。

「何入ってんのこれ？」

「だから家の荷物」

荷物って……

なんか家の中のもののほとんどが入ってるみたいな重さだぞ。

それがこんなリュック一つに収まるわけが……

あ、そういやここって魔法とかある世界だったな。

だったらもう四次元ポケット的な物体が存在してもおかしくない。
つまりこいつは四次元リュックというわけだな。

「このリュック、見た目は普通だけど凄いね」

「見た目とゆーか、本当に普通のリュックだが？」

「え、これって許容限界がない四次元リュックでしょ？」

「違うぞ？ 中に入れる物をひとつひとつ私が魔法で小さくしただけだ。さすがに一人だと時間がかかったがな」

なんだ……四次元リュックじゃねえんだ。

だけど、ジーナの発言もそれはそれですげえ。

ポケットはなくても秘密道具的なものはあるんだねって感じた。

「とゆーかなんでお前荷物を持つてるんだ？」

「男ですから」

「いや、意味ないから置いておけ。とゆーかよく持てたな」

これって遠回しに褒められてるのかな？

だとすれば、すごく貴重な経験のような気がする。

おっさんは褒められて伸びる子です。

「はっはっは、おっさんには軽いくらいだよ」

「そうか。じゃ、さっさと下に置け」

「なんでさ」

引っ越すするんだから荷物持ちは必須だろ。

そんなクソ面倒な役を率先しておっさんがしてやろうというのに……
あ、そっか。おっさんが病み上がりだから気にかけてんだなー。

変なところで気を遣ってるというかなんというか……

なんだかんだで優しいんだよな。

「なんでって、それは……」

「ストップストップ！ わかってる。おっさんもジーナの気持ちは
わかってるよ。でも心配しないで。おっさんは大丈夫だから」

だから気を遣わないで、いつものように豚と罵りながらスパンキン
グするの（注：したことはありません）をおっさんはバッチコイ状態
だよ。

「……何言ってるんだコイツ」

「姐さん姐さん……もしかしてこれって魔動式浮遊絨毯ですか？」

「ああ」

「じゃあ、旦那はこれを知らないだけじゃないですかね？ これ、
最近作られた物ですし、値がそこそこ張りますから、貧乏そうな旦那
には手の届かない品でしょうし」

「そういえば田舎の生まれだったな……おい、豚。今から犬が説明
するからよく聞いておけ」

何事だい？

「おれですか？」

「私はリリーの相手をするから」

「はいはい、わかりました。んじゃ旦那いいですか？」

その後、ザラによってリュックの下に敷かれていた絨毯が魔動式浮遊絨毯と言われる乗り物で、ジーナはそれに乗って移動するつもりだったからリュックを下ろせと言っていたという説明を受けた。ネーミングに激しくツツコミたいが、それよりも……ただただ恥ずかしい。

人の話を聞かないにも程がある。勝手に相手の思いを決めつけて、それがさも正しいことのように振る舞う。

典型的なバカじゃないか。

そういや小学生の時の通信簿に毎回、他人の話を聞かないところが時折見受けられますって書かれてたな。

おっさん、どんまい。

前の世界での就活時の集団面接を思い出すんだ。あの頃はそこら辺なんとか出来たじゃないか！
もうあんまり覚えてねーけどなんとかなっていたじゃん。

よし、なんか元氣出た。

「この絨毯は免許が必要かな？ 自慢じゃないけどおっさんは大型特殊の免許も持ってるんだよねー」

トラクターとか乗ってたからね。

「いえ、魔動式自動滑走四輪とかと違って免許とかありません。魔動式浮遊絨毯に関しては多く普及してないのがありますが、魔動式自動滑走四輪と違って接触事故を起こす確率が低いんです。だからまだ免許は必要ないということになってます。まあ、暗黙の了解で魔動式自動滑走四輪の免許は持ってなきゃいけないみたいなのが

ありますけどね」

「なるほどね。ところで……名付けた奴誰？」

「そりゃあ……製作者じゃないですか？」

そっか……そうだよな。

たまたまだよな。

アラジンとかマリカーとかの名前なんて偶然だよな。

おっさん、ジーナ、リリー、ザラのそれぞれが絨毯の上に乗る。

絨毯の大きさは四人が横になっても少し余るくらいの大きさなので、わりとスペースはある。

だが、リリーは胡座をかいて座っているおっさんの上に座って、ここが自分の定位置よとばかりの態度だ。

そしてそれを悔しそうに見ているジーナと羨ましそうに見ているガラ。

「ふふん」

二人に勝ち誇ったような笑みを向けると、更に各々の感情を深くした。

「ねーねーおとーさん、これがとぶの？」

「そうみたいだね」

「リリー、おそらっではじめてみる！」

「そっか、お父さんはよく空ばっか見てた時期があるよ」

太陽の光を浴びるためにね。

それにしてもリリーは初めて外に出ることになるのか。
それなら……

「晴れてるといいな」

「うん」

リリーの頭を撫でる。

リリーが初めて見る空が晴れたったらどんなにいいことだろう。

今の時間はわからないが、それが日中であれ夜であれリリーの心には美しいものとして映ればいいな。

「起動するわよ」

ジーナが声をかける。

この絨毯は魔力石という魔力を溜め込む石を嵌め込むことで動かせるようになるらしい。

魔力石は内包する魔力が満タンの時は真っ白なのだが、魔力が失くなっていくとだんだん黒くなっていく物で、感じとしては白の絵の具に徐々に黒を足していったような変化が起こるみたいだ。

絨毯の操作は簡単で、その嵌め込んだ石に触れながら念じるだけ。猿でも出来ますって感じ。

今まで固く感じていた尻の感触が柔らかいものに変わる。

とゆーか沈むような錯覚が起きた。

なんか変なことしたら落ちそうで怖い。

おっさんは近くにある取っ手のようなものを片手で掴み、もう片方でリリーを抱き抱えるようにして固定する。

チャイルドシートなオッサンとでも呼んでもらおうか。

絨毯はどんどん上に上昇していき、ついには天井まできてしまった。そしてジーナが天井を見ながらそろそろと絨毯を横に移動させ、ある場所にて止まる。

「犬、天井の奴剥がして」

「わかりました」

そこにあつたのは広間にあつた隠し部屋に施してあつたような偽装。ザラがそれを取ると天井にポツカリと大きな穴が出来た。

「ここからはちょっとした迷路みたいな作りになってるのよね」

ジーナの言葉通り穴の中は迷路のように入り組んでおり、ジーナが着いたと言つまではかなり長い時間が経っていた。

横穴を抜け出た先にあつたのは透き通るような青空と大きな木だった。

「わー」

リリーが喜びながら空を見上げる。

だが、おっさんは木から目が離せない。

この大きさはきつとここの長老だろうか。

「さて、どちらに向かうか」

「ジーナ、あの木に近付いてくれない？」

「は？ まあ、いいが……」

おっさんの要望通りにジーナは大きな木の側に絨毯を寄せた。

「おつきいねー」

「うん、こんにちは」

木に挨拶する。

「一体誰に……」

「しーっ、少し見守ってもらえるかな？」

人差し指を鼻先に持っていくジェスチャーでジーナを制する。

「こんにちは」

今一度、挨拶をする。

すると……

『ちーす』

なんか軽いノリで木が挨拶を返してきた。

「あなたがここら一帯で一番偉い木ですか？」

『そっすね』

「挨拶が遅れました。ラルドと申します」

『名前はしらねーけど存在は知ってる。うちの連中が会話出来る奴が来たって騒いでたからな』

おっさん、その会話した奴を切り倒しちゃいましたけどね。
まあ、不可抗力だわな。

「えーと、ミズドリウムの森の大樹は知ってますか？」

『あのジジイっしょ。知ってんよ』

「じゃあ、その大樹が語った話は聞いてますか？」

一応、ザラの前なので言葉を濁して言った。
伝わるかな？

『ああ、あの新種の人がどうたらこうたらって奴っしょ。結構古くからいるのに馬鹿にされてっから必死なのはわかっけど、必死過ぎで逆に笑える』

「あれ、私のことです」

『え、マジで！？ 証拠は？』

「えーと、証拠になるかはわかりませんが、リリーちょっとごめんね」

リリーを退けて木に昆虫形態をして見せてやった。
インセクトフォーゼ

『へえ……まあ、八割くらいは信用出来る話だな』

「あとの二割はどこがダメでしたか？」

『珍しいスキルを持った人間とかの可能性もあつから』

確かにそうだな。

でも八割ってことはほぼ満足出来る結果だな。

「んじゃ、次に根っこワークで会議をする時は大樹を援護してやってくれませんか？」

『オッケー』

軽いな！。

でも大樹、おっさんやったよ！！

多分目的のタフアの森じゃねーけどあんたの力になったよ。

『それにしても最近物騒なんだよなー。武器持った人共がおれつちの領域テリトリーに入ってくつから』
『どこら辺りにいますか？』

木の呟きに心当たりがすぐに思い浮かんでしまったおっさんは木へと問いたです。

『お前から見て右の方にいっぱいいる。あ、でも数人がバラけてこそこそやつてみたいだ』

多分アイリスかアイリスから齎された情報に釣られた奴だろう。あるいはその両方か。
とにかくすぐに逃げた方が良さそうだ。

「誰もいない方向ってわかりますか？」

『お前から見て左斜め前の方角には今のところ誰もいないぞ。逃げるならそっから逃げる』

「ありがとうございます。ジーナ、アイリス達が来てるらしい。あつちの方角に向かえばとりあえず安全みたいだから行ってくれ」

教えてもらった方角へと指を差し、ジーナへと指示を出す。

「何を根拠に言ってるんだ」

「この木が教えてくれたからってのが根拠。おっさん前に言ったよね？ 木と話せるって」

「……わかった」

おっさんの言葉に素直に従い、ジーナが絨毯を動かす。

『アディオス！』

「本当にありがとうございました」

最後に木に対してもう一度お礼を言っておっさん達は去っていった。
今度改めてお礼しに来れたらいいなと思いつながら……

しかし、それは叶うことはなかった。

なぜならこの森はおっさん達が去ってから十二日目にアイリスの魔法によって焼失してしまうのだから……

おっさん、行き先を決める

眼下の木々がまばらになり、アイリス達からも大分離れたであろうところまで来た所で、一度絨毯を地上へと下ろした。

いわゆる小休止だ。

そこでジーナとザラは地図を広げて、これからどうするかの意見を交わしあっている。

おっさんかというとリリーを膝の上に乗せたままブーツと空を見上げていた。

リリーもおっさんに倣い同じように空を見上げている。

「おそろっておつきいね」

「そうだよ。目に映るもので多分一番大きいからね」

「そうなの？」

「そうだよ」

ほのぼのとした空間。

そよ風が吹き、体を優しく撫でていく。

ゆっくりとした時間の流れに身を任せているとついつい眠ってしまいそうだ。

「おい、いつまでそうしてるつもりだ？」

そこへジーナからお声がかかる。

「あ、ごめん。暇だったもんで」

「こっちはこれからの進路を話し合っているというのに……。お前

は参加しないで暇だからと言ってリリーを抱えたままボーツと上を見ただけか」

「いや、まあ、仕方ないよ。オッサンという存在は暇だと空を見上げる生き物だからね」

「なんだそれは……」

「いやいやマジな話、空を見上げてるオッサンの八割は暇な人だから。あとの二割は天気を読んでる人」

「そうなのー？」

おっさんの言葉をリリーが不思議そうにしながら聞き返す。

これは、教育として色々教えてあげなきゃな。

「そうそう、だから空を見上げているオッサンは構われると懐くからみだりに声をかけちゃいけません」

「そっかー」

「そしてここからが重要だ。上を見てるオッサンは暇だから危険はないけど、下を見てるオッサンは危険なんだよ」

「どゆこと？」

「下を見てるオッサンはね、およそ七割が人生に絶望しちゃってるから。そして、残りは全て蟻の行列の行く末を観察してる人だ。どっちにしろ絶対に話し掛けてはダメだからね」

下を向いてる人にはついつい何かあったのかな、とか落ち込んでるのかなみたいに思い、「大丈夫ですか？」と声をかけなくなる。

しかし、例えば蟻の観察をしている人の場合、相手はただ蟻の観察してるだけなのに大丈夫かと聞かれてしまい、無性に恥ずかしいことだろう。

声をかけた方に見れば、蟻の観察をしてたと言われてもなんか困る。

結果、両方モニヤモニヤする。

次に、人生に絶望してる人の場合だが、大丈夫かと聞かれても結果大丈夫じゃない。

よって下を見てるオッサンには声をかけてはいけないのだ。

「わかった」

うん、リリーは良い子だ。

「なんか、すっぱー極論ですね」

「別にどうでもいい。とゆーか知らない人に声をかけること自体が良くないだろ」

二人には不評だったようだ。

だが、これこそがおっさんの持論だ。

むしろ、おっさんはオッサンの立場で言ってるから一部脚色があってもあながち間違いじゃないんだぞ？

「それよりこれからどうするかだ。西の方と東の方に町があるのだが、とりあえずどちらかを目指すことにした」

「海が見える方で」

即決だ。

理由は魚が食いたい。

これただひとつであります。

あ、あとリリーにも海見せたいよね。

あわよくばジーナの水着姿も見れるかも……

「どっちも海はありませんよ」

テンション下がるなー。

じゃあ川か？

川魚と海魚を比べると海魚の方が一般的に思える。
だって、海は広いからな。

漁で獲れる量が違う。

“漁”で獲れる“量”……イケるか？

「おっさん、ダジャレ思いついたんだけど……」

「どうせくだらないからいらない」

一蹴された。

ダジャレってくだらないシャレって意味なのにあんまりだ……

「おとーさん、リリーがきいてあげるよ」

「リ、リリー……じゃあ、聞いてください。おっさんのセクハラダ
ジャレシリーズNo.1、クラベジーナの胸とメロンを比べちゃう
な」

さつき思いついのは違うけど、ずっと温めてたんだ。

シリーズは現在3までしかないけどね。

「すごいすごい」

手をパチパチ叩きながらリリーが褒めたたえてくれる。

おっさんも気分がいいです。

だが逆の気分になる方もいらっしゃるわけで……

「豚、その口をしばらく閉じていないとシバくわよ？」

「正直、本人目の前に言うとか自殺志願者かと疑うレベルのダジャ
レですよ。旦那、あなたのハートの強さ半端ないですね」

たかが冗句で殺されちゃうの？

あ、でも一回冗句言つたために殺されそうになった経験あつたな。あれがアイリスとの出会いのきっかけだったけ？

シャレのわからん奴が多い世界だな。

「そういえば、旦那って木と会話出来るってほんとの話なんですか？」

「ん」

ジーナの言い付けに従い、口を開きはしないが肯定の意を示すために頷いておく。

「へー、どんな感じなんですか？」

「んんん、んんー」

「なんて？」

「喋っていいぞ」

ジーナからのお許しがでた。

これで心置きなく語れるってなもんよ。

「わりと普通」

だが、語るべきものがないのが寂しいところだね。

「普通ってのは？」

「木もそれぞれ自我があつて個性もある。ついでに性感帯みたいなところもね。そうゆう意味で普通」

「へえ、そうなんですか」

そうなんです。

「本当に会話してるみたいなのに驚いた。ずっとお前の脳内設定だと思ってたからな……」

ジーナさん？

すっごい失礼な発言ですよ。

「おとーさんはおともだちがいっぱいなんだね」
「友達……」

一緒に酒飲んだわけじゃないんだけど……うん、そう言って差し支えないかもな。
特にミズドリウムの大樹は……ってそうだ！？

「ジーナ、おっさんタファンの森に行きたいんだけど？」
「タファンの森？」
「そこってエルフの連中のねぐらじゃないですか」
「なぜだ？」
「友達との約束だからね」

この世界に来たおっさんを導いてくれた存在でもある。

「でも、エルフって自分達が人の中で一番偉いつて思ってる鼻持ちならない奴らですよ？」

「そうなんだ。でも、約束は約束だし」

「……約束、か。わかったタファンの森に行こう」
「姐さん？」

「約束は守らなければいけないから……」

ジーナはおっさんではなく、リリーを見つめながら言う。

いや、リリーを通して誰かを見ている。そんな感じがした。

「わかりました。それなら西の町に行った方がいいですね」

「どんな町なんだ？」

「なんてことない町ですよ。そこそこ栄えてますけど、王都とかの大都市に比べれば一枚も二枚も劣ります」

へえー、王都。

つまりはここはなんとか王国ってことか。

ん？ でも確か大樹はプリなんちゃら公国って言ってなかったっけか？

その辺聞いてみよっと。

「王都ってさっき言ったけど、ここって王国なの？」

「今さら何を当たり前のことを聞いてるんですか？」

「知らないもんは知らないんだから仕方ないじゃん」

馬鹿にしゃがって。

こちらら異世界からきとんのじゃい！

まあ、実際そんなに頭良くねーけどな。

「二年前に戦争があつてな。それまではこちら一帯はプリオニ公国という歴史ある国だったんだが、公国の隣の小国であったオリヘン王国にその戦争で負けてしまい、併合されたんだ」

ジーナがわかりやすく説明してくれた。

それにしても戦争か。

どこにでもあるんだな。

「オリヘンには英雄がいますからね」

「英雄？」

「ああ、魔王を討伐した英雄だ」

勇者様って奴？

ファンタジーの定番だよな。

やっぱ勇者の鎧とか勇者の剣とか装備して、魔王の前に立った時「我に付けば世界の半分をやるう」と言われたんかな？

一度会って是非ともそこら辺りを聞いてみたいものだ。

「ま、王国の話や英雄の話はまた今度にしましょ。それよりも西の町の続きを……と言っても言うべきことは言った気がしますし、あとは……酒造が盛んで特に焼酎がうまいってくらいですかね」
「行こう。すぐ行こう。ああ、酒がおっさんを呼んでるよ」

おっさんの中で王国とか英雄の話がぶっ飛んだ。
酒。

なんて甘美な響きなんだ。

ジーナ達と過ごすようになってから意図せぬ禁酒を強いられていたおっさんとしては心が躍る。

とりあえずアルコールを摂取したいと体が疼いてきやがるぜ。

「さけってなーに？」

「大人にとつての命の水みたいなものだよ。リリーがもう少し大きくなったら本格的に教えてあげるよ」

まだ早い。

お酒は二十歳を過ぎてから。

ま、大体の奴らがその前に親戚とか親に飲まされるんだけどね。
おっさんもお酒ヴァージンは十四歳の時に親戚に奪われた。

以来、父親の目を盗んでは冷蔵庫に常備されてるビールをいただい

たものだ。

「さあ、ジーナ。移動しよう」

「なんかお前が喜んでるのを見てると行きたくなくなってくるな」

そんなサドつ気を今出さんでもいいのに……

いつもだったらご褒美として受け止めることができるが、今回はやはり純粋な苦行になってしまう。

「冗談だ。ちゃんと西の町に行くよ。あ、勘違いするなよ？ 別にお前を喜ばせるためではないからな。まあ、お前に約束を守らせるためについてお前の為ってなっちゃうけど……」

冗談は冗談っぽく言ってほしい。

マジのトーンの冗談とか恐ろしいな。

まあ、とにかく酒だ酒。

我慢してた分、たくさん飲もう。

再び絨毯が浮かび上がり、西へと進路をとって進む。
目指すは西の町だ。

ちなみにおっさんの所持金ゼロなり

おっさん、行き先を決める（後書き）

活動報告においてクリスマスネタの短編を掲載してるので、興味があればどうぞ

本編にはあんまり関係ありません。

おっさん、金を使う

程なくしておっさん達は町へと辿り着いた。

未だ上空に浮かぶ絨毯から町を見下ろせば町並みがよく見えた。木造や石を切り出して造ったような建物が整然と並び、その間を舗装された道が通っている。

幅の広い道では何やらゴーカートのような乗り物や馬などが走っており、そうでない狭い通りの両端には露店が軒を連ね、行き交う人達は喧騒に包まれている。

『ルタオ』

それがこの町の名前だ。

おっさんがルタオの町を珍しげに見ているのと同様にルタオの人々もおっさん達の乗る魔動式浮遊絨毯マジンを物珍しげに見上げていた。見られてる。おっさん、超見られてる。

とゆーことでこちらを見てる人達に手を振ってみる。

何人かは振り返してくれた。

旅人に優しいな。

どっかのアイリスにもこの優しさを分けてあげて欲しいよ。

ただ、動物の仮装してる人がそれなりにいるのはなぜだろう。今流行りの恰好なのだろうか。気になるので聞いてみた。

その答えは単純明快、なんてことのないもの。

つまりは……

「あれが獣人……」

「なんで知らないんですか。ついカクピンの旦那で獣人は一回見てるでしょ」

「かわいいマスクだと思ってたんだ……」

「いや、獣人なので生まれた時からあんな顔のはずですよ」

な、なんてこった……

おっさんの中で獣人とゆーのは、バニーガールみたいな頭に動物耳のある人間だと思ってたのにまんま獣な頭してんのか。

いや、待て。

おっさんが見たのは男の獣人だけだ。

種族的な違いで女はバニーガールかも知れない。

聞け、聞いてみるんだおっさん。

その扉を開くんだ。

と、その時おっさんの視界の端にスカートを履いた巨乳の姿がひっかかった。

スタイルのいい女性を見るといついつい見てしまうのは男性、首ごと視線を持つていつてその女性の姿を捉えた。

……顔が牛だった。

あれがホンマモンのホルスタイン。

おっさんはムツ〇ロウじゃないから、彼女の顔を見た瞬間に股間がED宣言してるよ。

まあ、でも顔さえ見なきゃ眼福もんだな。

あの乳には百点を付けてあげよう。

「降りるぞ」

ジーナはそう言うつと適度に拓けた場所に絨毯を着陸させた。

「着いた着いた」

「まずは宿を探そう。ほら、お前はこれを持って」

リュックを渡される。

相変わらず重いので、剛力のスキルを発動させながら背負い込む。あとに残った絨毯はジーナが丸めて口をボソボソと動かすとみるみる内に小さくなっていった。

あれが物体を小さくする魔法か。

なんでもありだな。

そしてジーナはボールペンくらいにまで小さくなったそれをリュックに括り付けた。

「おっさんは温泉付きの宿希望です」

「そんなもん高級旅館でもなきゃありませんよ」

「ならばそこに行こう。温泉は私も好きだからな」

ジーナの鶴の一声の決定で宿は温泉付きの高級旅館になった。

道行く人にそういう宿があるかどうかを聞いた上で、たどり着いたのは厳かな外観のまさに老舗と言うに相応しい木造の和風な建物。庭もまた和を感じる作りで、剪定された松っぽい木や小石が敷き詰められており、庭の真ん中には小さな池まである。

「いらつしやいませ。ご宿泊ですか？」

旅館の中に入ると、着物姿の女将らしき人物が出迎えてくるた。青い髪を女将スタイルに束ねあげた人間でうなじが覗いているのが

妙に色っペーな、オイ。

「ええ、この子と私の二人でお願い」

こんな美人な女将に酌をされながら飲む酒は格別だろうな。

……あれ？

「ちょ、ジーナ？ おっさんは？」

「おれもっす」

なんか普通に除外されちゃったよ？

女将に気を取られて危うくスルーするところだった。

「お前らは別口で泊まれ。どうせ払いは別なんだ」

「あ、そう言われればそうですね」

ザラはジーナの言葉に納得したように頷く。

しかし、おっさんはその言葉に戦慄したように固まることしか出来なかった。

なぜなら、おっさんは無一文だからね！

今まで金なんて使ったことないから金の存在を忘れてたよ。

村で暮らした頃は奢ってもらってばっかだったし、働きはしたが報酬は直接渡されるわけではなく、おっさんに日々の食事を出すことでいつの間にか話がついていた。

そう、おっさんはこの宿に泊まらない所か駄菓子すらも買えないのだ。

「……旦那？」

「どうした？」

「おとーさん、どうしたの？」

固まったまま動かないおっさんを訝しんでそれぞれが声をかけてくれる。

ここは正直に話すしかない。

「お金がありませんっ！」

ないもんはない。
だから

「貸して下さい」

土下座して頼む。

プライド？

そんなもんはない。

なぜならオッサンとは大体が半分は惨めで出来てる存在だからさ。

「ふう、さっきのは訂正だ。宿泊は三人で頼む。部屋は二つで」

「はい、かしこまりました」

ジーナの言葉に女将が傳く。

「ジ、ジーナ……」

「野宿させるわけにもいかないからな。それにお前がいないとリリーが寂しがる」

「あ、ああ……リリー、一緒に温泉に入ろっね」

「うん」

「是非ともおれも一緒にさせて下さい」

「……やっぱ止めとこう。リリーはお母さんと一緒に入りなさい」
「賢明だな。私もせっかくの温泉を赤く染めたくはない。それと、ほら」

ジーナがおっさんの手に何かを握らせる。

手の平を開いて見れば、そこにあるのは五枚の銀色のコイン。
なんかよくわからん人物の肖像が刻まれている。

「とりあえず貸した。まったく持ってないのも不便だろうからな」

「あ、あざーす」

「姐さん優しー」

「あげたんじゃなくて貸したんだ。利息は付けないから必ず返せ」

これが世のお父さん方が嫁さんにもらうお小遣いなるものか……
まあ、おっさんの場合は正確に言えば借金なんだがな。

とりあえず部屋に行き、荷物を置いてひとつ風呂入ったあと、おっさんは一人で町へと繰り出した。

なぜならこれから向かうのは大人の社交場。

お酒を飲みに行くからだ。

旅館においても夕食と一緒に飲めるのだろうか、早く飲みたいとゆーことで町に出たのだ。

ジーナはリリーさえいれば特に不満は出ないので面倒を見るのは任せてきた。

リリーは温泉が気に入ったらしく、早くも二回目をジーナに所望してたから大丈夫だろう。

ザラに関しては父親と一緒に男湯に入ってきた他の幼女に夢中で、

股間を押さえたので誘いもしなかった。

それにしても、浴場に入ったときの他の客のおっさんに対する視線の痛々しさったらないな。

なんかすっぱー奇異の視線で見てくるんだもん。

原因はわかってる。

それはおっさんの姿だ。

一見すれば鎧と兜を着用しているようにしか見えないおっさんの姿は「鎧脱いで来いよ」とでも言いたくなっただけに違いない。

実際、ザラには面と向かって言われたのだが、どうしようもないことなので仕方ない。

その場は体の一部だからと強引かつただの真実で押し通した。

ある意味不便な体である。

そうこうしている内に歓楽街へと辿り着いた。

提灯やら看板やらとにかくにもな酒の香りのする場所がそこかしこに存在する。

だが、残念なことにそこに書いてある文字は一部を除いて判読できない。

ここは異世界。

そういう事もある。

しかしなぜ

「なぜ漢字が存在する？」

判読できる一部とは漢字で書かれた部分。

酒や呑といったわかりやすい文字が存在するのだ。

しかし、確かに異世界のような外国のようなよくわからない文字もある。

それはハングルのようなアルファベットのようないギリシャ文字のよ

うなよくわからないもの。基本的に。や、□で構成されているものが多く見られる。

これらはおそらく日本語でいう平仮名とかの役割だと推測する。

まあ、大して興味もないし異郷の地においても文字が大体の意図がわかるのは僥倖という他ない。

とりあえずはどこかいいい店はないかと物色することにする。

通りをただブラブラ歩いているだけでもすごく楽しい。

頭が色んな動物の人がたくさんいるし、背が腰くらいまでしかないずんぐりむっくりな体形の髭モジャ男もそこそこいる。これがおそらくドワーフではないだろうか。

同じような体形の女性も存在しており、こちらは髭などは生えていないだけで少し背の低い人間の女性とあまり見分けがつかないようなものののだが、なぜか知らんがドワーフだと認識できる。この感覚は同じアジア人でも日本人と韓国・中国人の見分けがなんとなくつく感じと似ている。

驚きだったのは人の頭の部分に青魚を乗せたような人物が数歩歩くごとに頭に水をぶっかけていた光景だろうか。多分魚人だろう。道行く人を観察するだけでも時間を忘れてしまいそうだ。

だが、おっさんの目的はあくまで酒。
それ以外には……

と決意を固めて適当な店に入ろうとしたおっさんの瞳に映ったある文字が思考をせき止める。
その文字とは

『賭』

一際喧騒に包まれた豪華な佇まいのその建物に見つけた文字に心が

奪われる。

おそらくあそこは賭場。

どんな賭け事なのかは知らんが、とにかくギャンブルの場だ。

おっさんってばパチンコとか競馬大好きなのよー。

あの文字見たら行くしかなくない？

あ、でもジーナから借りた金をギャンブルに注ぎ込むのはさすがにアウトだろ。

でも行きたいなー……。

うし、行こう。

ギャンブルだろうとなんだろうと最終的には勝ってしまえばいい話。そうすりゃ持ち金も増やせてジーナへも速攻で金を返せる。

いいこと尽くしだ。

今日のおっさんに負けるビジョンは見えない。

むしろ一獲千金でウハウハしながらジーナやリリーにプレゼントを渡すビジョンが見えるぜい。

あと、風俗にも行きたいな。

温泉も良かったけど時間制限ありの高級なお風呂も大好きですから。

そんなこんなおっさんは意気揚々と店に突撃して行くのだった……

〈数十分後〉

「まさかこんなことになるとは……。いや、ある意味予定調和か……」

結果的に負けた。

完璧に負けた。

あそこで赤が出てれば……

おっさんが挑んだのはラスベガスでお馴染みのルーレットに似たゲーム。

細かいところは違ってもしれんが玉を転がして入った数字の所在を当てるということ自体は同じ。

堅実にいこうと色と偶数・奇数にのみ賭けたのだが、見事に外れた。手元にあるは自制心を効かせて残しておいた銀色の硬貨ただ一枚のみ。

ジーナから借りた金の五分の四を早くも失ったという結果である。

何してんだおっさんは……

一時間くらい前に戻って過去の自分を殴りたい。

ま、過去を悔やんでもどうにもならん。

貯金したとでも思っていていつかりベンジ決めて引き下ろしてやるぜ！

とりあえず当初の目的を果たそう。とは言っても店で飲むとどんくらかかるか皆目見当もつかないので、酒屋でも見つけてやっすい酒でも買って旅館でチビチビと飲むか。

酒屋を探してまた通りを歩く。

そしてある程度歩いたところで今度はまた違う店に視線を釘付けにされてしまった。

そこは女子供が喜びそうなファンシーな小物やら何やらが置いてある店。

その外からでも見えるようにディスプレイされたぬいぐるみに視線を固定された。

犬なのか猫なのか熊なのかよくわからんキャラクターのぬいぐるみだが、普通に可愛いんだよ。

リリーにプレゼントしてやったら喜ぶだろうな！。

でも、酒の金が……

悩んじゃうな！。

一時の悦楽か、リリーの喜ぶ顔か。
言葉にしてみれば簡単に決着がつきそうな物だが、酒が好きなおっさんとしては拮抗するものがある。

だが、ギャンブルで金を使って残りは酒。

随分なダメ人間だよな！。

よしわかった。

ぬいぐるみを買おうではないか。

リリーきつと喜ぶぞ！。

「すみません、ちょっと足りないみたいです」

「あ、そうですか……」

はい、問題発生。

ギャンブルで金を使い過ぎたせいでぬいぐるみを買えません。

つーか高いよ。

カジノで知ったけど、この銀硬貨一枚で一万円くらいの価値あんだぞ？

確かにこのぬいぐるみは下手なドワーフくらいにでかいけどさあ……

でも、銀硬貨二枚で買えるみたいだし、望みをかけてもう一度、ギャンブルってみるか？

いやいや、なんか負けそうな気がする。

他のを買うつて手もあるけど、第一印象から決めてたからな……

よし、だつたら金を稼ごうじゃないか。

でも真つ当に探してもすぐに金をもらえる仕事なんてないからな。
ここはストリートミュージシャン風に歌で稼ごう。

元の世界の名曲でも歌ってやれば、感動を巻き起こして一大ムーブメントになっちゃうかもね。

……あ、ダメだこれ。おっさん楽器弾けないもん。アカペラで勝負できるほど歌唱力に自信もないから却下だな。

んー……でもストリート系の思考は悪くないかもな。

あとは大道芸か。

でも特質すべき芸なんてないな。

強いと言えば昆虫形態インセクトフォーゼしてクワガタになれるくらい？
だけどそれがどうしたって言われたらそれでおしまいだな。

いつそのこと、当たり屋でもするか？

なんか楽に稼げそうな気が……そうだ！ それだよ。

これこそ趣味と実益を兼ねた格好な商売だ。

早速準備をしよう。

おっさんはこの店で揃えることができるものを購入し、ぬいぐるみに予約を入れると残りの材料を購入するために店の外へと飛び出した。

とゆーわけで準備が完了した。

おっさんが残り一枚の硬貨を使って購入したのは紙とペンと砂時計。
そしてグローブ。

これだけで十分である。

紙には通行人を使ってこう記してもらった。

『 女性限定 殴られ屋

砂時計の砂が落ちきるまで殴りたい放題

一回 お値段要相談 』

さあ、お仕事の時間だぜ

おっさん、金を使う（後書き）

主人公に関してはろくな金の使い道が思い浮かびませんでした。
つかこの世界、人種どころか文化もサラダボール状態。
あんまり深くは突っ込まんと言って下さい。

多分これが今年最後の投稿ですかね。
では、よいお年を！

おっさん、失敗する(前書き)

あけましておめでとーいぞいます。

おっさん、失敗する

年を取って中年くらいになった時に開かれる同窓会なんかでよく「仕事何してんの？」とか「仕事は順調か？」とか聞かれることがある。

常々思うのだが、その問いの答えが「いや、仕事してないから……」とか「リストラされそうなんだ……」みたいな言葉の後ろに点々が付きそうな暗いものだったらどう答えるつもりなのだろう。

ぶっちゃけ、「あの先生がぶちギレた時は全然怖くなくて逆に笑い出しそうになった」的な過去を懐かしんで楽しくお喋りするだけで十分じゃん。

人は触れられたくないことを誰かしら持つてるものなんだ。

そう、今のおっさんのように――

仕事をはじめてから早数時間が経とうとしていた。

それなのにだ！

それなのにも関わらず……

全っ然客こねーよ！

むしろこっち見てヒソヒソ知り合いみたいな人達と話し合ってるんですけど！

なに？ そんな変な目で見られるような商売なわけ？

女性の視線はまだいい。

まだいい、というかむしろもつとその視線で見てください。

だが野郎にそんな蔑まれた視線で見られるのは不愉快だ。

プラスマイナスで考えてマイナスに天秤が傾くくらいに不愉快だ。

「見てんじゃねーよ」

客が来ないイライラと不愉快な視線に晒されるイライラの相乗効果でおっさんの口から尖った言葉が発せられる。もちろん睨みつけるような視線もセットだ。

だが、所詮はおっさんから発せられたもの。

威厳とか凄味がないのか視線はマイナス方向に強まってしまった。

「くそつ、どいつもこいつも社会の底辺を見るような目をしやがって……同情するなら金をプリーズ」

場に静寂が訪れる。

どうやら盛大に外したようだ。

心なしが視線が変人を見るようなものから可哀相な人を見るようなものに変わった気がする。

「皆さん聞いてください。おっさん、子供にぬいぐるみを買ってあげたいんです。だからお客さんいらっしやいな」

「……なあ、あんた」

「なに？」

話し掛けてきたのは頭が鼠の男。

鼠と言ってもミッ〇ーみたいな可愛らしいもんじゃない、灰色の毛の生えたリアルな鼠だ。

「子供にプレゼントしたいなら真面目に職を探しなよ。こんな事で稼いだ金でプレゼントされても子供は喜ばないよ。あと、ちゃんとした服着な」

すっげー真面目なトーンで諭された。

え……もしかしておっさん、説教されてる？

それも鼠にか？
ちよつと悲しくなった。

「これやるからまずは身なりを整えな」

鼠はそう言つておっさんに銀硬貨を一枚渡すと颯爽と去つていった。
なぜだかその背中にキユンときた。
説教はウザかったけど、渋いなあいつ……

「兄ちゃん、俺からも銭別だ」

「オレも」

「ボクからも」

「あたしも……」

鼠男を皮切りに続々と寄附が募る。
早くも目標金額を超えてしまった。

でも、なんか納得いかない。

完全に施されてるじゃん。

これはありがたく貰つとくけど、この金でリリーのプレゼントは買えないだろ。

例えどんな恥辱に塗れてもおっさんが体を張つて稼いだ金で買った方が募金された金で買うよりいいに決まってる。

この募金はあるがたくお酒をかうのに使わせてもらおう。

とにかく、ここでは客が来そうにない。

ならば場所を移動するしかあるまい。

だが、どこに行けばいいのやら……

そうだ！ もつと卑猥な香りのする場所でやろう。

と言うことで、場所をストレスと欲望渦巻くピンク色の世界に移し

た。

そこは赤やピンクのネオンが煌めく大人の遊園地のある通り。

バラエティに富んだ卑猥な看板があちこちにあるよ。

なんだあの『棒険王』って……

どこを探索するんですか？

もしかしてさくらんぼを探しに登山したり、縮れた森から栗の木や水場でも探すんですか？

そんな探検なら是非ともしてみたいじゃないか！

此処こそがおっさんのあるべき場所ではなからうか。

「お兄さんちよつと寄っていきませんか？」

感慨に耽っていると、ピンク色の法被姿の男がどでかい看板を掲げて声をかけてくる。

この人はおそらく客引きだろう。

頭髪がちよつとばかりバーコード調だが、至ってノーマルな中年のオッサンである。

なんか親近感が湧くなー。

いや、おっさんは虫人になる前からフツサフツサだったけどね。

……さすがに言い過ぎた感があるな。でも白髪はあったけど禿げてはいなかったんだからね！

それにしても看板に書かれた『女医 □□』ってなんて書いてんだ？
気になるじゃねーか。

「間に合ってるんで……」

だが、おっさんは中年の客引きに対し丁寧な断りを入れる。
気にはなるが金がねーから致し方ない。

「そんなこと言わないでよ。若くて可愛い娘いるよ?」

「女性に過度の若さは求めてないんで……」

「なに、お兄さん熟女好き?」

若さを求めてないと熟女好きをイコールで結ばないで欲しい。

確かに嫌いではないけど、一番好きなゾーンは三十前後だからね。あの微妙な若さと熟した感じが入り混じったようなのが堪らん。

「うーん、うちは最高で三十五歳くらいまでの娘しかいないんだよねー。熟女好きじゃ、まだカウントされてないよね?」

ドストライクだよバカヤロー。

「でも熟女好きだったらうちの系列の『完熟 どすけべ倶楽部』にならお兄さんのお眼鏡に叶う娘がいるかもね」

猛烈にその倶楽部に入部したい……

「ちなみにあなたの持つてる看板のお店はどこに?」

「うん? ああ、それならあそこだよ」

客引きが指し示した先にあつたのは一見すれば隠れ家的なレストランでもしてそうな洋風の建物。

だが、でかかと『女医 □□』の看板が立てられているためにそんな勘違いをする奴はいない。

やっぱりあの店名が気になって仕方ない。

「ちなみにあれはなんて読むのかな?」

好奇心に抗えず聞いちゃいました。

「お、興味持っちゃった？ ま、漢字で書かれてちゃ読めないのも仕方ないね。あれはね、女医って読むんだ」

「いや、女医は読めるんだよ。その後が気になんの」

「え？ 漢字が読めてグレンツェ文字が読めないって変わってんねー。っーかそんな人初めて会ったよ」

ほー、あの文字はグレンツェ文字っていうのか。

「そんなに変わってる？」

「漢字はここ二、三年で爆発的に広まった文字だからほとんどの奴は読めるけど、読めない人はまだ珍しくない。でもグレンツェ文字はずっと昔から使われてるだろ。どっちも読めないなら文字の学習の必要のない田舎から来たってことで説明がつくからまだしも、漢字だけ読めるのは変だろ」

まあ、言われてみるとおかしいかな？

おっさんの見解を示すと普通の日本語は読めないのにギャル文字は読めるみたいなことかいな。

……なんか頭悪そうな女子高生にいそうだな。

うん、おかしくない。

たまたまこの客引きが初めて出会ったのがおっさんだったただけだ。そのうちこの客引きもおっさんのような存在に出会っはす。

「おっさんの勉強が偏ってただけだって。んで、なんて読むの？」

「ありゃあ、女医フルって読むんだ」

Joyfulと女医を掛けたんか。

すっごく楽しめそうな店名じゃないか。

「ちなみに女医フルのフルはフル○ンのフルね」
「なるほど、泌尿器科なわけね」

自分で言っというてなんだが、なにがなるほどなんだろう。

「ある意味間違っちゃいけませんよ」

どういう意味かは推して知るべしである。

「診察でカテーテル入れられたり、直腸検査されたりするんだろっ
な」

「それはオプションで別料金になりますね。で、どうですか？ 寄
つてきましょうよ」

別料金と聞いて、金がないことを再び思い出した。
つかりりーへのプレゼント買ったための仕事をするためにここに来
たんだった。

「金がないからまた今度ね」

「あ、そうですか」

金がないって言ったら客引きの野郎、速攻で別の奴の所に行きやが
った。

寂しいね！。

もう少し粘ってくれてもいいじゃんか。

まあいい。

おっさんはおっさんで商売を始めさせてもらおう。

「殴られ屋です。溜まったストレスを人を殴ることで解消。鬱憤

の溜まった女性は寄ってらっしゃい見てらっしゃい。時間は砂時計の砂が落ちきるまで。値段は応相談」

声を張り上げて宣伝する。

その声量はそこいらに徘徊する客引きなんかには負けやしない。現に道行く人達は皆おっさんに注目している。

「ちよっとちよっと、お兄さん！いきなり何？営業妨害だよ！」

なんかさっきの客引きが来やがった。

そちらこそ営業妨害だと言いたい。

「おっさん、商売はじめたんだ」

「商売はじめるのは結構だけど別のところでやってよ」

邪魔者扱いか。

確かにおっさんの存在は彼らにとっては邪魔かもしれない。だが、譲れないこともある。

「おっさんも切実なんだよ……」

「はつきり言うけど、邪魔なんだよ」

「役人でもないくせに偉そうだな」

「なんだその態度は？ここは俺らのテリトリーだって言ってるだけだ。商売すんなら余所でやれ」

急に高圧的になりやがった。

ドスの効いた声がえらく様になってるじゃないか。

ま、ジーナの方が怖いからおっさんには全然効果はないけどね。

「よし、そこまで言うならこれをやるから黙認してくれ」

そう言っておっさんは客引きの中年に先ほど貰った金から一部を取り出して握らせる。

どうせ使い道は酒でしかない金なのだから惜しくはない。

「……賄賂かよ」

「そうです。賄賂です」

「あんた、汚い大人だなー」

「争いを回避するための紳士的な対応でしょうが。で、ついでに協力してくれない？」

さらに金を握らせる。

「あん？ 協力って？」

「知り合いの女の子におっさんのこと紹介してよ」

「……まあ、もう少しで店に勤めてる早番の娘も上がる時間だから声掛けてやってもいいが、これじゃ足りねえな」

もっと寄越せと催促してくる客引きの男。

結構がめついな。

ま、いいけどさ。

そう思つて更に金を握らせた。

「へへ、毎度」

「ちゃんとやれよ」

「わかつてるよ」

ホントにわかつてんのかねー？

つて今気付いたけど、あの金で女医フルに行つとけば良かった!？

なにはともあれ、おっさんの仕事に対してのパートナーが出来まし
た。

おっさん、失敗する（後書き）

新年一発目の内容がこんなですいません。

次話は本日の夜か明日辺りに投稿する予定です。

おっさん、更に失敗する（前書き）

タグにもあるのでご了承済みとは思いますが、あえて警告を……
この話には『変態』が含まれております。ご注意ください。

おっさん、更に失敗する

あの客引きに助力を求めたのは正解と言えるだろう。
なぜならば

「あのー、ポロトさんに紹介されて来たんですけど……」

早速客が来たからだ。

最初の客は顔が猫、体は女体なお方。

紛れもなく女性である。

ポロトっていうのはおそらくあの客引きで間違いない。

だっておっさんを紹介してくれる人なんてあいつしかいないからね。
うまくやってくれたみたいだ。

「いらつしゃいませー。どうも殴られ屋です。どうしたの、辛いことあったの？」

「はいにや、今日のお客さんがすごい脂ぎっててそのくせに××しろって言うてきて……もうホントにムカついたのにや！」

ああ、そいつは辛い。

ムカつくのもしょうがない。

そんなこと要求するのは最早嫌がらせレベルだね。

とゆうか語尾ににやとか付くと癒されるな。これで顔がリアル猫じゃなかったらなあ……

「よし、ならばその鬱憤をおっさんにぶつけないさ。はい、このグローブ着けて。それで砂時計ひっくり返したらスタートね」
「はいにや」

猫女がグローブを装着したのを確認して砂時計をひっくり返す。
さあ、初仕事の時間だ。

「いくにゃ！ ていつ！」

「おうっ」

なかなかいいパンチ持つてるじゃねーか。
顎にクリーンヒットだ。

「にゃにゃにゃにゃにゃーっ！」

「ぬ、ぬ、ぬ、ぬ、ぬ」

連続パンチとは恐れ入った。
中々速いな。

「ふにゃっ！」

「お」

強烈なボディフックが鳩尾に入る。
こいつは効いた。

「……あの、ちょっとタイムお願いしますにゃ」

「どうした、もっと来いよ！」

「いえ、あの……つまらないにゃ」

猫女は凄く冷めた声で意外なことを述べた。

「どこが？」

当然、彼女の態度が急変したことは疑問である。
それに意見を参考にして悪い所を改善していくのも仕事の一つである。

「えつと……」

「言い淀むことはないから、忌憚なき意見を言ってくれ」

「そうですね、じゃあ遠慮なく言わせてもらうにや。まず……グローブが安物すぎなのかしんないけど手が痛い。あと、あんたのリアクションが薄くて全然スカツとしない。とりあえず、兜と鎧は脱ぎなさいよ」

語尾のにやはどこにいったんだ猫女っ。

まあ、それはこの際いい。

問題は猫女からあげられた意見をどうするかだ。

とりあえず格好はどうにもならない。おっさんだつてキャストオフ出来るならしたい。

グローブに関して金がなかったんだから仕方ないよね。

どうこう出来る問題じゃない。

では、おっさんのリアクションが薄いつてのはどうだろうか。

もちろん痛みはあるからおっさんも痛がつたりとかそれなりのリアクションはしてる。

でも、衝撃無効のスキルのせいで殴られても微動だにしない。

要は発声する丸太人形を殴ってるようなもんか。

確かにこれじゃ面白くないかしんない。

ならば演技するか？

でも、殴られたタイミングに合わせてのけ反ったりするには功夫クンフが足りない。

付け焼き刃じゃどうこうなるもんでもあるまい。

何か妙案はないものか……

「そうだ！ そうだよ……顔と腹を殴っても面白くないならケツを攻撃すればいいじゃない」

なんて名案なんだ！

おっさんはもしかしたら天才じゃないのか？

おっさんの身体で最も柔らかい部位の一つに数えられるもの、それが尻。

しかも尻ならば攻撃されてのけ反るなどのリアクションが薄くてもそんなに不自然じゃない。

「いや、お尻をぶつ叩くとかそういうプレイはなしでお願いしますにや。どうしてもお尻を叩いてして欲しかったらお店に来て下さいにや」

にやが戻った。

つかプレイじゃないし。

ただの天才的発想なだけだし。

「ケツをペンペンされるプレイならおっさんもお金払ってやらうよ。だけどこれは仕事。おっさんが提案するのは尻を気の向くまま感情のままとにかく好きなように蹴りなさいってこと。あ、でも鞭とかあった方がいいのかな？」

アイディアが次々と湧き出てくる。

覚醒したな……

おっさん、覚醒しちゃったよ。

「そういう激しいプレイがしたいならちよつと裏に行つたとこにハイドSMのお店があるにや」

「だからプレイじゃないっての。さっきも言つたようにおっさんも

本気で責められたい時はツボのわかってる女王様のいるお店に行くから！ だけど世の中にはそういう気質を表に出せないで溜め込んでじやう女性がいる。おっさんはそういう女性の心を満たすためにこの仕事をはじめたんだ」

取って付けた様な言葉。

実際はただ女の人に殴られたついでにお金も稼げて一挙両得だと思つたに過ぎない。

「あなたの気持ちはわかつたにや」

だが、口先だけの言葉を猫女は信じてくれたようだ。

「ならおっさん、四つん這いになってケツを突き出すから思いっきりやってくれ」

砂時計の砂が落ちきつたのを確認し、ひっくり返す。

さあ、今度こそ初仕事だ。

「てりやっ」

「はうっ」

全力の蹴りがおっさんのケツに叩き込まれる。

衝撃は露ほどないが、痛みは本物。

その痛みを受けて背中が自然とのけ反る。

こいつはいい。

おっさんのリアクションも意図せずして完璧ではなかるうか。

その後も時間制限いっぱいまでおっさんの尻を蹴り、踏み付けた猫女は満足した様子で僅かばかりの金を払って去っていった。

ありがとう猫女。

君のおかげでおっさんは一つ上のステージに到達したよ。

その後にも客は疎らではあるが訪れてくれて、彼女達の満足度に応じた金銭を払ってくれた。

おっさんも調子に乗って近くのおもちゃ屋で鞭を購入してしまった。鞭の形状は乗馬鞭といわれる馬を追い立てる際に使用される物で、打撃が重いことで有名である。

これを使用した際の客の反応は何か目覚めたように頬を上気させ、一心不乱に鞭を打ってくれるという大変満足した……じゃなくて、満足してくれた様子だった。

延べ十数人を相手にした結果、目標金額に届いた頃には日はとつぷりと暮れてしまっていた。

「そろそろ店じまいするか」

結構痛め付けられたというのにおっさんはまだまだ元気なのだが、あまり遅くなつては飯を食いつばぐれそうだし、何よりリリーが生まれてからこれだけ長い時間離れてることもなかったので心配だ。

「あの、まだやってますか？」

そんなことを考えながら、店じまいの支度をしていると声をかけられた。

そちらを見てみれば、長い黒髪の幸薄そうな人間の女性がおっさんをみつめていた。

その女性は幸が薄そうなだけでなく身体付きも色々薄かったが、仕事に関しては好みだなんだと選んでる余裕などないために訪れた女性は貧乳だろうとロリ顔だろうと等しく接してきた。彼女でも何一つ問題はない。

「滑り込みセーフ。ちょうど店じまいしようと思ってたんだけどね」「すいません……」

「いやいや、セーフだから問題ないですよ。本日最後のお客さんだね。よし、じゃあこの鞭でおっさんをぶつかおもつくそ蹴ってね。さあ、来い」

砂時計をひっくり返して四つん這いになったところで気合いを込めて言う。

「い、いきますよ……」

女性が怖ず怖ずと出陣前の声掛けをしてくる。声が弱々しいな。こりゃ、期待できないかもね。

「はあっ！」

「○□×ー！」

だが、おっさんは身体を貫いた今までにない痛みに悶え苦しむことになった。

衝撃無効なはずなのに内臓に衝撃がきたよ！

何が起ったのか説明しよう。

女性が蹴ったのはおっさんの尻の穴。

いわゆるア○ルだ。

しかも、トゥーキック（つま先で蹴ること）で的確におっさんの尻

の割れ目の中にある秘境に当ててきた。

今までのお客さんだつてそこら辺は配慮して尻の面に対する攻撃しかしてこなかったのに……

さすがにこれを快樂へと変換するのは時間がかかる。

「だ、大丈夫ですか？」

「も、モーマンタイ無問題。でも、出来れば回復するまでは違つとこ蹴つて」

「は、はい」

深呼吸をして呼吸を整える。

とりあえず肛門活約筋を引き締めて第二撃に備えよう。

「バッチコイ」

「い、いきますよー」

この弱々しい声に騙されてはいけない。

腹に力を込めてケツも固くした。

これで準備はオツケーだ。

いつでも来やがれ。

「えいつ」

繰り出される女性の蹴り。

その蹴りは先ほどとコースは同じ。

しかし、その軌道は少しだけ下方で――

「ぬおっ」

それつきり言葉を発することが出来なくなる。

この女、アマ結婚式の挨拶でもよく使われる大切な袋の一つであるキャ

ンタマ袋を蹴りやがった。

しかも相変わらずのトゥーキック。

あえてどんな痛みかは語らないが、とりあえず下っ腹が痛い。

【ラルドは打撃耐性のスキルを得た】

天の声うるせーよ。

っーかおせーよ。

もうおっさんのキャンタマは手遅れだよ。

あ、やばい……意識が遠のいてきた……

「……ません……ですか」

女性が何かしらおっさんに声をかけている。

だが、その声を理解することなくおっさんは意識を失ってしまった。

明るい光によって意識を覚醒され、目を覚ますとおっさんはどこかの部屋のベッドに寝ていた。

ピンクを基調としたあまり広くない部屋。

置かれた小物やらで判断するならば一人暮らしの女性の部屋っぽい。

一体、何がどうなったのだろうか。

窓からこぼれる光から判断すると少なくとも結構な時間が経っている。

意識を失う前のことは臆げだが覚えている。

おっさんはキャンタマを蹴られて気を失ったのだ。

「うん、二個ある」

触って確かめた結果、ちゃんとあった。

数が変わってなくて何よりである。

とゆーか、不思議とすでに痛みはないようだ。

「あ、起きられましたか？」

そこへ登場したのはあのトゥーキックの女。

ちょっとだけ心の中のおっさんが怯えております。

「昨夜はすいませんでした。わたし、人を蹴ったことってないもので加減がわからなくて……」

「加減云々じゃなくて君の場合、蹴り方に問題があるんだけどね。ゴールデンボールを包みこんだおいなりさんは百戦錬磨の格闘家でもそうは鍛えられない部位だから」

ま、そういうこともあるだろうし、狙ってやったんじゃないんなら特に怒る気はない。

むしろ、商売として尻を蹴らせたおっさんの方に問題がある。

「あの、お詫びの品としてなにか差し上げたいのですけど……」

「お構いなく。トゥーキックを禁止にできなかったこちらの落ち度ですから」

「いいえ、無事だったとはいえ、もう少しで子供が作れない身体にしてしまつところだったんですから遠慮なさらず」

参ったなー。

なんか恐縮しちゃうよ。

ん？　なんで無事だったと断言したんだ？
まさか！

「ねえ、もしかしておっさんのキャンタマ見た？」

「容態が気になったもので……」

ちよつと恥ずかしいね。

ま、でもあの界限にいておっさんに声をかけてきたんだからそういうお仕事の人だろう。

ならば必要以上に恥ずかしがることはない。いや、ここはむしろ……

「おっさんのどうだった？」

社交辞令としてこう聞くのが正しい。

「あの、平常状態だったので何とも言えません……ごめんなさい」

なるほどね。

まあ、彼女のボディに意識を失おうとおっさんの股間のカブトムシがヘラクレスるなんてことはまずないだろうから仕方ないね。
などとちよつと失礼なことを考えているとおっさんの腹が空腹を告げる鐘を鳴らした。

「あ、気がつかなくてごめんなさい。朝食用意したので持ってきてますね」

そう言つて女性はキッチンの方へと向かつていった。

せっかく作ってくれたんだし、ご相伴にあずかりましょうかね。

ベッドから起き上がって背伸びをひとつ。

窓の外を見てみると晴れ渡った青い空が見えた。

「いい天気だな」

のんきにもそんな言葉が口から漏れる。

だが、おっさんは重要なことを忘れていた。

いや、もしかしたら意識的に忘れようと現実逃避していたのかもしれない。

だが、現実はおっさんを逃がすなんて真似はしないのだ。

コンコンと扉をノックする音が聞こえてくる。

それに女性がはいと答えて扉に向かう音も――

おっさんは今、死に神の鎌を首に突き付けられているに等しい状態だが、そんなことにすらおっさんは気付けない。いや、気付かないようにしていた。

だが、ここで無理矢理にでも思い出しておけば誤魔化しようもあつただろう。

なにを思い出すべきか。

それは、おっさんが宿に部屋をとっていたということ。

そしておっさんには娘がおり、未だ長い時間を離れるなんて出来ないということ。

最後に最も重要なことは――

「あの、お父さん居ますかって訪ねてきた人達がいるんですけど……」

その娘がなんでかわからんが、おっさんの居場所を見つけ出す特技
を持っていることだった。

おっさん、更に失敗する（後書き）

タグに新たに『下ネタ注意』を付けました。

おっさん、誤解されやすい性質です

若干の冷や汗をかきながら玄関の扉を開くと、そこには満面の笑みを浮かべながらおっさんに抱きつこうとするリリーとそれをまったくの無表情で羽交い締めにして阻止するジーナ。苦笑いをしてるザラの三人がいた。

「おとーさん！」

「あ、おはようリリー」

朝の挨拶といえはやっぱりおはようって言うのが合っているだろう。だが、この雰囲気にはあまりそぐわないかもしれない。

「おかーさんはなしてー」

「……ここだなにをしてるんだお前は」

ジーナがリリーの言葉を無視して問いかけてくる。

あのジーナがリリーの言葉をスルーしてるのだ。

なんだか浮気を責められた時みたいないな空気が場に漂っている。

だが、ジーナの問いに対する答えは考えるまでもなく『何もしてない』だ。

強いて言えばこれから飯を食わせてもらうつくらいであとは寝てただけだし。

いつそ本当のことを言った方が良いだろう。

「寝てた」

正直に、あくまでも真実を言っただけなのだがジーナの顔が無表情

から怒りに変わっていく。

「人が好意で宿に部屋をとってやったというのに、町で適当な女をひっかけて朝までしっぽりと合体運動だと？」

「言ってる言ってるない」

どんな曲解だよ……

いや、おっさんの言葉が足りないのか。

「寝るってそっちの意味じゃないよ。むしろ気絶してたから」

「気絶するほど何度もイッただと……」

「なにそのファンタジスタな思考」

おっさん、そんな誤解を生むような発言してないよね？

「だから……」

「もういい、もう喋るな！ リリーの教育に悪い！ R18指定のダメ男の発言はまだこの子には早い」

まったく話を聞いてくれない。

こつゆう時どうすればいいんだろうか。

「とにかくしばらく視界に入ってくるな。リリー、行く」

「あ、おとーさん……」

そのままジーナはリリーを連れて行ってしまった。

その光景は実家に帰る妻と子供の図でそれを見てるおっさんの姿は実家に帰ることに対して反対したけど最後には許容して妻子を寂しそうに見送る夫のようだった。

「あくまでもしばらくの間だけの話ですよ旦那」

ポンと肩に手を置き、おっさんを慰めるかのようにザラが言う。

「なんであんなに怒ってんの？」

「いや、だって、旦那全然帰ってこないんだから普通心配するでしょ？ そりゃあ、おれや姐さんは特に気にしてなかったけどリリーたんがお父さんはいつ帰ってくるの？ って何度も聞いてくるもんでしたから……」

ザラによって昨夜のジーナ達の説明が行われる。

何度もリリーがおっさんがいつ帰ってくるのか聞いてくるので、仕方なくザラが町で搜索に走った。おっさんの容姿は結構目立つので簡単なミッションかに思えたし、足跡も簡単に掴めたのだがある場所以降の足取りがわからなくなってしまった。

それがおっさんの気絶以後のことだ。

そこから夜通し探したがどうにも探せずに宿に戻って報告したところ「おとーさんあっちにいるよ」とリリーが指差した方向に進んできた結果、ここにたどり着いたらしい。

「で、結局旦那はどういった経緯の末にここに来たんですか？」

「要約すると、リリーにプレゼントを買おうとしたけれどギャンブルで金を摩って足りないから、仕事に従事したら悪魔の一撃をもらって気絶して、起きたらここだった」

「まあ、なんか変な仕事してたのは聞き込みしたんでわかってましたけど、何故姐さんに最初からそう言わないんですか？」

「プレゼントってのはサプライズが大切なんだよ。あと、ギャンブルのくだりで怒られそうな気がして……」

「後者が本音っぽいですね。ま、おれの方からフォロワー入れときま

すから機を見て合流して下さい」

そう言っただけはジーナ達の跡を追っていった。

頼むぞザラ。

フォローの際はギャンブルの辺りを誤魔化してくれい。

「あ、あの……ごめんなさい。わたしのせいで奥さんに誤解を与えてしまったようで……」

トウキツクの女性が暗い顔をしながら謝罪する。

まあ、二割くらいは彼女のせいかもしれないがあとの八割はおっさん自身のせいだ。

彼女を責めることなど出来ない。

「嫉妬されるなんて愛されてるんですね……」

「いや、嫉妬なんてしてないと思う。ジーナは親バカだから本当に子供の教育に悪いって考えてるんだよ。だってジーナとおっさんは夫婦でもなければ恋人でもないんだから」

「そうですねですか？ でもお二人にはお子さんが……なんか複雑なんですわねえ」

複雑と言えば複雑なのかな。

まあ、わりと単純だったりもするけど事情を話してやるほど親しい間柄でもないので説明する義務はない。

「そんなことより、飯食わせてくれない？ 腹減っちゃった」

「え？ あ、はい。用意は出来てますけど……大丈夫なんですか？」
「何が？ 大丈夫だよ」

どうせしばらくは帰れないだろうし。
ザラのフォローに期待だ。

その後、彼女の用意してくれたパンやスープ、オムレツなどの食事を食べながら、互いに軽い自己紹介なんぞをした。
いつまでもトウキックの女性って認識するのは例え心の中だけでも失礼だろうからね。

彼女の名前はスピカ。

おっさんが予想した通り風俗のお店に勤めてる娘で、おっさんのことはケツ殴り商売を利用したという友達に聞いたらしい。

誰かと思つてよくよく聞いてみたら最初の猫女のことだった。

あの人、改善に手を貸してくれただけでなく宣伝もしてくれたんだな。

今度会つたら拝んどこう。

そんなことを考えていると、扉がドンドンと叩かれた。

「ん？ ザラの奴かな？」

早くもフォローに失敗したのだろうか。

「あ、いえ、多分違います。すみません、ちょっと隠れて下さい」
なぜに？

家主の言葉だから従いはするけどさあ……なんか間男っぽいな。

「居るんだろ？ 早く開けるよ」

扉の外から荒っぽい男の声が聞こえてきた。

「う、ごめんなさい。今開けます」

おっさんをクローゼットに閉じ込めてスピカが玄関へと向かう。
ガチャリとスピカが扉を開けると何者かが部屋の中に入ってくる気配がする。

「スピカ、金くれ」

「え、この前渡したばかりだよ？」

「うつせーな！ いいから寄越せ」

クローゼットから光が漏れている。

どうやら覗けそうだ。

そつと隙間から様子を伺うことにした。

部屋にいたのは金髪にピアスをしたそこそこなイケメン。

ただどことなくチャラついているように思える。

イケメンは床に置いてあるバッグを勝手に漁りだし、そこからスピカの財布らしきものを取り出して勝手に中身を取り出していた。

「ちつ、しけてんな……」

「ごめんなさい」

スピカはなにか謝るようなことをしたのだろうか。

とゆうかおっさんは今、完全な間男状態になってしまってるんですけど……

「ねえ、本当にそのお金はハルンの夢のために使ってるんだよね？」

「何、当たり前のこと言ってるんだよ。オレが信用出来ないのか？」

「うつん、信用してるよ」

「なら、余計な心配してんじゃねえよ。ん？ 誰かいたのか？」

そこでハルンという男がテーブルに目を止める。

そこにはさっきまで食事をしていたためにおっさんの使っていた食器などがある。

スピカの分も含めると明らかに誰かがいたことは明白だ。

「こ、これは……」

「誰かいるのか？ おい、誰だ！」

ハルンが部屋をキョロキョロとしながら怒鳴りつける。

誰かが隠れてると推測したのだろう。

正解です。

「この部屋にはそう隠れる場所はねえ……」

そう言っただけでハルンが真つすぐに向かってきたのはおっさんのいるクローゼット。

一発かよ。勘が鋭いな。

「だ、だめっ」

「ふーん、ここか。人の女に手を出すぞ野郎が居るのはっ！」

やましいことなんか何もしてないのになあ……

でも見つかるのは面倒な気がする。

よし、おっさんはここにある服の一着だ。なりきれ、なりきるんだ。

【認識偽装のスキルが発動した】

天の声が聞こえたのとハルンがクローゼットを開けたのはほぼ同時

だった。

「あれ、いねえ」

「え？」

目の前におっさんがいるというのにハルンはなんか拍子抜けのような顔をしている。

その後ろではスピカも不思議そうな顔をしていた。
なんだか知らないが助かったみたいだ。

「とにかく、おめえ浮気しただろ！」

「してない」

「嘘つくんじゃないよええよ！」

「嘘じゃない、嘘じゃないから怒らないですよ……」

「胸糞わりい……帰る」

そう言っただけでハルンは部屋から出て行ってしまった。

「彼氏？」

「ふあっ！ え？ ラルドさん？ ど、どこにいったんですか？」

スピカに声をかけるとビクツとした後、視線をしっかりとおっさんへと向ける。

どうやらちゃんと見えているようだ。

「どこっでずっと居ただけだね」

「そうなんですか……」

「で、彼氏？」

「はい」

「ふーん、ヒモ？」

確認するまでもないけどね。

「ち、違います。彼はその、お店を開くためにお金が必要なだけで……」

つまりはヒモだ。

とゆーかなんだその十中八九、店を開かなそうな王道の金をせびる理由は……

「ダメされてるんじゃないの？」

「そんなこと……ありません」

男を信じてるといふか、男を信じたいという声音でスピカは言う。彼女自身もダメされてるのではないかという疑いを持つてるのだろう。

まあ、他人であるおっさんが深く関わっていい問題ではないのかもしれない。

「お互い大変だね」

「……はい」

笑いかけておっさんが言つてやると、スピカも微笑みながら頷いた。

「あ、そうだ。ラルドさんに渡さなくてはいけないものがありました」

スピカは部屋の隅からなにかを持ってきておっさんに渡す。それは鞭と砂時計、そしてお金の入った袋。

「ハルンに取られないように咄嗟に隠したんです。お金、ちゃんと全部あるか確認して下さい」

なんと、これはおっさんが稼いだ金か。

本当なら信用してるって意味を込めて数えずに受け取った方がカッコイイのだろうが、おっさんこうゆうの気になっちゃうタイプなんだよね。

とゆるわけでサクッと数えてみたのだが、どう数えても多い。

「増えてるんだけど……」

「あ、それはわたしの分の代金も入れたからだと思います」

スピカはそう言うが、増えた分は他の客の最高支払い金額の倍以上だ。

これじゃ、多過ぎるな。

「そっか、毎度。んじゃ、これ宿泊代と朝食代ね」

増えた分をそのままスピカに手渡す。

「こんなのいただけませんよ」

「いいからいいからー。んじゃ、世話になったね」

金を突き返すスピカを置き去りにしておっさんはそのままスピカの部屋を出た。

さて、ジーナの怒りが収まるまでどこに行こっかなー。

やっぱカジノ？

あ、でも今度は金がなくなる前にリリーへのプレゼント買っておこつと。

おっさん、誤解されやすい性質です（後書き）

ただの下ネタから脱却出来ましたよね？
次話でルタオの町編は終了予定です。

おっさん、決める？

その後、リリーへのプレゼントであるぬいぐるみとついでにジーナへも大した額ではないがプレゼントを用意したために、カップ酒のような器に入っている透明な甘い酒を一つ買ったら金がなくなってしまった。

今思えばスピカに突き返した金は惜しかった。

おっさんってば昔っから金遣いに対しての計画性がないんだよね。

お年玉とか貰ってもパーツと使っちゃう。

そして冬休み明けにお年玉の話題になった時に友人の中に必ず一人はいる貯金派の奴を尊敬と疑問の瞳で見つめるのさ。

テキトーに歩き回って見つけた公園のベンチに座り、横にぬいぐるみを置いてボーツと空を見つめながら酒を飲む。

なんて優雅な時間なのだろう。

残念なのは、どう頑張っても一時間も経つ頃には酒が空になってしまったことだろうか。

さすがにこの量ではほろ酔いにすらならない。

まあ、とりあえずはここで時間を潰しておこうかな。

「あ、本当にいた」

そんな声を聞いたのはベンチに座ってから結構長い時間が経った頃だった。

声の主に視線を移すと、紙の袋を抱きながらこちらへと近づいてくるザラの姿があった。

「いやー、リリーたんがこっちにいるって言うから来てみたんですけど、百発百中なんですかね？」

「おそらくはな。で、フオローはうまくいったのか？」

「ああ、大丈夫です。まったく信じてもらえませんでした」

全然大丈夫ではないじゃないか。

「とゆーか基本的に姐さんはおれの話って聞いてくれないんですよ。近くに旦那がいるならまだマシなんですが、いないと最低限の会話くらいしかしてくれません。なんて言うんでしょう？ 警戒してる
とゆーか……」

「信用されてないねお前」

「現段階のあなたに言われちゃうんですか？ あ、これ差し入れです」

ザラが紙袋を渡してくる。

中には肉まんらしきものが数個入っていた。

「ついでに酒も買ってきてくんない？」

「図々しいといつかなんというか……ダメですよ。それ食ったら一緒に姐さんのところに行くんですから酒の匂いなんてさせちゃまずいです」

「あ、そうなの？」

「そうです」

なら、言い訳とか諸々考えておくか。

場所をジーナ達が泊まっている宿に移す。

ジーナの部屋の扉をノックするとすぐに扉が開き、中からリリーが飛び出してきた。

「おとーさん、おかえりー」

「ただいま」

じゃれついてくるリリーを抱き上げて部屋の中に入ると頬杖をついた状態で窓の外を眺めながら微動だにしないジーナもいた。

「しばらく視界に入ってくるなと言ったはずだが？」

そう言いながらもジーナの身体は動かない。

結果的に視界には入っていないのでセーフである。

「ジーナがそうしている以上問題ないよ。おっさんは視界に入ってはダメとは言われたけど話したくないとは言われてないから」

「ふん」

どうやら話を聞いてくれそうだな。

とゆーわけでリリーを降ろしてから今度はキッチンと、ただしギャンブルの辺りは適切なボカシを入れて説明した。
一応の配慮としてリリーの両耳は塞いでおく。

「一から十まで全てを信じることは出来ない」

「そっか、まあ人ってのは嘘つく生き物だからね」

「別に私は浮気だとかそんなことで怒ってるのではない。ただ、も

う少しリリーの父親だという自覚を持った行動をして欲しいんだ」
「浮気もなにも、おっさんとジーナは恋人でも夫婦でもないでしょ？
あ、もしかして知らず知らずの内にそんな間柄になってたの？
よし、わかった。リリーに妹を作ってあげようじゃないか」

ドラゴンは雌しか生まれないって前に説明されてたしね。

「ただの言葉の綾でそう言ったまでだ！勘違いするなっ！」

真っ赤になつてジーナが否定の言葉を言う。

まあ、おっさんも分かつて揚げ足取っただけど、そんなに力い
っぱい否定されるとただただ残念だ。

心のどこかで「リリーの妹作りは夜になってからだ」とか妖艶に微笑みながら返してくるといふ淡い期待をしてたよ。

「それはいいとして、リリーの親だって自覚をおっさん自身に促す
ためにプレゼントを用意しました。ザラ君、あれ持ってきて」

落胆する内心を覆い隠し、部屋の外へと呼びかける。

程なくしてでかいぬいぐるみを抱えたザラが入ってきた。
ずっと外でスタンバイさせてました。

「リリー、お父さんからのプレゼントだよ」

ぬいぐるみを受け取ってリリーに渡してやる。

「かわいい〜。おとーさん、ありがと！」

かわいいのはお前だよ。

「あなたのおなまえはヴェルトだね」

え、そんな名前なん？

もう少し子供らしいの付けて欲しかった。

「ジーナにもはい」

「は？」

ヴェルトと戯れるリリーとそれを見てなぜか鼻を押さえているザラを横目にジーナにもあらかじめ買っておいたプレゼントを渡す。

中身は数種類のヘアピンだ。

一個一個は高くないが十個はあるのでおっさんの少ない財政には痛手だったが、女性へのプレゼントでケチるような真似は避けたい。

「これは……」

「おっさん、デコ出した髪型が好きなんだ」

ジーナの普段の髪型である何の変哲もないセミロングも似合ってるので好きなのだが、これは別腹である。

「付き合ってもない女に興味を強要したプレゼントとか女にモテないタイプだな」

嘘、マジ？

そうなの？

やっべーよ、おっさんそうゆうこと結構やってんぜ。

「だが、無駄にするのももったいないからとりあえず受け取ってやる」

とりあえず受け取ってもらえたようで何よりだ。

「この町に長居する理由もないし、明日少し買い物をしてから町を出よう。いいな？」

「オッケー」

と、いうわけでその日はどこにも行かず、温泉に浸かり、旅館で出された食事に舌鼓をうちつつ、夜におっさんの部屋にきたリリーと共に早い時間に寝た。

次の日、食料などを買い込んだおっさん達は四人で昼食を摂り、魔^{アラジン}動式浮遊絨毯を広げるのに適した場所を求めておっさんが昨日時間を潰すのに使った公園へと向かっていた。

その間ずっとおっさんはクソ重いリュックを背負ってるわけだが、機嫌は超いい。

なぜなら、ジーナの髪におっさんがプレゼントしたヘアピンが使用されていたからだ。

生憎、デコ出しのためではなく、耳を出すために使用されていたのだが、それでも使ってくれるというだけで嬉しい。

もう何時間でもリュック持ちちゃうよ。

「ん？ あの女は……」

ジーナの髪を凝視していると、ジーナが前方を見つめた状態で立ち止まる。

その視線を追ってみると、スピカがこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

スピカの方もおっさんに気付いたようで、小走りに近寄ってくる。

「や」

「こんにちは。誤解が解けたんですね。良かったです」

挨拶すると、本当に安堵したという表情でスピカが応える。

「お蔭様でね。今から仕事？」

「いえ、今日はお休みなので買い出しに……。ところでその荷物は？」

「今から町を出るんだ。ここは旅の途中に寄っただけだから」

「そうなんですか。あの、お見送りしていいですか？」

「もちろん。この人はクラベジーナ。ジーナ、この娘はスピカ」

ジーナとスピカにお互いを紹介する。

「このバカが迷惑をかけたな」

「いいえ、わたしこそご迷惑をおかけしてしまいました」

スピカが深々と頭を下げる。

そこまで恐縮せんでもいいのにな。

「で、この子がリリー。おっさんの娘で天使です」

「こんにちはー」

「こんにちは。かわいいね」

リリーのかわいさがわかるとは中々のもんだ。

「で、こいつはロリコン」

「違うっつーのー！」

「あははは。よろしくお願いします」

ザラは特に紹介しなくてもいいよね？
とゆーことでちゃんとした紹介はしない。

スピカは若干気圧されていたようだが、わりと和気あいあいとした
感じで公園までやってきた。

そして拓けた場所を見つけて魔動式浮遊絨毯アラジンを広げる。

なんかピクニックに来てビニールシート広げてるみたいに見えるな。

「あ……」

いざ四人が魔動式浮遊絨毯アラジンに乗って飛ぼうとした時、スピカが何か
を発見した。

少し遅れておっさんも同じものを見つける。

「どうした？」

ジーナも視線を辿るが、おっさん達は何を見つけたのかはわからな
いだろう。

スピカとおっさんが見つめる先に居たのは一人の金髪男の姿。

いや、正確には一人ではなく女性と仲良さそうに腕を組んだ状態の
男。

名前はハルン。

スピカと付き合っているはずの男だ。

「あ、スピカ」

スピカがハルンに向かって止める間もなく駆けていく。
こんなところで修羅場なの？

「なんなんだ？」

「あつちにスピカが付き合ってる男が女連れでいたんだ」

「うわぁ……」

疑問符を浮かべるジーナに説明してやるとそれを聞いたザラが明らかに嫌な顔をした。

その感情には同感だ。

「ちょっと行ってくる」

「面倒おこすな」

「まあまあ、姐さん」

三人をその場に残し、おっさんはスピカの後を追った。

「ハルンっ！」

スピカが声をかけるとハルンは隣の女に向けていた視線をスピカに向ける。

「ちっ、なんでここにいんだよ」

「その人誰？」

「誰って、彼女」

「あんたこそ誰よ？」

ハルンの隣の女がスピカへと問い返す。

「わたし……わたしは……」

「ほら、前に言ったことあんだろ？」

「ああ、あの金づるの女？」

「そう、そいつ」

スピカが言い淀んでいるとハルンが女に説明してやる。
金づるとはまた酷い。

「ハ、ハルン……」

「んだよ？」

「えっと、わたしたち付き合ってるんだよね？」

縋るようなスピカの視線をハルンは鼻で笑って散らした。

「この状況見てわかんねーの？ 鈍いなー。つかさ、風俗やって誰にでも股開くような女とこの俺がマジで付き合うとも思ってたわけ？」

「そんなんっ！ お金が必要だからって風俗のお店を紹介したのはハルンでしょ？」

「キャハッ、え、この女そんなに風俗に勤めたわけ？ あったまわるーい」

「だろ？」

二人がスピカを笑う。

女のキャハッって笑い声におっさんイラッとききました。

「嘘……嘘だよね？」

スピカがハルンに近づき、袖を掴む。

だが、それはすぐに離すこととなった。

鈍い打撃音とともにスピカが地面へと転がった。

「うつぜーんだよ！ ばれた時点でもうお前いらねえんだよっ！

さつさと消えるよ」

あの野郎、女殴りやがった……
しかも悪びれた様子など微塵もない。

スピカは殴られ、赤くなつた頬を押さえながら上半身だけを起き上がらせる。

その目には涙が滲んでいた。

「いい加減にしろよ」

もう我慢は出来ない。

おっさんはスピカとハルンの間に立ち、ハルンを睨みつけた。

「誰？　つーか関係ない奴は引つ込んでくんない？」

「関係なくはない。スピカは友人だ」

だからこそ、こんな目に合わせるなんて許せない。

「スピカの友達？　こいつにそんなのいたのかよ。あ、もしかして
お前、昨日こいつの部屋に隠れてた奴か？」

「だったらどうした？」

否定はしない。

なぜならそれは事実だからだ。

「だったらそれやるよ。俺、もういらないし。ま、そいつのテクは
惜しいけどな」。店で仕込まれたのかしんないけど中々良かったろ
？」

「黙れガキ。お前みたいなのをクズって言うんだ」

「はあ？」

なぜ、スピカがおっさんのとこに來たのかちよつと疑問だった。
人を殴ったこともなく、氣を失ったおっさんをわざわざ自宅に運んで介抱して飯まで用意するような優しい女がどうして金を払ってまで人を蹴るのか。
そりゃ、こんなクスと付き合つてたら蹴りたくもなる。

「言つとくけど、おっさんとスピカに合体履歷なんてもんはない。
本当にただの友人だ。おっさんが隠れたのもスピカはただお前に誤解されたくなかつただけだ」

「だからどうした？」

「どうもしない。事實を教えてやつただけだ。ま、そんだけ好かれてるのにこんな仕打ちはあんまりだ」

「うっせーよ」

「やめてっ！」

ハルンが殴り掛かつてくる。

スピカの悲鳴が聞こえるが、それでハルンの拳の勢いが弱まることはない。

だが、おっさんはあえてそれを避けることはせずに顔面で受け止める。

「ぐわっ」

うめき声をあげたのはハルンの方。
おっさんにも少なからず痛みはあったが、こんなもの蚊に刺されたようなものだ。

「そんなヘナチヨコパンチなんて効かねーよ」
「くそっ」

更にハルンが殴り掛かってくる。

だが、その攻撃は衝撃無効のスキルもあり、おっさんを微動だにさせることは出来ない。それにプラスして打撃耐性のスキルでダメージはほとんどない。

「お前の気持ちはどうであれ、スピカと付き合ってたのは事実だろ。あの時、お前は浮気だなんだとスピカを怒鳴りつけてた。それが証拠だ」

「くそっ、効いてねえのか!？」

「だが、実際はお前の方が浮気してんじゃないか。自分は柵にあげてよくもまあ言えたもんだ」

拳を握りしめる。

「結論はどう帰結しようともお前がクズで揺るがない。そして……いい加減一方的に殴られるのも限界だ。正当防衛だ、歯あ食いしはれ」

「ひっ」

拳を振り上げる。

ハルンはとっさに手で顔を庇うようにするが関係ない。

おっさんはそのまま拳をハルンの顔に叩き込……まずに股間を蹴った。

「なっ」

「どうだ! ついこの間食らったばかりのおっさんの苦しみは!」

「あれは痛い」と誰かが呟いたのが聞こえた。

ちらりと背後を振り返ればジーナ、リリー、ザラをはじめとしたギ

ヤラリーが出来上がっていた。
目立ってる。

おっさん、目立っちゃってる。
よし、決めゼリフだ。

「いいか、例え女が浮気しようともそれは繋ぎ止めきれない男のせい。そして、男の浮気は単なる発情。浮気するなら墓場まで持つてく覚悟でしろ」

ビシッとハルンに指差しながら言い放つ。
決まった。

「女を金づるとして食い物にしてるクズに対する説教だろ？　なんで浮気云々になってんだ？　なんか話微妙におかしいか？」

「とゆーかよくよく聞くと浮気否定してませんよ」
「おとーさんかっこいい」

リリー以外には不評なようだ。
あれ、おっかしーな……

「と、とにかく、二度とその汚い面スピカに見せんじゃねーぞ。その場合、生涯EDで苦しむことになるって覚えておけ」

まあ、感触的にしばらくは機能しないだろうがな。

「立てるか？」

スピカに近づき、手を差し出す。

「はい」

スピカがおっさんの手を握ったので立たせてやる。

「移動しよう」

そうしてスピカをギャラリーを掻き分けて進み、その場からそこそこ離れたベンチに連れていき、座らせた。

「これを頬に当てとけ」

ジーナが濡らした布をスピカに渡すとありがとございますと呟いて受け取り、黙ってそれを頬に当てた。

「バカですね……わたし」

スピカが自嘲気味に呟く。

「騙されてるって心のどこかで思ってたのに、それでも彼はわたしを好きでいてくれると思ひ込んでた……」

スピカの目から涙が零れる。

女に泣かれたらそれが例えどんな相手でもおっさんにはどうすることも出来ない。

ただ、スピカの頭を撫でてやった。

確かにバカだとは思ふ。

でも、それだけ人を好きになれるってことは悪いことではない。ただ、その感情を向ける相手が悪かった。

「お前は男を見る目がないな。男なんて皆バカでクズだが、あいつ

はその中でも特上だ。今度はもう少しマシなバ力を選べ」

ジーナがスピカに語りかける。

これって一応慰めてるんだよね？

おっさんそう取っちゃうからね？

「だいじょーぶ？」

「うん、大丈夫。心配してくれてありがとね」

リリーがスピカの膝に手を置いて問いかけると無理矢理作ったような笑顔で答えた。

だが、それも一瞬のことで今度は顔を伏せて泣き出してしまった。

ジーナがスピカの隣に座り、その背中に手を置いて宥めるように撫でるのをおっさんはただ見ていることしか出来なかった。

スピカはひとしきり泣くと今度は無理矢理作ったような笑顔ではなく、自然な微笑みを浮かべていた。

「もう大丈夫です。すいません、わたしのせいで出発を妨げてしまつて……」

「問題ない」

「いえ、本当に申し訳ないです。わたしは本当に大丈夫ですから出発なさって下さい」

「だが……」

「いつまでもわたしのために出発を遅らせてしまうのは心苦しいんです」

「そうか、よし出発するぞ」

ジーナは切り替えが早いな。

おっさんはまだ気になるんですけど……

急ぐ旅でもないんだし、スピカが本当に落ち着くまでこの町に居てもいいのではないだろうか。

「あんまりスピカを困らせるな」

そう言ってジーナに引きずるようにして連行された。

「ではな」

「はい。クラブジーナさん、お元気で。わたし、男を見る目を養います」

「そうか」

全員が魔動式浮遊絨毯に乗った状態で別れの言葉を交わす。

「おねーちゃんバイバイ」

「うん、リリーちゃん元気でね」

「うん」

元氣よくリリーが頷く。

「ラルドさん、また会えますよね？」

おっさんに対してスピカが言った言葉。

この意味はもしかして……

「おっさんに惚れちゃった？ 悪いんだけど……」

「あ、違います」

即否定入りました。

「友人として、また会えますか？」

恋愛的な面で期待してたわけじゃないけど、即否定されるのは普通に傷ついちゃうからね。

でも、スピカは別に好みのゾーンというわけじゃないし、まあいいか。

「ああ、必ず会いにくるよ。またケツを蹴られるためにね！ その時はトゥーキックは禁止だかね」

「……ええと」

「反応に困ることを言うな。普通に別れる」

では、仕切り直しまして……

「またね」

「はい」

絨毯が上昇する。

その高度はぐんぐん上がっていく。

「クラブジーナさん、リリーちゃん、ラルドさん。また会える日を待ってます」

不意に下の方でスピカの声が聞こえた。

リリーが身を乗り出して手を振るのを落ちないように固定する。

高度を上げた絨毯が前方に進み出すまでそれは続けられた。

アラジン
魔動式浮遊絨毯は進路をタファンの森へ向け進む。

「おれ、すんげー空気扱いだった……。最後名前呼ばれねーし」

そしてザラは誰のツッコミも受けずに一人嘆いていた。

おっさん、決める？（後書き）

一話に纏めようとして結構唐突かつぎゅうぎゅうになって申し訳ありません。

ただ、おっさんの別れの言葉のために書いただけなもので……

ここで一つ裏設定を

ハルン ↓ 『尿』

ヴェルト ↓ 『世界』

共にドイツ語です。

名前からして色んな悪意に満ちてます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0990y/>

オッサンの異世界記

2012年1月5日18時46分発行